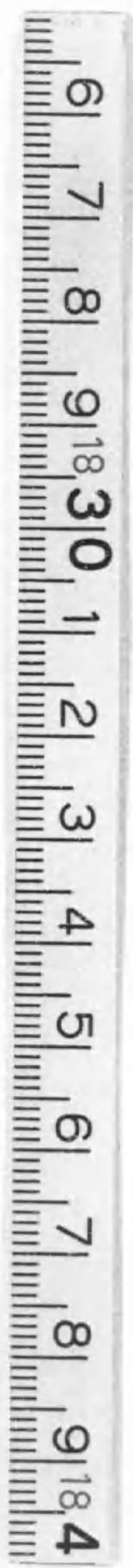


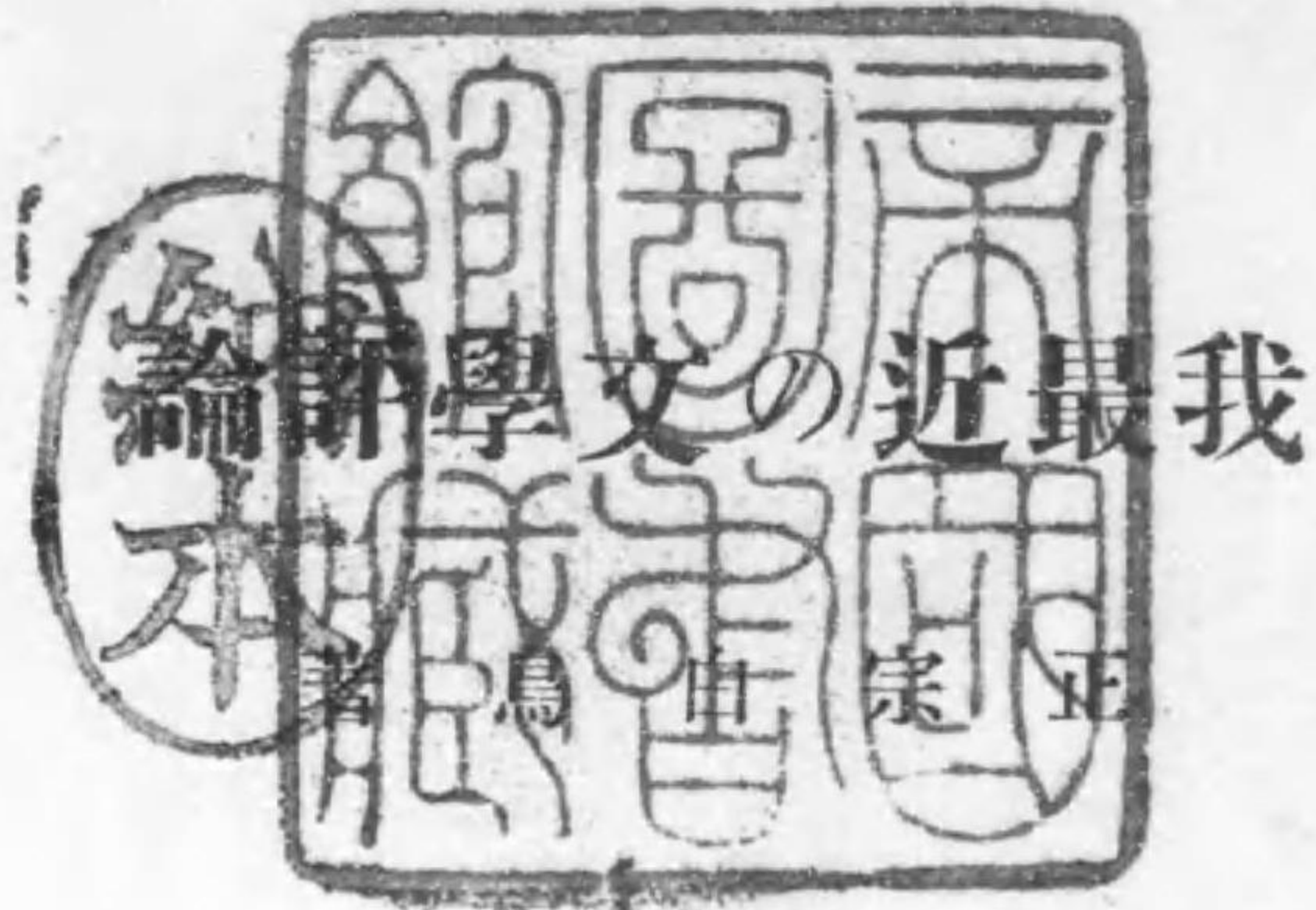
59
21



始



特217
628



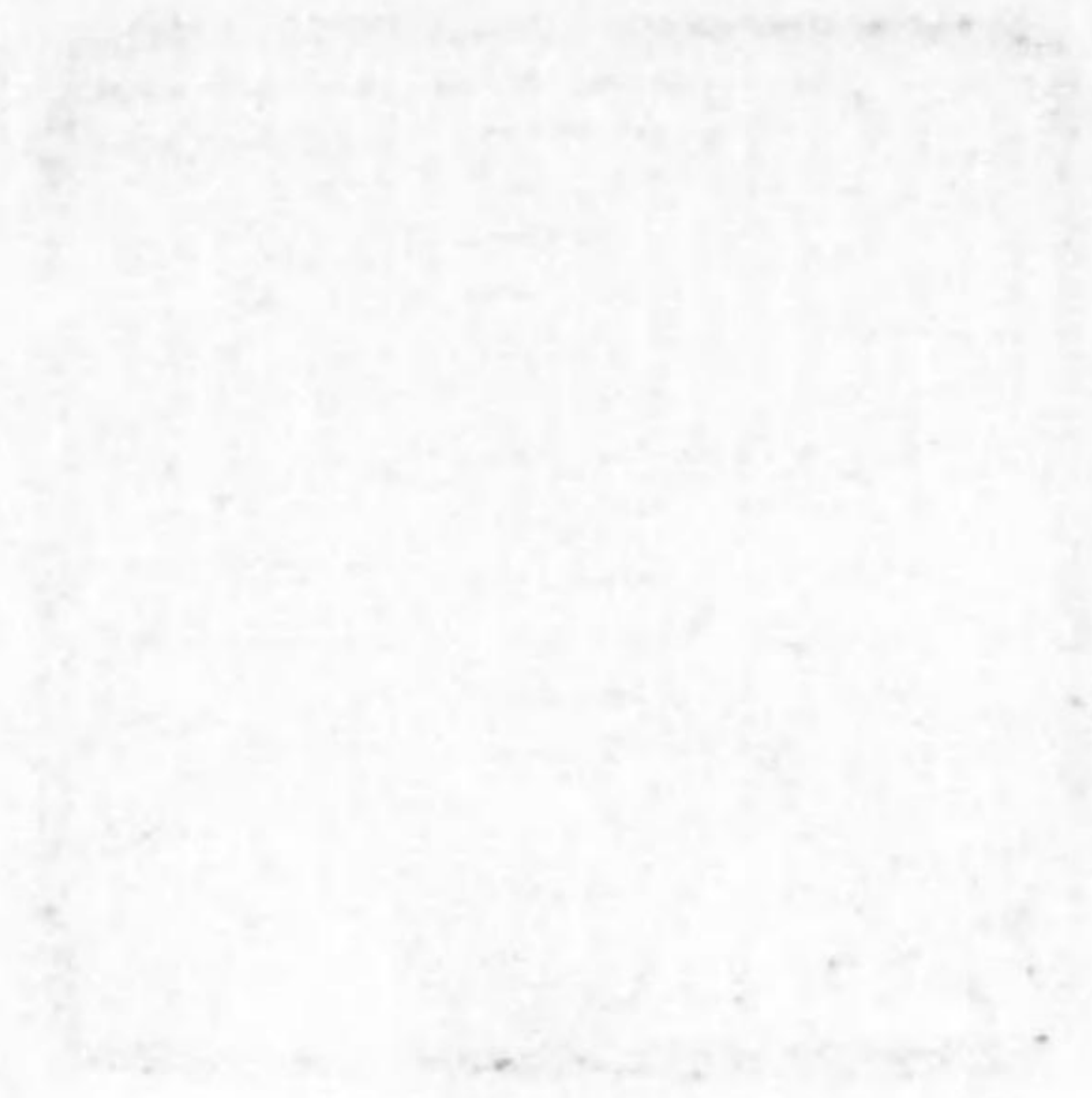
659-21

横光利一論	二五
久保田万太郎論	三
宇野浩二論	五
山本有三論	五
大衆文學論(一)	七
大衆文學論(二)	七
西洋の文豪と女性	九
或文學論その他	二五
諷刺小説について	一九九
英譯「源氏物語」その他	一七三
再び英譯「源氏物語」につきて	一八七
輕井澤にて	二〇九
旅人の心	三三
西鶴につきて	三三
「坊っちゃん」につきて	三三
文藝院につきて	三五
明治劇壇總評	三六

我最近の文學評論



橫
光
利
一
論



「寢園」を通讀した。それから、新年號の「改造」所載の「受難者」と、「中央公論」所載の「春」とを讀んだ。いづれも熟讀した。どれも一度讀んだだけでは印象不鮮明なので、二度讀返したのである。私は、横光氏の小説は、これまで文藝月評をやる時に、幾つか讀んでゐる筈だが、顧みると印象が甚だ乏しい。氏は創作にのみ全心を注いでゐる人らしく、他の作家のやうに時々評論とか感想とかを書いて、鬱憤晴らしをしたり、生活費の足しにしたりすることのないその點甚だ珍しい人のやうに思はれるが、兎に角、私は氏の小説以外の文章は一度も讀んだことがない。面識はあるが、さしたる話をした覚えはない。それ故、この横光利一論は、三篇を基礎として作り上げられたもので、私自身少し危かしく感ぜられてゐる。完全に一人の作家を論評するには、その全集を讀まなければならぬので、私は、これまでに論評した明治の作家についても、讀殘した作品を後で讀んで、新たな発見をしたことも少くない。横光氏の如く將來に富んだ作家については尙更さうである。だが、他日の是正を豫期しながらも、二三の作品を通して或作家を討究することも、自己の頭腦の練磨のために、私に取つて必しも無用ではないのである。

外國文學の鑑賞は甚だ困難であるが、それでも、定評ある名作を讀むと、心が打たれる

のである。老いては青春の書は理解されぬであらうと思はれるのに、私は、この頃、ある必要から「即興詩人」を手にしてところ／＼見てゐるうち、興味に驅られて、首尾を通じて讀了した。これでこの小説を少くも三回は通讀した譯だが、青年時代にはじめて讀んだ時よりも、却つて深く身に染みて感ぜられた。戀愛と藝術と宗教とを融和した夢物語であつて、現在の私の心境とは遠ざかつてゐる世界であるのに、私は讀んでゐるうちは、この青春の夢に浸るやうになつた。西洋物でも最近の文學は、私にはやゝこしく讀みづらくて、何のことやら分りにくくて、さういふものに接するたびに、私の頭の古さが歎ぜられるのであるが、それでも、例の「ユリシイズ」の最終篇の第十五挿話を、岩波版の翻譯で今讀みかけると、すばらしく面白さうなので、はじめから讀直さうかと企ててゐる。横光氏も、日本現代の最新傾向を心に宿してゐる作家であるらしく、従つて西洋の作品についても、二十年前の日本の青年作家が、イブセンダのモウパッサンだのを憧憬してゐたのとは趣きを異にして、英佛あたりの最新作文學を自分の創作の肥料としてゐるやうに思はれる。「寢園」のなかには、作中の人物に佛語でコクトオの詩を學ばせてゐるし、「春」のなかには、作中人物をして「ユリシイズ」のある描寫を思出させてゐる。徳川時代の漢詩人は、唐詩を模倣し、唐詩の模倣を模倣し、次いで宋詩の模倣に轉じ、森槐南父子によつて清朝の詩風を移植するに至つたさうであるが、明治の西洋文學追隨は、交通便利の現代であるから、

急速に進んで、今は西洋と時の隔てなく、歩調を合せるやうになつたと云つていい。さう云つても、私は横光氏の小説が、西洋のどの作家の感化を受けてゐると云ふのではない。受けてゐるかゝないか、東西文學比較は私のなし得るところでないが、多分誰れの感化も受けてはゐないのであらう。元來明治以來の西洋文學の影響なんて極めて皮相なもので、徳川時代の漢詩の支那模倣程度にも達してはゐないのである。模倣したつもりでも、本當は模倣でなくつて、日本の作家の個性を出してゐるとすると、却つて結構な譯である。横光氏の小説には、外形的にも内面的にも、私が親しんでゐた明治の小説とは異つてゐる趣きがありさうなのだが、それが私の心に攝取すべくどれほどの價があるのかと、私は目を尖らせて氏の作品を読んだ。

「改造」や「中央公論」の新年號に同時に掲載されてゐるくらゐだから、世上の小説好きの讀者に喜ばれてゐるのであらうが、私に取つては氏の小説は、所謂「小説的興味」をもつて気軽に讀まれる種類のものではない。「春」はすら／＼と讀めたが、數ヶ月前の雑誌で「母」を讀んだ時にも、今度「寢園」なんかを讀んだ時も、私の心は重苦しかつた。私は、數十年來いろ／＼な小説を讀馴れてゐるが、食物と同様で、先天的に自分の舌に適しないものも多いのである。だが、私は興味ばかりで小説を讀んでゐるのではない。心の糧として文學に對してゐることもある。難解な文學その他の書を努力して讀んで、そこに潛んでゐる人

生の眞味を知り得たら、最も愉快なことだと思つてゐる。

二葉亭の「浮雲」に於て、日本の小説でもはじめて心理描寫が丹念に試みられ、今から見ると、それが平凡であるとともに正鵠を得てゐるやうに思はれるが、漱石とか龍之介とかの小説には、その心理解剖も、なか／＼捻つたものとなり、凝つたものとなつた。微妙な心理の動きを擱んでゐるよりも、知識の遊戯に過ぎない感じのするものも少なくなかつた。昔は性格描寫の必要がよく唱へられたことがあつたが、それは大抵は大まかなものであつた。

横光氏は、好んで人間心理の交錯に注意しそれを解きほぐして事態を明晰にしようとしてゐる。「母」なんかは、當代の小説のうちでも手の込んだ心理研究であつたが、私は數ヶ月前にあれを讀んだ時に、人間の眞相が觀察されてゐるのに感心するよりも、何となく煩はしく思つた。どうして私の心に感銘するところが稀薄なのであらうかと疑はれた。「春」は、「母」よりも「受難者」よりも、作者が軽い氣持で書いてゐるのであるが、却つて私には豊かに感銘された。藝術の肌面もこまかい。そして、「春」や「母」や「受難者」の筆法が一層調つて、融和されて、最もよく作者の持前の小説味を備へてゐるやうなのが、「寢園」である。この小説は、この作者の長篇であるばかりではない。質に於ても、作者この頃の代表作であるにちがひない。

「寢園」は、一つのサロン小説だと云つてもいい。日本には有閑婦人連のさういふ社交會はまだ出現してゐないやうだが、西洋風俗の追隨がそこまで進んで行つたら、婦人達が夜會とかお茶の會とかに集つた時に、好んでべちや／＼と噂にするであらう種類の人事がここに取あつかはれてゐる。題材ばかりではない、作者の書きつ振りがこの種類の小説の見本に相應はしいのである。婦人雑誌なんかの通俗小説には、有閑婦人の情事が語られてゐるのであらうが、そして、「寢園」と筋立てを同じうしたやうなものがあるのであらうが、そこには、所謂書生芝居以來の「新派劇」と、自由劇場以來の新劇との相違がある如き相違があるのぢやないかと思はれる。そして、「寢園」には、別段新時代の男女を書かうと企ててゐるらしくはないのに、場面が新しい空氣を漂はせてゐる。目醒めた女を書かうとか、暴露的にブルジョアの女の裏面を書いてやらうとかいふやうな、世俗的な勇猛心を發揮した種類の小説とは異つてゐながら、また、「寢園」といふ題目が支那趣味を現はし、延壽太夫の「十六夜」讀美が江戸趣味をほめかしてゐるに關はらず、私は、そこに西洋風のサロン趣味の匂ひを感じるのである。曾我廼家の芝居を面白がつて見たり、帝國ホテルのクリスマスといふ外國の祭に列席するのを特殊の楽しみにするやうな現代では、まだ婦人の社交會が、「寢園」を話題にし、かういふ小説と歩調を合せはしないだらうが、日本も國運が隆盛になつたなら、かういふサロン小説が續出し、従つてもつと巧妙なものが續出するや

うになるのだ。平安朝時代の「源氏物語」その他の多數の物語も、あの時代らしいサロン小説であつた。

「寢園」には、「高が奈奈江を、奈奈江が梶を、藍子が高をとめぐつてゐる霧の中」といふ文句がはじめの方に出てゐるやうに、輕井澤の霧の中を、大學院の經濟學生だの、現在の夫に満足しない有産階級の中年女だの、破産状態に陥りかけてゐる獨身の中年男だの、フランス語の稽古なんかやつてゐる結婚前の女だのが、臙ろげな姿を現はして、互に追ひつ追はれつ、呼びつ呼ばれつしてゐる様を寫して、全篇の序曲とし、次第に霧が霽れてクッキリと皆んなの姿が浮ぶやうに、人さま／＼の行動と心理の描寫の筆を進め、天城山の猪狩を一篇の焦點とし、趣向の立て方が忠臣藏の五段目と、同巧異曲と云つたやうに、中年女をして猪とあやまつて夫を打たせてゐる。そして、忠臣藏では、勘平の心理の動搖がただ表面的に解釋されてゐるに反し、ここでは、中年女が夫を打つたのは、猪の突撃から夫を救はうとしたためばかりではなく、彼女の潜在意識に、夫の死を願つてゐたのが、意外な事件につれて突發的に現はれたのではないかと、その點を一篇の心理研究の焦點としてゐる。この事件の餘波が波紋を描き／＼してゐるうちに、窮極の收まりがつくことになつた。潜在意識が表に現はれ形を取つたと云つていい。

首尾を通じて全篇の組立てが用意周到であつて、作者が筆を採る前に如何に頭腦を勞し

たかが私には察せられる。私は横光氏について個人的に何の知るところもないから、見當ちがひをしてゐるかも知れないが、「寢園」一篇によつて判断すると、この作者は案外明晰な頭腦の所有者であるらしい。漱石の小説なんかは明治の作品のうちでは筋の運びが行届いてゐて、理詰めで押して行つてゐるところも多いが、だが、漱石は、あふるゝばかりの詩才を、即興的に發作的にぶちまけてゐるので、全體の釣合ひなんか無視されてゐる。横光氏のは形がよく調つてゐる。四五人の人物を相當に書き分けてゐる。感傷的な女を取扱ひながら、婦人讀者を喜ばせるやうな抒情趣味の濫費をしてゐない。自己の藝術に忠實であると云つていい。……それに關はらず、私はこの小説を、さ程の興味をもつて讀通せなかつたのみならず、讀後の印象も稀薄であつたのだが、それはどういふ譯なのであらうか。私は自己の小説鑑賞力を反省した。私は辛い小説に感心するばかりではない。「即興詩人」風の甘味たつぷりの小説にも舌鼓を打つのである。それで、甘味の多かるべき「寢園」に甘味が缺乏してゐるために物足らないのであらうか。多くを説かずして、簡にして要を得させようとする書振りが私に理解されないものであらうか。一篇の中心人物たる奈奈江の氣持は私にも作者とともに辿つて行けないことはない。猪の代りに打たれて、生死のほどの危まれた夫が次第に回復しさうになるのを見ると、重荷をおろしたやうな喜びを感じるとともに、ふと、彼女の頭に、夫がまだ傷つかぬ前の、日々の二人のどうしやうもない物憂げ

な長い生活の姿がちらりと浮んで、「あゝ、またあれか」と思つて憂鬱になるあたり、また終りに近づいた所の、「彼女が火の消えかゝつてゐる火鉢の縁で手をあぶりながら、肉の落ちて光澤の消えた指さきを見てゐると、若い義妹の藍子のつや／＼した爪や頬の血色が浮んで来て、あゝ、たうていこれはあの藍子の敵ではないと、急に火鉢の縁から手をひつ込めずにはゐられなかつた」あたりの氣持、おのれを頼んでゐた女が自己不信に陥り、やきもきするあたり、さういふ氣持に押され／＼して、つひに夫を棄てて意中の男を追つて行く徑路は、私にもよく同感される。延壽の美音で「朧夜に、星の影さへ二つ三つ」と、唄ひだされるのを聞くと、ぞく／＼と手首から腕を傳つて鳥肌になつて、「これはいよく危い、逃げよう」と思つた棍といふ男が、女を逃げたり避けたりしながら、一方でいやに女に拘つてゐる氣持は、私にもどうにか受入れられないこともない。結婚前で、まだ男をよく知らない藍子が、周囲のどの男をも好きになつて、「特に一人と結婚するなどといふことは、誰も彼もと一緒に結婚することと同様」なやうに思はれて、「みんな、あたしと、いつときにとつと結婚してくれないものかしら」と思ふあたりから、義姉の行爲に接觸するにつれて、知能と情緒が啓發する徑路は、私にも分らないことはない。人のいゝ夫である仁羽には、作者はむしろ好意を持つてゐるらしく、妻に逃げられたのも知らないで、トラップの連中と競技に耽り、「仁羽は銃の音を聞きつけるがいなや、もう今までとき／＼顔面をかすめて

ゐた不安な影は全くなくなつて、眼を細めながらも、うつとりと空の一方を見上げたまま、こやかに笑つてゐた」と、一篇の結末を、仁羽の晴々した表情に求めた作者の心遣りに、私は同意しないでもない。ここに引用した二三の詞句によつても一端が窺はれる如く、この作者は、人間の言行と周囲の事物とを相連關させてゐる。輕井澤の霧の中の暗中摸索の戀愛心境、猪狩の場の激動的心理は無論のこと、「肉體の衰へを歎ずる時の火の消えかゝつた火鉢」「清元の音曲を後に聞かせながら、服装など江戸風に凝つた下町趣味の中年の男女の立話」「天城の重大事件を思出させる銃の音を聞きながら、銃の音の深刻な意味には、少女の藍子ほどにも氣づかず、顔面の晴れ晴れと、うつとりして微笑することによつて一人物の性格を示す象徴的表現」その他、隨所にこの作者の志してゐる表現法描寫の態度が見られるのである。

私にはこの作者の狙ひどころは大抵解つたやうな氣がしだした。技巧のうまい作家だと思ふ。……さう思ふに關はらず、私は「寢園」に魅惑されなかつた。これほどよく書いてゐるに關はらず、人生の現實感が切實に私の胸に迫つて來なかつた。うまく作られたる小説とのみ思はれる。簡潔なのが、底の深い人生を暗示してゐるのではなくつて、これつきりと思はれる感じがする。前にも引用したやうに、人間の戀愛心理なんかを洞破してゐるところが少くないのだが、それ等はたゞさういふものを並べてゐると思はれて、人間そのもの

が潑刺とした生命を何となく缺いてゐるのぢやないかと疑はれる。作者の傍觀的態度に原因するのであらうか。人生よりも藝術を主とする作家の作品に、我々がやゝもすると物足りない思ひをすると同様の物足りなさを「寢園」に於て、私は感じたのであらうか。作者に人間心理洞察の目は傑れてゐるにしても、この題材になつた社會を熟知してゐないので、さういふ社會の光景がいき／＼と描出されなかつたためであらうか。梶の破産の苦惱は無論のこと、奈奈江が刑事上の罪人となりさうな時の苦惱でも、痛切でなく、むしろ空々しい印象を私は受けたが、これは、作者が意識してさういふ書き方をしたので、物狂はしいやうな苦悶や激情を露はに書くのは、作者の好みにはなかつたのであらうか。

この作家は、人間の弱點をも見る目を備へてゐるに關はらず、概してどの人物に對しても好意を有つてゐる。冷酷な作家ではない。辛辣な作家ではない。それとともに、情熱の作家でもない。人生態度が微溫的である。

私は、横光氏の處女作以來今日に達するまでの作品をろくに讀んでゐないので、どういふ徑路を取つて自己の藝術の完成に向つて進んだのか知らないのだが、「寢園」は、形の點ではよく調つた小説としての完成品であると思ふ。完成品過ぎるくらゐの完成品である。ここまで達した修養は容易であるまいと察せられる。しかし、かういふ形が完成すると、形を破つて進んで行くのが容易ではないと思はれる。完成美はいゝが、それで小さく固ま

つてしまふのは、どの方面の藝術家についてもつねに憂ふべきことなのだ。

さつき、私は、「寢園」の作者の人生態度を微温的だと云つた。小説家としての芥川龍之介は、史上のさまざまの人物や事件に對して特異の鋭利な心理研究を試みて我々を喜ばせてゐたのであつたが、晩年、「玄鶴山房」とか、「河童の何」とか「阿呆の一生」とか云つたやうな作品に於て、自己に對しての鋭利な心理討論の目を向けるに向んで、遂に自分の生命を亡ぼすに至つた。葛西善藏などは物質的に突詰めた生活をしてゐて、作品に於ても自己の實生活を直寫してゐたのであつたが、彼れの心理討論なんか常識的で大まかであつた。ちつとも恐ろしくもない、凄くもない。夏目漱石は學究視されてゐたが、「心」や「行人」に現はれたところによると、彼れの自己心理追究は彼自身を悩ましてゐたものではあるまいかと私には疑はれる。横光氏も他人の心理を見詰めてゐる眼を自己の上に轉じだすと、とても「寢園」程度では濟まないだらうと案ぜられる。無論「寢園」には作家の體驗に據つたところがあるのであらうが、それ等は斷片的でもあるし、悠長に鑑賞してゐる程度である。サロンのお話である。

私は、林房雄氏の「青年」を快く讀んだが、これを「寢園」に比べると、どちらにも新味があるにしても、その新味の感じは著しく異つてゐる。「青年」はぶつつけに書かれたやうな小説で、すらくと筆が運んでゐて、讀者も讀み易い。作者の目のつけどころも露はに示されてゐて、人物の解釋も單純である。かういふ態度の文學はやゝもすると淺薄に墮する恐れがあるが、作者の手腕に弛みがなかつたら、テキパキした明快な感じを讀者に與ふるものである。「寢園」のやうな態度の文學は世相人事の底へくゞつて行くやうなものだが、やゝもすると萎げた生氣のないものを、一しよ懸命に苦勞して作出すやうになり勝ちである。

ここで、私はベルグソンの哲學を思出した。この哲學者の所論は、現代の心理學研究者にも、現代最新派の小説家にも強い影響を與へてゐるさうである。ベルグソンは、「潜在意識の討論」「精神の底へくゞるともぐり込んで人間の正體を突留めること」を主唱するとともに、「萎縮停滯を憎んで、自由にのびくゞると自己の生命を伸長させること」を重要視してゐるらしく思はれるのであるが、私には、この相異つた二つの教へを心に保持して互に背くところなく、吾人の生活を續けることは容易くないだらうと危まれる。藝術の創作に於てもこの二つの態度を徹底的に守つて行くことは、甚だ困難でありさうに思はれる。精神（すなはち意識）の底深く討論し續けることによつて、必しも豊かな希望、さんらんたる光明が発見されるとは限らない。精神の洞奥は、天國の光に満ちてゐるとは云へまい。地獄の影を濃厚に映してゐるかも知れない。若し、ダンテが見たやうな地獄の姿を精神の底に見續けながら、少しも屈するところなく、自由にのびくゞると、ベルグソンの云ふ歡喜の聲を揚

げて、自己の生命を強く發展させることは、常人の敢てなし得ることでない、私には思はれるのだ。例證として擧げるには、品物が貧弱であるが、「寢園」にいくらか現はれてゐるやうに、心理の底を搜索し、潜在意識の底までも鋭利な凝視の目を向けだしたら、自由にほがらかに筆を運んでゐられなくなるかも知れない。「青年」のやうな作品に明快な趣きがあるのは、表面的思想、表面的の心の動きだけを捉へて、それに安んじ、潜在意識なんか面倒くさいものに思ひを及ぼさなかつたためではなからうか。猪を打つたのは猪を打つたので、猪を打つつもりで夫を打つたのは、猪を打つつもりで夫を打つたので、さういふ點で、止め度なき疑問を、「寢園」風に起さなかつたため、誰れにでも分るやうに明快に事が運んでゐるのではあるまいか。

世界文學史上に新しい領地を拓いたと云はれる「ユリシーズ」なんかには、意識の表面を描いた在來の寫實主義文學とちがつて、前人未踏の精神の洞窟を觀破しながら、勢ひよく生命の踊躍を覺えてゐるのであらうか。私にはまだ分らない。新しい哲學の創設は天才の傑出した頭腦に基づくのであるが、その哲理に刺戟されて新しい藝術が産出されるのは、一層困難なことで、非凡な天才に俟たなければならぬのである。ジイドとかヴァレリイとか、ジョイスとかは、ベルグソンが哲學に於て爲した如くに、文學に於て新生命を把握したのださうだが、かういふ人々も、理論以外に、純藝術としては、どれほどに完成したものを

出してゐるのであらうか。直接或は間接に西洋の感化を受け續けて來た日本の文壇に、まだ意識の表面を描いた寫實文學すら十分の效果を示してゐない日本の文壇に、西洋新興の文學がどの程度の影響を及ぼして、どの程度の新しいものを産出させるであらうか。

私は横光氏について知るところが極めて少い。「寢園」をも愛讀したとは云へない。しかし、この一篇には、うまいとかまづいと、面白いか面白くないとかいふ、通り一片の批評で片づけられる以外の、特異の創作家的素質は感ぜられる。その素質が豊かに伸びるか、このまゝ萎縮するか豫想はされないが、……或は、明治以來の數多の文學をして光を薄らがしめるほどの作品が、この作家の頭から創出されるかも知れないと、私に思はせるものが、この「寢園」には何となくほのめいてゐる。

ベルグソン云はく、

「わが構想を實現した藝術家、發見或は發明した學者の精勵するのは榮譽の爲であつて、その惹起する賞讃が彼等に最も強い歡喜を與へるのだと説く者がある。

何たる誤りであらうか。人が名譽と讚辭とに執着する強さは、成功したといふ自信の弱さを示す正確な尺度である。……他の贊成を求めるとは、自からの不安を蔽ふがためであり、わが製作の恐らくは不十分な生氣を支持するために、これを諸人の熱い賞讃の裡に包まうとすること、恰も早産の嬰兒を綿のうちに置く如くするの

である。しかし、自信のある人物、一の生きた且つ生き續き得る作品を産んだといふ絶対的の自信を持つ者は、讃辭を不用とし、榮譽を超越する。それは彼が創造者であり、自^きから創造者であることを知つてゐるからである。そして、これによつて彼の體驗する歡喜が神聖な歡喜だからである」(小林市太郎氏の譯文より)

私は、横光氏のやうな新代の作家とともに、哲人のかういふ言葉を熟考したいと思ふ。

(昭和八年二月中央公論)

久保田万太郎論

西洋の美術については、幾人かの名人巨匠の名前を漠然聞覚えてゐたに過ぎなかつた私
が、はじめてルーヴル美術館に入つた時には、呆氣に取られて、きよと見渡してゐた
に過ぎなかつたが、そのうち、何かしら私の心を惹いた幾つかの繪畫の一つに、マンテニ
ヤ (Mantegna) の「バルナツサス」といふのがあつた。無論私はそんな畫家の名は知らな
かつたのだが、私が生來見たことも夢見たこともないやうな藝術世界がそこに描出されて
ゐるのに感動して、その後、ルーヴルに足を運ぶたびに、必ずその前に立留るのを例とした。
後で美術史入門の類ひを読んで、希臘の審美思想に憧憬してゐたこの畫家が、この巨幅に
於て、古代美術の精神を神人化した空想美を遺憾なく現はしてゐることを學んだ。高踏的
の藝術の境地である。

十九世紀の後期にフランスに、バルナツサス派と稱せられる常套を脱した一群れの詩人が
あつた。

私がかういふ外國の繪畫や詩歌を思出したのは、中戸川吉二君が、「高踏派」といふ文學
分類用語を持出したのを、今日の文壇ではひどく珍らしく感じたためである。明治以來の
文學史にも、高踏派と云はれる文學は微弱なる存在を續けて、極めて稀薄ながらも、フラ

ンスのバルナツサスや、希臘のバルナツサス山の詩神の境地を連想させるものもあつたや
うだが、中戸川君の所謂「高踏」の語意は、それとは大分ちがつてゐて、同君自身の漫然た
る解釋による純粹藝術派を指したものでらしい。しかし、私は、こせ／＼時代の流行に目を配
つてゐる文藝批評の多いうちでは、中戸川君のものは對照的の妙味があると思つてゐる。
それで、今年の前半期に「文藝春秋」に掲げられた時評はすべて通讀したが、殊に最後の「九
九九會の人々」は面白かつた。私は今、六月號の「文春」を搜出して讀直した。ある一團の文
學趣味を、今の私としては、「必しも輕蔑の對象」とはされないのである。少し卑近だが、
日本のバルナツサスの空氣がかういふ趣味にいくら籠つてゐるのではなからうか、と思
つたりした。

この評者の描寫し批判した人物は、この會の會員たる泉鏡花氏と水上瀧太郎氏と久保田
万太郎氏とである。「誰れも彼れも時勢におくれた作家であり、現代の文壇の風潮とは何の
關はりもない」人々だと、この評者ははじめから斷じてゐる。時勢おくれは何時の時代にも
數に富んでゐるが、凡人の時代おくれとはちがひ、名人の時代おくれには、時代に乗つて
ゐた時よりも、滋味がつき錆がついて、なかく／＼に味ひの深いものである。九九會の人々
がみな名人であるかどうかは私には分らない。

鏡花氏の作品については私は縁ない衆生と云ふ外はないのだが、中戸川君が、鏡花氏の

洩らした大きな欠伸、「あ、あ、あ」といふ呻きとでもいふより外ない、どえらい欠伸を深夜に聞いて、「功成り名遂げた人の淋しさ」を感じて胸を打たれたのには同感した。欠伸を洩らした人の心境にも同感し、それを聞いて感じた人の氣持にも同感する。私が昔好んで聞いた落語に、「欠伸指南所」といふものがあつたが、欠伸や退屈から名文學が生れることもあるので、拳を振廻したり、口角泡を飛ばしたりすることが、名文學産出の原動力となるとは限らない。

「水上氏の文學の特色は癩癩にある」と、中戸川君は云つてゐるが、癩癩も亦名文學産物の原動力となることもある。カーライルのフィリスティニズム罵倒の論評なんか、彼れの癩癩に依つたものであらう。水上氏の「貝殻追放」は私の愛讀を續けてゐるものである。この隨筆的論文ばかりではない、私は氏の筆になつたものは、小説でも戯曲でも、目に觸れるかぎり、殆んどすべて讀んでゐる。「九九九會の人々」と云ふよりも、「三田派の人々」と云つた方が適切であるが、その派の人々の作品のうちでは、私は、水上氏のに最も親しんでゐる譯である。この頃も「三田文學」を毎月手に取ると、「都塵」といふ、外國留學中の見聞を材料とした讀物だけは必ず讀んでゐる。氏のもものは、中戸川君も云つてゐる通り、常識的である。通俗小説だと云つていゝやうな感じのすることもある。しかし、いゝ意味での通俗小説である。これは、どう見ても「高踏派」ではない。それとともに、中戸川君の云ふや

うな「時勢におくれた作家」の面影があるとは思へない。泉氏や久保田氏とは趣きが異つてゐる。カーライルのやうな峻烈な文明批評がないにしても、現代日本文壇で尖端的と見做されてゐる型の如き思想によつて作品が仕込まれてゐないにしても、人間に對する理解も相當に行届いてゐるし、描寫もよくこなれてゐるのだ。少くも、私には、氏の作品は頭を苦しめないで氣樂に讀まれる。生煮えの物を食はされるやうな感じはしない。山本有三氏や岸田國士氏の小説が新聞小説に適してゐるのなら、水上氏の小説も新聞の讀物に適しないことはないと思はれる。

x

だが、三田派のうちで、特色のある代表的作家は、久保田万太郎氏である。文壇に於ても氏の存在は、一つの意義のある存在である。私は氏の小説をも、戯曲をも、多くは讀んでゐない。たまたに讀んでも讀後の印象が稀薄であつた。それにもかゝはらず、印象鮮明な水上氏の作品よりも久保田氏のものに、私は特異の藝術を認めようとするのだ。特異と云つても文字通りの特異ではない。鏡花氏を特異の藝術家と云ふのとはちがつてゐて、一見甚だ平凡なのであるが、久保田氏の作品にあるやうな平凡味は現代の作品に缺けてゐるのである。

私は、「新演藝」所載の芝居の合評を読んだ時、はじめて久保田氏に注意の目を向けた。それまで心に印してゐた氏を見ちがへるやうになつた。全體、小説の批評は容易いが、劇評は六ヶしい。文學者の劇評なんかいゝ加減なものなのだ。幸堂得知や竹の屋主人のにしても、考證以外に、批判らしい批判はあまり見られなかつた。この頃の劇評では、三宅周太郎氏のは以前ほどの生彩はないにしても、相變らず要を得てゐる。歌舞伎のやうな時代おくれで、資本主義の衰滅以上に衰滅の道を辿つてゐる舊藝術を丹念に翫賞し批評するのは張合ひのないやうに思はれるが、それは傍觀者の所感で、趣味好尚は各人各様だ。それであつた譯である。丸髻や島田の美を認めるのもその人の勝手である。朝日新聞には、數年來岡鬼太郎氏の劇評が出てゐたが、今年になつてからは、毎月ちがつた文學者によつて批評されてゐる。それも單調を破つて面白いのだが、大抵の評家が、まづ歌舞伎の時代錯誤の演劇たることを事々しく説立てるのが、鼻につくのである。そんな分り切つた、言古されたことを繰返すだけで、肝心の劇評の方はお留守で、觀察眼が少しも働いてゐないのが多い。鬼太郎氏のは藝術趣味は古くつても、舞臺に現はれたものを自分の頭で翫賞して批評してゐたのだ、その劇評を読んだだけでも、俳優の藝風が想像された。文學の批評もこれと同様で、癡者の一つ覚え見たいな理論を振廻すだけで、肝心の鑑賞は全然缺乏してゐるものは、當人がいくら威張つた口を利いてゐても、讀む方ではちつとも推服されな

いのである。私は、合評會の久保田氏の劇評を読んで、氏は氏一流の藝術鑑賞力を持つてゐることを知つた。他に雷同しないで自説を固守する力を持つてゐることを知つた。独自の鑑賞力と附和雷同しないことの二つは、藝術家たる資格の最初の要素である。他人が群を成して東へ走つたからと云つて、自己の本心を顧みないで、そつちらへ隨いて走るものは、少くも藝術の領域では侮蔑すべきである。

久保田氏は明治の中期に生れた東京兒である。一時代前に生れた永井荷風氏ほどに江戸趣味を吸収してゐない譯である。しかし、氏は、「大ていの東京生れのものがさうのやうにかれもまたかれの東京に——それも江戸の影の濃く落ちた下町に生れ出たことをつねに感謝してゐる。——なぜなら、かれに、およそ東京人は謙讓だからである。質實だからである。果斷だからである——控へ目で折目たゞしく、さうしてなほ強情だからである——あきらめのいゝ一面強い熱情をもつからである——さうした環境に生ひ立つことの出來たのを心からかれはよろこんだ」と云つてゐる。この江戸の影の落ちた東京人の氣風生活振り社交態度が、おのづから氏の小説や戯曲に現はれてゐる。紅葉、露伴、潤一郎その他の多くの東京生れの作家、また田舎から移住して來た作家は、次ぎから次ぎへと東京生活を描いて來た譯だが、江戸傳來の東京人の生活をいき／＼と現はした小説は案外少い。久保田氏についても、私の結論を云ふと、その描くところは東京人の生活の影法師に過ぎない。

そして、影法師に過ぎぬところに、日本文學の傳統的風俗が見られ、久保田氏自身も、「影法師描寫」を是認し、そこに趣味を感じてゐるのかも知れない。

氏は、少年時代に嫌ひだつた文學者の一人に岩野泡鳴を擧げてゐるが、さもあるべきことと思はれる。あの無作法な野蠻人が、都會人に好まれよう筈がない。その泡鳴が私に云つたことがある。「東京を書かなきや駄目だよ」と。私もはじめからさう思つてゐた。私は田舎言葉が嫌ひであつた。私は郷里に愛着しなかつた。都會であれ田舎であれ、人間は生れた土地を戀ひしがるのを通則として、大抵の文學者がやゝもすると故郷追慕の情を述べたがるものである。私は少年時代に故郷の舊屋で、徳富蘇峰氏の「故郷の春色今如何」と題された美文を讀んで、「どうして故郷の春色なんかがそんなに懐かしいのか」と、不思議に思つたことがあつたが、老いてなほ、郷國の山河に綿々たる愛慕の思ひを寄せる氣になつたことがない。

久保田氏は、その郷土である東京の下町に生を受けたことを最も幸福に思つてゐるらしい。そこに多少のほこりをも感じてゐるのかも知れない。そして、大都會の下町の町家の生活、藝人の生活なんかは、寫實小説として甚だ興味があるのだが、久保田氏は、さういふ題材を取扱つた彼れの郷土藝術に於てどういふ効果をあらはしたであらうか。私は、氏の戯曲や小説を讀んで、全體の着眼點や筋立の呑込めないさきに、まづ感ぜら

れるのは、作中の人物の言葉である。我々田舎生れの、東京では下宿住ひをして學校へ通つた者には使ひこなせない言葉で、その捻つた用語や、話の受渡しが、落語家の話しつ振りを連想さゝれるが、しかし、それが江戸傳來の下町の東京言葉の寫實であり、表現に妙味がある所以であらう。昔、廣津柳浪の小説の或ものが、地の文をはぶいた會話の連続で、「お早う御座います」昨日もお天氣で「また今日もお天氣で」「まことに結構なこと」「いづれもお變りなく」と云つた調子の書振りをしてゐたのを、高山樗牛が嘲笑したことがあつたが、久保田氏の慣用の挨拶言葉はさういふ無意味なものではないらしい。岸田氏は、「言葉」を重んじ、氏の戯曲には用語が洗練されてゐるやうだが、久保田氏のあゝ云つた會話は、環境のせみであらう。かつて、馬場孤蝶氏が、「ことたま」誌上で、菊池寛氏の小説中の會話が作中人物の用語として當を得てゐないことを指摘してゐたが、田舎生れの作家の都會語は概して不純なものに極つてゐる。それについても、私には外國文學の鑑賞の困難が推察される。外國の小説中の會話にも、菊池寛、久保田万太郎、岸田國士と云つたやうに、作家次第で、調子が異つてゐるにちがひない。それを我々は一樣に讀んで行くので、それ等の差別は容易に分るものぢやない。翻譯の困難も同様である。たとへば、西洋小説の夫婦の對話を譯するのに、「お前、かうしろ」「あなた、さうなさいまし」「おれが」「わたし」と云つた調子が常例になつてゐるが、アメリカは云ふまでもなく、歐洲諸國だつて、

そんな男尊女卑的の階級語が夫歸間に用ひられてゐるだらうか。意味だけ譯したら、久保田万太郎と岩野泡鳴との用語の相違も没却されてしまふのだが、それでは久保田氏は不平であらう。

戯曲や小説の題目だけ見ても、この作家の好みは察せられる。永井氏よりも小山内氏の感化を多く受けたにしても、自由劇場の西洋芝居に感激したにしても、それは皮相で、根は純日本趣味である。「末枯」「九月嘯」「露芝」「冬ざれ」「雨空」と云つたやうに、季節趣味で浮世を見てゐるらしく思はれる。

x

「末枯」といふ久保田氏の出世作と云つていゝ小説を、今度讀んだが、この初期の作品に於て、作者の面貌は既に遺憾なく映つてゐる。落語家や講釋師など藝人の世界が、彼等の最員の旦那を運命の中心にして描かれてゐるので、題目の示してゐる如く、旦那の鈴むらさんをはじめ、誰れ彼れが浮世に末枯れて行くさまに、作者は詩情をそゝられてゐるのだが、讀終つた私には、印象が稀薄である。この作者は、義太夫語りのやうに哭泣しない。紫朝の新内のやうに啜り泣きもしない。嫉妬鬭争煩悶を人々の心に見てゐても、激しくそれ等に抱泥しようとししないで、義理人情で緩和されてゐる。鈴むらさんなんかの生涯が、

「退屈な、さうして、便りない枯野のやうな生涯」であつて、チェホフの小説戯曲で感ぜられるやうな永遠の淋しさはない。私など田舎ものには、少しうるさく感じられるが、江戸の社會の人にはかういつた義理人情で細々と浮世の旅を續けたので、それが一つの型となつて、東京の下町にも傳はつて來たのだと、「末枯」を讀むにつけても感ぜられた。「人間、莫迦は構ひません——だが、義理を知らないのは——人間義理を知らないのはいけません」。「人間つて奴は運ばかりぢやありません——上野の師匠が今日のやうになり、扇朝がいまのやうになつたのも——いつて見れば心がらです——あんな扇朝のやうな量見かたの奴のウダツと上らう道理がありません」と云つてゐるところに、作者の強い道徳感の發露が見られるのかも知れない。その道徳律が作者の人世解釋の積杆であることは、この作者の戯曲の幾つかを讀むと感ぜられて、自由劇場所演の近代劇愛好者たるよりも、江戸傳來の人生觀を生かして受繼いでゐる人らしく、私には思はれる。だが、それは借り物でなくて作者の身にびつたりついてゐるからいゝ。この作者はこの作者相應の純粹の藝術家であるために、私は趣味を異にし思想を異にするにかゝはらず、この作者に好感を有つてゐるのである。徒らに歐洲近代劇にかぶれず、徒らに尖端思想にかぶれず、自己の藝術境を樂しむことは、自信ある作者に非ずんば出來ないことである。だが、「末枯」はこの作者の小説としては、ぎこちないところがある。いろ／＼なことを

秩序なく並べ過ぎた感じがする。まだ習作時代の物らしい氣持がする。全體小説よりも戯曲の方に久保田氏の本領が見られるので、氏の戯曲は、一見、平凡無味なやうだが、噛みしめると、獨特の味がありさうである。

久保田氏はどういふつもりでこんな戯曲を書きだしたのか。氏は、落語や講釋に通じてゐるらしい。歌舞伎に對しても一見識を有つてゐることは、その劇評によつても察せられる。しかし、氏は戯曲を製作するに當り、講釋種をも用ひず、歌舞伎の流れを汲まず、自由劇場仕込みの西洋振りを真似ず、下町の商家の生活なんかをそのまま、舞臺に現はさうとしてゐる。芝居らしくない芝居。「藝人は娑婆つ氣がなくなつたら仕舞だね」と、「末枯」のなかの誰れかが云つてゐるが、戯曲を書くとなると、大抵の作家が、小説や詩を作る以上に、娑婆つ氣を出したがるもので、時々あさましくも思はれるのに、久保田氏にはそれが無さすぎるくらい無い(或ひはそれを奥深く潛めてゐる)。讀んだだけでも退屈で、これが芝居になりますかと晒はれさうである。だが、幾つかの戯曲を辛抱して讀んで見ると、作者は兎に角自分の戯曲の世界を有つてゐることが私にも薄々分らないことはない。小さくても自分の世界を有つてゐることは今日の文壇では珍らしい。久保田氏の戯曲は机上戯曲ではない。

私は上演されたこの作家の戯曲は、數年前、ホテル演藝場で或新劇團の演じた「短夜」を

觀ただけで、實際に當つた批判は出來ないが、それ等を今讀むと、影法師のやうにでも、戯曲の味ひをもつて人間社會が映されてゐることは、讀後に感ぜられた。臺詞が表面平坦な寫實でありながら、案外戯曲的會話になつてゐるのは、他の新劇作家のとは選を異にしてゐる。讀まれるよりも聽かれて、聽き手の心に印象されるやうに會話の受渡しがされてゐる。臺詞に念を押して運んでゐながら、それがわざとらしくなくなつてゐる。默阿彌描くところの或世話場の呼吸がうかゞはれる。「冬」といふ戯曲なんか、さう云ふ點でなかなかうまい。この作者の好きな雨の音など、自然の風物を取入れ、晴曇風雨が人心に影響する微妙な感じをも現はさうとするのが、執筆の際の用意の一つであるらしい。さういふ俳諧的雰圍氣のうちに、幾人も男女が義理人情の手を執り合つて、淋しい笑を洩らしたり、忍泣きをしたりしてゐるのが、久保田式戯曲の世界である。「冬」の一篇のうちには悲劇の種が含まれてゐる。喜劇の分子をも有つてゐる。だが、作者はそれを殊更らしい悲劇や喜劇に發展させることを好まないのだ。落語家の半七は云ふ、「おれの我儘を云つたのが悪かつた。堪忍してくれ。」相手の落語家三勝は答へる、「お前ばかりが悪いんぢやねえ。ごつちも悪いんだ。ごつちも我儘だつたんだ。」一方では、おみよが夫の政吉に向つて、「姉さんをそんな遠いところへやつたのは、みんな私が悪いんです」と云ふ。政吉は「堪忍してくれ。おれが悪かつたんだ。堪忍してくれ」と答へる。久保田氏の戯曲の世界の葛藤はか

うして解決されて幕がしまるのである。末期の江戸趣味は随分惡どいもので、默阿彌の芝居なんかも毒々しかつたが、久保田氏は、人間の惡どいもの、毒々しいものは嫌ひなやうだ。廢類的人物を取扱つてもあつさりしてゐる。情事を取扱つても淡泊である。「冬」の中政吉が、「おれはあの五郎(曾我廼家)つて奴にへんな色身をされると蟲酸が走るんだ。それと逆に、十郎のあのトボけた恰好をみると、それだけでももう肚の底から可笑しさが見上げて来るんだ」と云つてゐるが、この政吉の説に作者は同感なのであらう。「へんな色身をされる」文學はたまらないが、久保田氏のやうでは、人間が人間の影法師たるに留まることがあるのだ。

中戸川君は、昭和時代に現はれた小説では、谷崎氏の「夢喰ふ蟲」と、久保田氏の「春泥」とが傑出してゐると云つてゐる。この評者の鑑定を深く信頼する譯ではないが、私は兎に角、その傑作たる「春泥」を需めて讀んだ。この小説が最近、ある書店から縮刷の廉價本として賣出されてゐるのによつて見ると、久保田氏の小説も相當に商品價値を持つてゐて、中戸川君の云つてゐるほどの「時勢おくれ」の作品でないことが推察される。この小説は、私が今まで讀んだこの作者のどの小説よりも、興味を持續して讀通せたもので、一般の讀者にも面白く讀まれさうに思はれる。「末枯」とは比較にならぬほど、この作者の小説技術が進んでゐる。作者は、自己の創作態度を述べて、最初から筋道を豫定しないで漫然筆を

運ぶのを例としてゐるやうなことを云つてゐたが、「春泥」の如きは、極めて用意周到である。漱石の小説のやうに、いろ／＼の人間の會話や事件が一つの世界をつくるべく有機的に働いてゐて、無駄をしてゐない。これも藝人の末枯を主としたもので、時代のあわたしい變遷、人間の定めぬ浮沈の有様が讀者の心を打つのである。新派俳優の身の上ばかりではなく、文學者の身の上にも、どの社會に於ても、人間はこれと同様の運命に左右されてゐるので、題材として萬人向だと云つていゝ。我々も讀んで身につまされると云つていゝのだが、しかし、我々が、「成程さういつたものだらう」と、思ひ／＼讀續ける以上に、作者がもつと深く入つた人間世界の何かを描出してゐるところはなかつた。感情を誇張せず、淡々たる筆致でこれだけの情味を現はしたのは、我々及びがたしと思はれるが、人間が久保田好みの影法師のやうな感じのしないことはない。昭和改元以來今日まで、「春泥」ほどの名作は他にないのであらうか。私にはさうは思へないが、しかしこれ以上の名作を數へ上げようとしても、あまり多くはなささうである。「このごろのセリフの民衆的つて奴よ。あんな人を喰つた、ふざけた、小癩に障る言草はねえ。——何でもお値段が安くて、手つ取り早く、こそくさいでさへあればいゝしろものよ」と、作中の或人物の云つてゐるのが、作者の心の聲であると假定すると、そこに久保田氏の「時勢おくれ」を認めていゝかも知れない。

中戸川君の「時勢おくれ讀美」らしい論文を読み、また「高踏派團結せよ」といふやうな、共鳴者のなさうな、論文を讀んだのを機縁に、九九九會の藝術家の作風の一端を覗いて見たが、一風變つた、技巧偏重のフランス高踏派詩人に似てゐるのではなかつた。北村透谷を盟主とした「文學界」——の一派は高踏派と云はれたことがあつたが、これなども甚だ心細い高踏派であつた。世俗の情緒を切離した純藝術の境地に徹した高踏派は、明治以來にはなかつたので、世智辛いこの頃では、さういふ純審美の世界には安住し得るものはないべき筈がないのである。中戸川君の所謂高踏派の作家も本當は高踏派ではなさうに私には思はれる。

美術家は小説家なんかよりは一層高踏派であるらしく思つてゐたが、現代の巨匠横山大觀氏の「美術學校長論」によると、美術家も政治的志士の如き氣概を持つてゐなければならぬさうである。今日の時世では美術家までもファツシヨ的にならねばならぬらしい。すべての方面に於て、藝術家が右翼左翼の挟み撃ちに會つては、高踏派存在の餘地は無くなる譯である。しかし、首陽山で蕨を食つて詩を作り繪を書いてはゐられまい。バルナツサス山の詩神の戯れなんかは、高踏派に取つては見果てぬ夢である。……かう云つても、私自

身は無論最初から最近まで、高踏派を志してゐたのではない。純審美の境地に陶醉し得る素質がなければこそ、文學時評や人物評がごた／＼と書いて來られたのである。だが、最近の文壇ますます俗惡に赴くのを見るにつけて、高踏的文學の現出をも渴望する氣持になつたのである。

(昭和七年八月中央公論)

宇野浩二論

日本現代の作家だつて、それ／＼に特色を有つてゐないことはない。萬人一様ではない。各人、面の異なるが如く、作風も異つてゐる。しかし、いづれも「體を具へて微なり」と云つた感じがする。貧弱であり、稀薄であり、無力である。

宇野浩二氏の去年の作品、「子の來歴」「枯野の夢」「枯木のある風景」「人さま／＼」「湯河原三界」を、今度通讀して、ぬるま湯に入つてゐるやうな感じがした。この作家もまた、自分の燃料を所有してゐないのであらうか。

宇野氏の作風に獨得の妙味のあることは、大正以來、文壇周知のことである。氏の出世作とも云ふべき「藏の中」を、私は非常の興味をもつて讀んだことを私は記憶してゐる。明治以來の狹隘なる文壇にも、をり／＼花形とも云つていゝ新作家が登場して、人氣が沸立ち藝術的雰圍氣が醸されるのであつたが、宇野氏などの出現した時が、新進作家として最も廻り合せのいゝ時であつた。明治以來の狹隘なる文壇にも、經濟的に飛躍のあつたのはあの時であつた。それまでは、樋口一葉出づるとも、肩書付の餘德を持つた大瀨石が出づるとも、物質的には云ふに足りなかつた。だから、官立大學の出身で、文壇に乗出した者であつても、長續きはしなかつた。高級な學校の教師その他の安定した割のいゝ職業の得

られない私學出身者などが、惱みながら、不平を洩らしながら、止むを得ず、文筆専門で立つて行く有様であつた。潤一郎が異色ある作品によつて認められたため、退學して創作に進む決心をしたさうだと噂された時、私などはその不心得を危んだ。それほどに、我々は文學によつて生活の資を得ることに不安を覚えてゐた。

兎に角、宇野氏などが活動しかけた時分は、經濟的の意味からは、前後の文壇にハッキリ區劃のつけられた時代であつた。たとひ外面的だけであつたにしても、あの時分から暫らくの間、華やかな時代が続いた。官學出身では、菊池寛、久米正雄、芥川龍之介、など、私學出身では、宇野浩二、廣津和郎、葛西善藏などは、極めていゝ汐時に乗出した花形の作家であつた。榮えない環境を経験して來た既成作家とは異り、これ等新作家は、有力な雑誌社に對しても、怯むところなく自己の要求を持出したらしかつた。さういふ種類の噂を耳にしてゐた私は、或日、當時の中央公論社長と雜談してゐた間に、さういふ噂を話題に上したが、社長は、「しかし、この頃の新作家は、それは一しよ懸命に筆を採つてゐますからね。今までの作家とは氣込みがちがひます」といふ意味のことを云つた。彼等の作品は、舊作家の陳腐な作品とはちがひ、清新で活氣を帯びてゐることを、雜誌業者も認めてゐたのであらう。それから何年か經過した後の或日、改造社社長と雜談してゐた時に、「宇野、廣津、葛西の三人のうち、誰れがえらくなりますかな」と、社長氏はそれに興味をもつ

てゐるらしく云つた。二大雑誌の社長から重きを置かれてゐるだけでも、新進作家として張合のある譯だと、私は自己の昔に比べてむしろ羨望した。

時世の廻り合せがよかつたばかりでなく、實際彼等の初期の作品には、新味が漂つてゐたと思ふ。宇野氏の綿々として盡きざる人情話には、在來の小説型を離れて、新話術としての面白さがあつた。陰慘悲哀の世相を題材としても、在來の自然主義系統の作品のやうに、じめ／＼した感じを讀者に與へないで、むしろユーモラスな味ひを傳へた。だが、老巧な噺家なら、話の間に自から人間と場面をくつきり描出し、聽手の心に深く印象を留めさせるのであるが、宇野氏にはさういふところが乏しかつた。やゝもすると平調に流れ過ぎた。私は平安朝の物語を読む時に感じるやうな退屈さを、宇野氏の小説についてたびたび感じてゐた。氏は、葛西などとは反對で、筆がいくらでも伸びて、つねに文才の豊かさを示してゐたが、締めく／＼りの足りない趣きがないでもなかつた。

氏は多數の作品を出した一人であつて、そのうちには傑作と云つていゝもの、佳作と云つていゝものも尠くないのであらうが、私の讀んだ範圍では、「子を貸し屋」が、氏の持味を十分に漂はせた渾然たる創作品であつたと思ふ。文學史上に残すに價してゐる。ところで、二月號の「セルバン」に掲げられた宇野氏の打明話によると、この小説は「全く空想で構想された」のださうだ。「淺草にプロステイテュト相手に子を貸す商賣をしてゐる者があ

るといふだけの話を友人から聞いて、その話を元で「百枚以上のものを作り上げた。「自分で云ふのは變なものだが、よくこれだけ作り事をしたものだ」と、作家自身で感歎してゐる。かういふ創作家の打明話は、デコブラ氏の「小説家のからくり」談と同様の面白味を有つてゐるのである。私は、自然の成行から、近年、評論と創作とに、頭の使ひ分け筆の使ひ分けをしてゐて、そのために一方のみ全力を集中する人のやうな徹底味を缺く恐れがあるであらうが、相互の立場から相照して他の裏面の覗かれるやうに感じて、獨りで面白がつてゐることもあるのである。田山花袋を元祖とした自然主義文學も、時代の變遷とともに、昔の單純さ素朴さを失ひ、自己描寫自己告白小説、身邊小説、見聞實記小説にしても、一方では惡ずれがしてゐるとともに、一方では技巧も加はり複雑になつてゐると云へないこともない。假りに私が他人の假面を被つて自分の實生活を敍し、自己心理を披瀝したとすると、その巧拙に關する批評は別として、批評家はそこに作家を見ることはしないのだ。そして、外面的に自分らしい人間を書く、そのまゝに作家自身として受入れられるのだ。自分らしい所に案外自分らしからざるものがあり、自分らしからざるところに案外自分の本性が出てゐるかも知れない。西洋の大家作家に關する評論や傳記にしても、どこまで真相に觸れてゐるのかと、私には疑はれる。評論家として他人の作品を是非する場合にも、かういふ自然と人間の描寫、或はかういふ心理描寫は、眞實なのであらうか、出鱈

目なのであらうかと、批判に迷ふことも少くない。常識程度の親子の情、男女の愛憎、金錢慾なんかを、よく書いてゐるかゝるかは、誰れにもよく分るであらうが、作家は通り一べんの極りきつた人情を描敘するだけに留まらないのである。さういふ場合に下す批評家の批評はあやふやなのだ。全體を通讀した直後の印象を率直に述べる外ないのだが、この頃の雑誌小説を讀んだ直後の印象は、「詰らなかつた」「退屈であつた」といふ外に何も無い場合がある。それでは批評にならないので、いろ／＼考へて、直後の印象に理窟をつけることが多い。こじつけである。多くの批評家はさう感じないのであらうか。確乎たる信念を有つて他の作品を批評してゐるつもりなのであらうか。

「褒められても貶されてもいゝ。たゞよく讀んでくれて、此方で得心の行くやうな批評をしてくれ、ばい」と、多くの作家は云ふ。それは本當である。しかし、實際はさうでないのだ。伯牙瑟を弾じ鐘子期これを鑑賞するといふ場合は稀れであり、「得心の行く批評」と云つたところが、押詰めて見たら、「自分のものを何とか理窟づけて褒める批評」といふことになるのだ。

他の作家は知らず(と云つても、大抵は類推されるが)、私自身は、自分の作品の文學的價值について、いつもハッキリした見當がつかない。今の月評家の批評なんか、當てにならないと常に思つてゐながら、それ等月評家が、「面白くない」と云ふと、さうだらうと心

からさう思ひ、「面白い」と云はれると、さうかと思ふ。實例を挙げると、「改造」と「文藝春秋」の新年號に寄稿した私の小説に關する諸家の批評を、今數種の雑誌を披いて讀んで、何の反感もなく、「さういふものかなあ」と、たゞ甘受してゐる。「藪睨み？」は、作者自身よほど技巧を凝らしたつもりなのだが、そのために却つて古くさくなつたのであらう。題は思はしいものが見つかからないので、窮したあまり、象徴的につけたのだ。私の書くかういふ作品は、人生に對して歪んだ見方をしたものと思はれ勝ちなので、今度のもおれの「藪睨み？」と、豫め疑を挿んだのである。内容は、私に取つては、眞實も眞實も、人生社會の眞實の眞ん中を擱んだつもりだが、いくら擱んだつもりでも、作者に描寫の筆が缺け、文學的氣魄が衰へてゐると、極めてチャチなものしか出來上らないのである。青年作者が意氣込ばかり激しくつて實際の作品の拙いのも無理はないのである。何十年修業しても、下手はいつまでも下手である。川端康成氏が、「西洋人ならば、必ず長篇小説に書く材料ではあるまいか」と云つてゐるのは本當で、「カラマゾフ兄弟」と角力を取るくらゐな意氣込で書いて然るべきだが、しかし、私に時と場所とがたつぷり與へられたにしても、私には十分に書き了せる素質も氣魄もないことを自分で百も承知してゐる。それで、雑誌社から、數十枚のものと云ふ註文に對して、造作なく、我「カラマゾフ」を持出してこた／＼と書いて見たのである。

「作品と世間のあはひ」と題する、「セルバン」所載の、宇野氏の創作苦心談に感染され、自作自評に及びかけたが、こゝらで閑話休題として本論へ戻らう。

子供を有たぬ私は、子供を取扱つた小説を批評しようとする、暗中摸索を試みるやうな氣持がされる。そのせりでもあらうが、宇野氏の「子供中心」の近作から受ける印象は甚だ稀薄である。常識的人情話を長々と聞かされてゐるやうだ。筆致が平板で單調で、落語の「子は鏡」でも聞かされてゐるやうだ。無論これ等の「子供」小説に持出されてゐる人生は、内容が豊富らしく、小説家の題材として相應しいやうに推察されるのだが、それが通り一ぺんのお話になつてゐるに過ぎないのは何故であらうか。

「子の來歴」よりも「人さまぐ」の方が内容が豊富であり、話の筋が調つてゐる。「四十歳になつて初めて自分をお母様と呼ぶ子を持つた嬉しさ」が、二十代のやうな瑞々しさで感ぜられた。それを平たく云ふと、ぞくぞくするやうな嬉しさを彼女は感じた。さうしてこの子の爲めなら、どんな事でもしてやりたいと思つた」といふ、實子のない中年の女の心持は、我々にも同感されることである。「幼い時分に娘時分に、否これまで母の愛を受けたことがなかつたので、姑でもいゝ母と呼ぶ人が出来る楽しさ嬉しさを想像した」といふ寂し

い女心も、作家の觀察に價する題材である。夫から隠兒のあること、隠女のあることを打明けられた時の女の煩悶、その結果としての家出なんかは、有振れたこととは云へ、小説家はさういふ事件を捉へて腕前を見せるのが常例である。頭の悪い智慧の足らぬ惣領の寄食、それについての母親の苦勞など、人生苦の實相を覗はせてゐる。それで、闇のやうな生活の中へ、一點の光として子供が入つて來るのだが、讀者や觀客を感動させるに足る小説か戯曲を創作するに持つて來いと云つていゝ好材料である。「人さまぐ」の中には、さういふ好材料が竝んでゐる。だが、材料ばかり揃つてゐても、料理はさほどよろしくないと思はれる。

料理の味ひも微妙なものであらうが、小説の味ひも微妙なものである。方則通りに技術を施しても効果は人さまぐである。「人さまぐ」の中には、さつき私が列擧した種類の人情が書かれてゐるから、それでいゝではないかと云ふ者があるかも知れないが、さう云へば、私の「藪尻み？」にだつて、人生觀察の態度は宇野氏と異つてゐるにしろ、いろ／＼な男女の心理や行動がちやんと書かれてゐるではないか。しかし、文學に於ては、さまざまの事書積まれてゐても、實は書かれてゐないも同様なことがあり、零細な文字を列べてゐるに過ぎなくても、實は豊かに書かれてゐると思はれることもある。

この作者は、激しい音や強い色を用ゐることを好まないらしく、平坦に筆を運んでゐる

が、「子を貸し屋」時代に比べると、筆が乾いてゐる。枯れて、それだけアクが抜けて来たのかも知れないが、ユーモラスな趣きは著しく減つてゐる。若い時分のユーモアを洗ひ棄てて、一段上の文章道へ上らうとしてゐるのであらうか。

この小説を読みながら、著しく印象を弱められる一つの理由は、作者が一人稱小説の氣持で筆を採りながら、それで終始を貫かないで、多元的となり人物が分裂してゐることである。岩野泡鳴は、小説は必ず一元的でなければならぬ。彼方の人間、此方の人間と、異つた立場から書くのは間違つてゐると、狹隘な作法を主張してゐたが、兎に角一元的態度を執つた方が危な氣が少い。宇野氏のやうなお話風の作柄を特色とする作家には、ことに泡鳴の説が適してゐると思はれる。「寢間着姿の細君が、彼が初めて見る嚴肅な顔をして枕元に坐つてゐるのを發見した。それは自害しようとする昔の女のやうに見えた。彼は底の知れない不安な氣に襲はれ、思はず寢床の上に坐り直つた」あたりからはじまる緊張した場面は、小説家冥利、讀者に息も吐かせずに讀ませなければならぬのだが、この作者の筆は緩慢だ。生彩がない。……さうは云つても、では、現代の作家中誰れがさういふ場面を巧みに書きこなすかと考へると、私には思出せない。山本有三氏の「女の一生」のうちに、女主人公允子が男心に不信を抱いて、男に背を向けて飛出したあたりは、描法に芝居氣があるにしても、かなり讀者を引摺る力を有つてゐた。宇野氏が、「自害しようとする昔の女」

のやうに見えた細君を十分に表現し得ないで、大磯への逃走も平板なるお話だけに留まつた憾みがあるのは、まだしも看過するとして、「底の知れない不安な氣に襲はれた」といふ、彼なるものの、その底の知れない不安の氣を、文字の表にも裏にも十分に傳へてゐないのは、あまりに呑氣過ぎるやうに私には感じられる。……しかし、人間の悲喜哀歡に惡どく抱泥した態度を取るのには、小説道として低級であるといふ信念を持ちかけてゐるのかも知れない。「僕自身も四十三の今日になつて初めて、本當に初めて、自分の好きな道の本道の見當が附いて来たやうに思ふ。それは本道か何か分らないとしても、この道以外に心が散らなくなつた事だけ増になつたかと思ふ」といふ作中人物の言葉は、作者自身の心境を言つた言葉らしく思はれるが、若しさうであつたら甚だ幸福である譯だ。人間が道に志して、「眞底からその道の外に氣を取られるものがなくなる」ほどの域に達せられたら、これほど結構なことはない。世上幾人かこの境地に到達した者があらうか。

宇野氏の「本道の見當が附いて来た」といふ言葉を、文學作法に關連させて考へると、人間の悲喜哀歡に惡どく拘泥した筆法を弄しないで、人情話を枯淡な調子で述べようとの心構へを指してゐるのであらうか。「枯木のある風景」のなかに、「これからは芭蕉風に寫實と空想の混合酒を試みる」と、ある畫家が云つてゐるが、この畫家の製作態度がすなはち、宇野氏が見當をつけた「本道」なのであらうか。「枯木のある風景」は、藝術家を取扱つてゐ

る小説だから、作者は、意識的に、或は無意識的に、作中人物に託して自分の藝術観を述べてゐると見て差支へあるまい。「寫實と空想の Cocktail」説なら、何の奇もなく、それを「芭蕉風に」試みると考へたところに、作者の新しい意圖があるのであらう。この作者も、他の多くの日本作家と同様に芭蕉の精神に復歸して、そこに文學的安立の地を見つけたのであらうか。「枯木のある風景」にしろ、「枯野の夢」にしろ、「旅に病んで夢は枯野をかけるめぐる」とか、「枯枝に鳥の留りけり秋の暮」とかいふ芭蕉の俳諧の精神と風趣を腹に据ゑて、現代の寫實をなし、或は現代らしい空想を發揮したのであらう。しかし、この作者は、本道の見當はついたにしても、まだ實際の作品に於て、それを生かし、それを完成させてはゐない。それは今後の作者の努力に待たなければならぬ。「枯木のある風景」は、二度読んで見たが、古泉といふ畫家なんかから受ける印象は極めて稀薄だ。「鬼氣人にせまる」といふ作者自身の評語は、空虚な文字に過ぎないので、鬼氣や妖氣の影も差してやしない。「自分で繪の買手を見つけて来て、古泉を働かせる」細君、「夫の古泉に職人のするやうな仕事を強ひる」細君。「あんな大膽な、あんな秀拔な、あんな鋭敏な、あんな獨特な頭腦と才能の所有者が、家庭にあつては、父さん坊ちゃんの假面を被り、世間に出ては馴輕の假面を被り、家庭に讎詰になつて、カンパスの上の仕事だけに、思ふ存分の勝手氣儘を振舞つて死んだ」古泉。さういふ材料が少しも燃焼されてゐないのだ。作者はそこに薪を置いた

きり、點火しないでポカンとしてゐるやうに感ぜられる。

數種の近作を通讀して氣のついたことは、人と人との心理的交渉については、作者は多く焦點を逸し、注意散漫となり、妙味が乏しくなるが、何となしに敘する自然の描寫、家中の描寫などは、のんびりしてゐて、しかも光景を髣髴させるところのあることである。

「枯野の夢」のなかに「住んで見ると、高天村は自然人情とも悪いところではなかつた」からはじまる大和の一村落の描寫、田舎の料理屋の描寫など、そのいゝ例である。「竹藏の家の店の間の日常茶飯事」なんか、作者の筆にびつたり合つてゐるのだ。

「湯河原三界」は、「子の來歴」や「人さま」の参考書とすべきもので、後者に書洩されてゐるものを補つてゐると思つてもいゝのだが、この小説は、他の小説よりもつと散漫である。小説といふよりも、作者の「小説材料覺え書」として見ると、「藤」といふ藝者の面目は斷片的によく出てゐる。この作者もなかく世路の經驗に富んでゐるのである。それ等の覺え書を創作化して効果を奏するのが、我人ともに困難なのだ。

「湯河原三界」のなかに、「文學第一、母第二、彼女第三」といふ言葉があるが、これも作者自身の衷心から出た聲であらう。この作者の文學に對する強い愛着の表現は、隨筆や評

論のなかに屢々散見してゐる。文學者の多くは、はじめは熱心な文學愛からその道に志すのであるが年齢を重ねるにつれ、成功者は成功者の形に於て、失敗者は失敗者の形に於て、文學を粗末にするやうになりがちである。年中多量に物を書いてゐる人が必ずしも文學を愛してゐるとは云へない。却つてその反對の例が多い。何でもやたらに書きなぐつて金を取らうとする作家によつて、文學はいつも侮蔑されてゐるのである。宇野氏のやうにいつまでも純真な氣持で文學を好んでゐる作家は、現文壇では甚だ稀であると云つていゝ。作品の出來榮え如何に關はらず、その氣持は尊しとすべし。

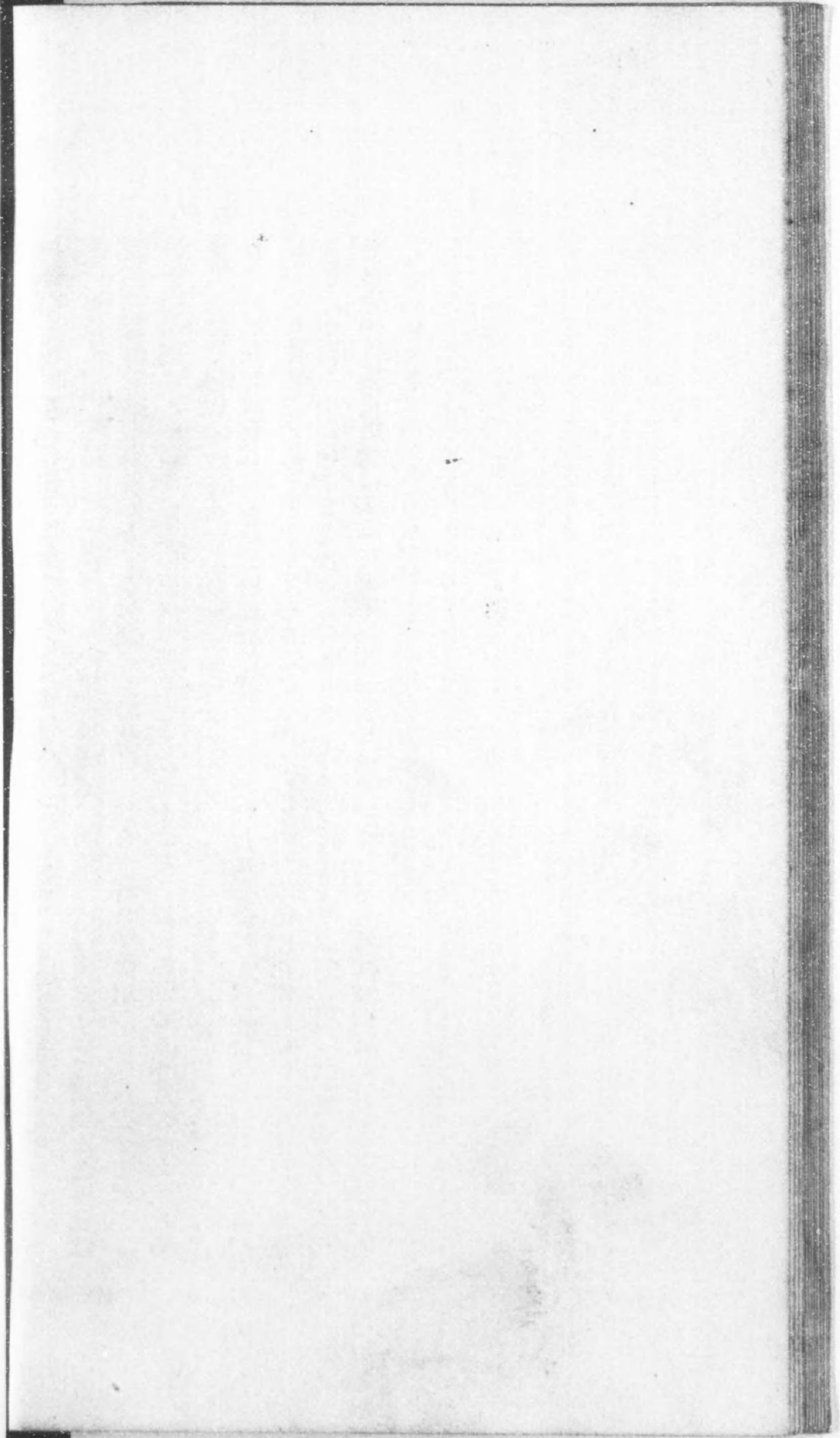
だが、異性愛慕にも色々ある如く、文學愛の愛し振りににもさまざまあることを私はつねに感じてゐる。無論優劣があるのではないが趣きが異つてゐて面白い。宇野氏の愛は若々しい。子供っぽいところがあつて微笑される。有名なフロオベルの文學愛は、むしろ「鬼氣人にせまる」と云つた感じがする。「改造」二月號に、辰野隆氏の寄稿した「フロオベルの自覺」を読んで、今更のやうに痛切に感じた。

「善を爲し、惡を爲す、それが何になる。後世を頼むことはやめた。こゝ數年の間、文學の疾風でも吹かぬ限り、おれは腦漿の苦吟に依つて新聞や雑誌を唄はせぬ事に極めた。……おれはおれの穴に閉ぢこもつて、世界が崩れようとも、一步も動かぬ」と、彼は早くから決心してゐた。

「苟くも藝術家と名告る以上は、斷じて他の人々の如く生活してはならぬと、彼はモオパッサンを戒めた。結局、フロオベルの道を履めば、藝術家は藝術家として使徒となる他はなく、藝術家は表現せんとする思想にも事象にも知らず識らず賛成し或は反對するに至るのを極力避けんが爲に、遂に祖國の觀念も、社會や政治や宗教の關心さへ超越せねばならなくなる。藝術家に取つては藝術が凡てに代はる。凡てを藝術の犠牲に捧ぐるのである」と、辰野氏は説明してゐる。藝術愛の極致として、女にも金にも、人情にも、何物にも、捉へられてはならぬと、フロオベルは堅く決心してゐた。田山花袋氏は、この境地を尊崇してゐたが、氏自身は其處に達し得られないで、いろ／＼なものに捉へられてゐた。所詮、藝術の神は猶太の神エホバの如く嫉妬の神である。すべてを棄てて従はねば、先方が得心しないのであらう。……「文學愛」藝術愛「談何ぞ容易なる！」

(昭和九年三月中央公論)

欠



欠

現したのかと、私は不思議に思ひながら、新聞できれく〜に読むのは煩いので、纏つて出版されるのを待つてゐた。具眼者の好評も、いつも簡単な空漠たる讃辭だけで、立入つて聞糺したことはなかつたが、幸ひ、中央公論八月號に、伊集院齊氏の「直木三十五論」が掲げられてゐるので、それによつて、略具眼者の直木讀美の内容を推察することが出来た。だが、私は、この直木論に賛同し難いのである。

講談系統の歴史小説として、私は何等の新味をもこの長篇に見出すことが出来なかつた。作者はある種の「大衆文學」作者のやうに出鱈目を書きつ放してゐるのではあるまい。この上中二篇を貫いて重要な事件となつてゐる「呪詛」の術、「調伏」の方法についても、古實をよく調べてゐるらしい。劍道についても正確なる知識を有つてゐるらしい。幕末の薩摩藩に關した史實をも心得てゐるらしい。人物の配置、全篇の構成も、樂々とやつてのけて、貧しい智慧の行詰つたと云ふやうな醜態をあらはしてゐない。私がこの長篇二冊を讀終ると、直ぐに手にした十一谷義三郎氏の「唐人お吉」の、澁り勝ちの、筆重たげな書振りとは、甚しく相違してゐる。それで、皮相だけで判斷すると、後者は、「蛭蝨が匂つてゐる」やうで、前者には、「天馬空を行く」勢ひがあると云つていゝのだが、その實、私は後者の半分も前者から、小説としての感興を受けなかつたのだ。首尾を通じて空々しく思はれた。呪詛や調伏は、前代人の愚昧なる迷信であるがために興味がないと云ふのではない。作

者がかういふものの威力を信じてゐるらしくもなければ、かういふ迷信の人間生活に及ぼす影響を皮肉に觀察してゐるのでもなく、超自然の力が何かの寓意となり象徴となつて、我々の心を驚かさやうに取扱はれてゐるのでもないのを、私は飽足らず思つてゐる。だから、これを讀んで、昔の人間は、こんな愚劣なことを有難がつて行つてゐたのかと、徳川期の淨瑠璃や戯作本によく散見してゐる迷信と同様の感じを得るだけで、新たな藝術味は受入れられなかつた。物識りの馬琴をはじめ徳川期の戯作者は支那傳來の奇談怪説をも、そのまゝ信頼してゐたため、それを自作に取入れるにしても全體と不調和ではなかつた。泉鏡花氏が三世相だの相性だの、いろ／＼な迷信じみたことや神祕らしいことによつて小説を色取つてゐるのも、そこに現代離れた作者獨得の詩があり人世觀があつて、氏の藝術世界が出現してゐるのである。「南國太平記」の呪詛や調伏は古めかしいことを一つの小説の趣向に取入れてゐるに過ぎないので、そこに何の凄味もない。一篇の重大な要素になつてゐるこの迷信行爲が、何等かの壓力をもつて、讀者たる私の心の上に迫つて來るのではないから、従つて、迷信行爲をめぐつてさまざまの事件が續出し、さまざまの人間が生死の苦しみをしてゐるのが、空々しく思はれるのである。伊集院氏は、「我々インテリは、眞實性をも失はないし、しかも十分に興味的であるやうな小説」を當面に要求してゐて、「この種のインテリ向きの作家の一人として、先づ直木三十五を持つて來る」と云つてゐるが、こ

の評者などは、「南國太平記」にそんなに眞實性を認めるのであるか。私自身はむしろ空々しくのみ思つてゐた。親が子を思ふ、師匠が愛弟子を思ふ、若い女が立派な男に心を惹かれる。家來が自己の主人のために盡すといふやうなところに眞實性があるといふのなら、それは型の如くの眞實性で、小説にはさういふ眞實性が、舊い型通りに出てゐるに過ぎない。そんな昔の武士道小説の型を追つてゐるのに過ぎないものに、今のインテリ讀者は、「どえらい興味に身を任せたいと待ち構へてゐて、うづ／＼してゐる」のであるか。

立白齋、牧某、調所、小太郎、益滿、庄吉、その他の男女を、一くせありげな色を持たせて、縦横に活躍させてゐるが、彼等は屢々眞劍勝負をやつてゐながら、多くは型の如く動いてゐる。それも古い型なのだ。一くせありさうなところが却つて在來有振れた型になつてゐる。チョン髻時代の人物だから言語行動の古臭いのはあたり前であるが、皆んながこんな大ざつばな頭腦を有つて生きてゐたやうに觀察して足れりとしてゐる新時代の作家の量見が、私には分らないのである。私は、かつて、大佛次郎の「赤穂浪士」を通讀したが、この歴史小説には、兎に角、講談趣味以外の新味があつた。人間心理の觀察に舊套を脱したところがあつた。西洋の歴史小説らしい面影もところ／＼にあつた。それに比べると、直木氏のは武士道型を墨守してゐる。それも幸田露伴氏の歴史物のやうな根の据つた武士道型ではなくつて、少し茶番じみてゐる。徹底しない古くささを感じた。今のインテリが

かういふ歴史物に心酔するのが事實だとすると、今のインテリは、思想の上皮や、生活の外形だけがモダンであつても、趣味や精神の根柢はまだ封建期の祖先の傳統からいくらかも脱してゐないことが推察される。評家伊集院氏の説によると、益満といふ人物は、全然假構な人物で、そして、「痛快男子」ださうであるが、この評語が當つてゐるにしても、これは、封建時代趣味に適した「痛快男子」であるのだ。私には、この男の豪傑振りが茶番じみていやみであつた。劍劇風の超人的行爲をして相手を傷けたあとで、お尻を振つて、相手を押搦するのが、いやみであつた。

現代の或種の探偵小説や怪奇小説を読むと、頻りに恐ろしさうな事件を案出して讀者を脅かしてゐるものがあるが、舊弊な落語家の怪談ばなしみたいで、今時の人間を驚かす力は有つてゐないのである。無い智慧をしぼつてお化の眞似をするのは馬鹿な話である。埃つぽい冬の朝にでも、薄ら寒い秋の宵にでも、縋縋を纏つたよぼ／＼の老人を、何處かの街上で見たとすると、その姿を凝視するだけで、人間の免れない運命を感得することは有り得るのだ。さういふ老人が五人七人と眼前に現はれるのを見て戦慄を覚えるのは、妄想とは云へないのである。我々は自己の周圍に恐怖すべき現實をつねに知つてゐる。事々しく仕組まれた恐怖小説によつては、却つて恐怖の實感の起らないことが多い。「二十年でも三十年でも、毎日同じ事をして居なくてはならぬ下級武士の運命」父が意地

のため、自分のために、牧を斬つてそれで仙波の名が高くなつたとてどうなるものか……」といふやうな、懷疑の念が、をり／＼青年小太郎の心に起るのは、「赤穂浪士」中の或人物が、復仇の價値を疑ふ心理と同様で、現代人の心に觸れる譯であつて、封建の階級制度に對する下級武士の不平、その不平が倒幕運動の一つの刺戟になつたことに、作者は目をつけてゐるのではないが、さういふ思想も氣まぐれに顔を出してゐるだけである。

幕末に於ける日本國民動搖史は思想的に見ても外形だけを見ても興味に富んでゐるのだが、この時代を材料にした小説や演劇は、私が見た範圍に於ては大抵は不愉快なものである。維新前後の豪傑型といふいやな型が出来てゐて、作家はその型に嵌めて人間を書いてゐる。「南國太平記」の人物だつて常套的幕末人物の臭氣が紛々としてゐる。島崎藤村氏の「夜明け前」は、ところ／＼讀んだに過ぎないが、この小説はさすがに違つてゐる。木曾の片田舎に寄せて來る時代の波を描いて、日本全體の變遷動搖を想像させる用意は整つてゐる。維新の改革に重要な役目を演じた西南の雄藩を題材とした「南國太平記」を讀んで、却つてあの時代の眞相が私の心に映つて來ないのだ。この作者の意圖は、評家伊集院氏の謂ふところの「薩摩藩のお家騒動を中心とした明治維新史」を描くのを主としたのではなく、齊彬齊興などと上置きした兩派の反目軋轢を素材として、作者自身の豊富なる空想を描出してゐるのかも知れない。しかし、この空想は作者獨得の色が乏しくつて人物の性

格、事件の構成が、在來の「幕末小説型」をいくらも出てゐないのだ。どういふ所にこの作者特有のところがあるのか、直木推讀者に訊いて見たいと思ふ。

文章は多少特色を有つてゐる。會話がボキリ／＼と途中で折れて、簡単に、手早く、受渡しされてゐるのは面白い。

二

「唐人お吉」も、幕末の史實にあつた評判の小説である。私は、先頃八重子の扮したお吉芝居を帝劇で觀たが、今、十一谷氏の作品を讀むと、作の大意は、兩者略同様であるに關はず、芝居より小説の方が藝術的眞實性に富んでゐて印象が深い。しかし、この小説は前篇がいゝので、後篇は少し齒痒い感じがする。材料を持扱ひかねてゐるやうである。「南國太平記」に比べると、規模の大小、波瀾の大小如何を別にして、私には、時代相がそこに現はれ、人生の一端がいき／＼と現はれてゐる點で、私は、「唐人お吉」の方を取るのである。維新前後は、戯曲の題材としても小説の題材としても、創作慾を喚ぶに足る事件に富んでゐると思はれるのに、今までろくなものが出てゐなかつた。明治以來文運隆盛だと云つても、それは凡庸な文人が輩出したといふ意味の隆盛であつたのだ。歴史家の時代史や史傳よりも、傑れた小説家の歴史小説の方が、その時代の實相をよく現はしてゐる筈なの

だが、日本にはさういふ小説は殆んどないと云つていゝ。維新後六十餘年を経てゐても、蘇峰氏の「近世日本國民史」の幕末篇に勝る歴史小説さへ一つもないのである。

塚原澁柿園の歴史小説は、日清戦争後、私をはじめて上京した時、幾人かの知友が頻りと賞讀した。舊式の英雄小説であつたが、それでも、硯友社一流の柔弱な今様の小説に飽足りない日本男子の心の糧となつてゐた。幸田露伴の「ひげ男」は、文章が雄健で色彩もあつて、澁柿園の藝術味の乏しい作品の比ではなかつたが、舊式の英雄小説たることに於ては、澁柿園とさしたる隔たりはなかつた。森鷗外が新史劇新歴史小説を創始してから、新形式の史劇や歴史小説の模倣者が續出するやうになつたのだが、この系統のもので、さう力の籠つたものは現はれなかつた。鷗外は明治文壇では、何と云つても群小作家をぬきん出た人物で、無造作に現代語で史劇を書き、日記や書翰だけに依つて、透徹した史傳的小説を書いたが、全精力を創作に傾け盡すやうな熱情家ではなかつたために、雄篇大作は殘さなかつた。鷗外のやうな、史實の考證に興味を持ち、人間心理を洞察する能力を有し、事相を適切に表現する文才を有つた作家に、幕末の日本を背景とした一大歴史小説を書かせたかつたと、私は思つてゐる。鷗外の史劇はさしていゝものではないが、思切つて現代語を用ひたのは卓見である。歌舞伎の舊い臺詞のマンネリズムは、聞馴れてゐるからさほどには思はないが、實はいやなものだ。直木氏のは左程いや味でなく、むしろスッキリし

てゐる方だが、他の二三の大衆作家の徳川時代用語は、歌舞伎の臺詞以上に不快なものである。あゝいふ用語を喜ぶ讀者は、その頭や耳の魯鈍を示してゐるやうなものだ。どうせ舊時代の用語が正確に分らないとすると、生半可な江戸言葉や武士言葉を用ひないで、思切つて現代語で書いたらいゝだらうと思つてゐる。その點から云つても、武者小路氏の歴史劇は、子供つばいところはあつても、古くさい垢がついてゐないだけでも氣持がいい。自然主義時代の無技巧説も尤もらしかつたし、武者小路氏の文章無視の文章も面白いが、しかし、文學に志すほどの人は、思想や内容のみを偏重して、無技巧に安んじてゐられる筈はないので、各人好みぐの技巧に心を注ぐやうになるものなのだ。谷崎里見佐藤の諸氏の如きは、文章だけでも後進の容易に追隨し難い特技を有つてゐる。私は、「唐人お吉」讀後に、川端康成氏の「淺草紅團」と、龍膽寺雄氏の「アパートの女たちと僕と」を速讀して、新舊文學の相違を考へた。卷末の年譜を見て、これ等新作家の年齢を知つて、私自身が今のこの三氏と同じ年齢の頃に、文學についてどういふ考へを抱いてゐたかといふことを回顧した。硯友社風の文學に飽足らなかつた當時の青年作家は、直接あるひは間接に、西洋近代文學の刺戟を受けて、徳川戯作家の態度文體から全然解脱した清新な作品を産出したつもりでゐた。寫實主義自然主義あるひはロマンチズムの流派に屬する、在來の日本の小説とはちがつたものが續出したのであつたが、しかし、どれも大成したとは云へな

いのである。「紅團」や「アパート」は、「新興藝術派」といふ漠然たる流派の傑作であるやうに云はれ、その名を冠した文學集に收められてゐるが、これをもつとハッキリさせるために、批評家の分類癖から區別したがる在來の流派のどれかに收めようとする、自然主義でもいゝし、ロマンチズムでもいゝと私には思はれた。自然主義の骨法は現實暴露にあると極められたり、モウパッサンの小説のやうな淫蕩なことを書く、自然主義だと云はれたりしたが、さういふ定義から見ると、この二つの小説は自然主義の作品なのだ。作者の空想で夢のやうなことを書くのがロマンチズムの小説なら、この二つの小説もその派に屬するのだ。小説といふものは、いくら新奇を企てても、形の上からは、この二つのどつちかで、「新興」と云つても、衣裳の柄が少し異なるのに留まることが多い。あの頃の我々は、日本の社會が今より不安であつた譯でもないのに、人間生活を悲觀したがる傾向があつて、自然主義の作品にその感じが出てゐたばかりではなくつて、小川未明氏や永井荷風氏など反自然派の作家のものにも、哀愁の調子くらはは流れてゐた。ところが、川端氏や龍膽寺氏などの作品には、私の見た範圍では、悲觀的哀愁的の調子が乏しい。作中の男女も快活だ。一昔前の作中人物よりも小ざかしくつてそして元氣がよささうだ。日本の西洋化も次第に進んで、西洋のやうに今日の生を楽しむ氣風になつたと思はれないこともない。作者もさういふ風に入間生を見るやうになつたのかと思はれないこともない。それが「新興」と

名づけられる所以であると断定すると、甚だ簡單だが、銀座風俗や海水浴場の風俗のやうに、底の浅い新しさで、一時代を劃するほどの力があるとは思はれない。「浅草」にしろ、「アパート」にしろ、昔の言葉ではお轉婆と云はれた女が、今様の着物を着、今様の言葉をつかつて輕快に生きてゐるのが、私などでも読んで面白くないこともない。しかし、かういふ作者は面白づくで情景を敘しただけのためか、彼等の主觀が我々に迫つてこないので齒答へのしない感じがする。型の如きプロレタリア觀に依つた小説も、讀み甲斐のしないものだが、雜報的「新興藝術派」小説も手頼りないものである。「浅草紅團」は浅草を背景とした作者の空想で、「アパートの女達」よりも、描寫にうまいところもあり、詩もあり、藝術上の出來榮えとして同列に置くべきものではないのだが、私は、ある人から、「新興派」の見本として指定されたから讀んだのだ。龍膽寺氏の作品にはこの短篇以上のものがあるに違ひない。

三

先日ある知人が、八月號の雜誌小説について話してゐた時、「新潮」所載の徳永直といふ新進作家の短篇「苦しい道」の文章を褒めてゐたので、私は早速それを一讀した。よくある型のプロレタリア文學で、主義に目醒めた闘士と、理解ののろい父親との關係、闘士と彼

女との戀愛の心理など、極めて有振れた筋立てで、私はそこに何等の新味をも感じなかつた。文章も單調凡庸で、しかもをり／＼感傷的な口吻を弄してゐるのにうんざりした。が、私は、この短篇にうんざりした次手に、勇氣を起して、この作者の長篇「太陽のない街」を通讀した。かつて築地小劇場で上演されて評判のよかつた徳永直氏原作のプロレタリア劇は、この長篇を脚色したものであつたのだらう。私は一度觀に行つたのだが、満員のために入れなかつた。その時からこの原作は讀んで見たいと思つてゐたのだ。

これも、「苦しい道」同様の勞働爭議事件を取扱つたもので、例の如くバサ／＼してゐて相當に讀みづらいのだが、我慢して讀みつゞけると、案外面白かつた。近來頻繁に現はれるかういふ種類の小説の代表作としていゝのではないかと思はれた。舊い意味の藝術も、新しい意味の藝術も、全體のなかに「藝術」はあまり含まれてゐないで、一つの爭議經過の報告書であり、爭議奮闘史である。「眞理の春」の著者などは、在來の小説家系統の人であるから、筆に綾があつて、作品がバサ／＼してゐないので、讀者の頭を疲勞させる度が少い。その代り、實際はどうだか知らないが、「眞理の春」には、おまげがありさうに思はれ、徳永氏のは、事實の克明な敘述のやうに思はれる。文章も上手ではないし、部分々々の描寫に、或光景や或人間の姿を浮上らせるやうな手腕は見られないが、太陽のない街のごみごみした一團の生活が、臙ろげにでも、我々の心に映る感じがするのは、作者の態度の忠

實と熱心との力であらう。「地獄と極樂の繪」と題する留置場の光景なんか、陰慘な空氣が濃厚で、私の心は捉へられた。一人の孫を見殺しにした復讐に放火した老婆、年増の賣春婦、縊縊ツ屑の少年などが、物凄いな面を出してゐるのだが、作者の知識が足りないのか、洞察力が足りないのか、あまり簡單で、一朵の黒雲が通り過ぎたのに留つてゐるのは遺憾である。しかし、それでも、有振れた平凡な留置場小説に比べると、多少印象的であると云つていい。

ナポレオンの傳記が面白いと云つても、一般の讀者に取つては、彼れの策戦計畫や實戦の詳しい記録は、あまり興味を惹かないものだが、「太陽のない街」にしても、争議その物に關する詳細な記録は、作者自身が力瘤を入れてゐる割合には、我々には感銘が薄い。軍人には、ナポレオンの戦術やその實戦の経路が参考になり、各方面の争議團組織者には、この印刷會社の労働争議の實録は、非常に参考になるであらうが、我々局外者には、さういふ記事は、読みながら面倒くさい感じがする。

この長篇にも「苦しい道」と同様に戀愛事件が挿入されてゐる。不斷の「戦争」の間にも、「戀愛」沙汰が、ナポレオンの生涯を色取つてゐたやうに、醒めては天下の權を握つてゐた維新の英雄も、酔つては美人の膝を枕にしてゐたやうに、争議團の英雄も女を閑却されないらしく、争議を主題とした小説にも、大抵は男女關係を取入れてゐる。陳腐と云へば陳

腐だが、人間の本性には、古今東西、英雄凡人、ブルジョア、プロレタリアの差別がない譯だから、話が自からそこへ落ちて行くのであらう。しかし、この長篇のやうな小説では、戀愛の取扱ひ方がちがふと作者は信じてゐるのかも知れない。作中のある女性は、「五人の家族を扶養するための淫賣なら、あんた方淑女様の神聖なる戀とかよりや、ウンといゝわ」と公言してゐる。「私達労働階級の婦人は、我々無産階級が完全に解放されるまでは、貞操はおろか、生命までも捧げなきやならないだつてね」と叫んでゐる。この意見も珍らしいことではないので、親兄弟のために、あるひは主君の仇にむくいる費用をつくるために、婦人が身賣りをするのは、封建時代の崇高な道徳になつてゐて、芝居や小説では陳腐な題材になつてゐる。「南國太平記」にも、ある少女の貞操を犠牲にしてまで敵に近づかせて相手を倒さうと計畫してゐるところがある。だが、せういふ理窟や外形を離れて、作中の男女を見ちやいけなだらうかと私は思つた。

長谷川誠也氏の「文藝と心理分析」を讀むと、思當るところが多い。フロイドの説に基づいた「白日夢と文藝」の如きも、一見奇矯の説のやうだが、人心を見破つてゐる感じがしないでもない。「詩とか、小説とか言ふものは、非常に複雑な性質をもつてゐるが、これを分析して見れば、白日夢の連続に外ならぬ」と云つてゐるフロイドの説について、長谷川氏はむしろ反對して、フロイドの文學鑑賞力をさへ疑ひ、彼れの所謂「詩や小説は、名譽權勢

女性富貴などに關する作家等の願望を精巧に假裝させた空想に外ならぬ」といふ解釋は、「巖窟王や三銃士のやうなロマンスには當嵌つても、古今の大作には當嵌らない」と云つてゐる。長谷川氏の反對説にも一理あるが、フロイドの説も甚だ面白いのだ。「工場に職を得た孤兒(あるひは貧民)の空想(白日夢)は、先づ一所懸命に働いて、工場主の信用を受けて、工場には無くてならぬ人となり、やがて工場主の家庭へ出入を許され、雇主の令嬢の婿となり、工場支配人となり、更に雇主の後継者となる」といふやうなことで、すなはち、幼少の頃に作つた空想(立派な邸宅、温かい家庭、富貴な生活など)の型に準じて將來の世界を描くと、フロイドは云つてゐる。文學者はかういふ人間の通有性を看破してゐるばかりでなく、作家自身も、意識的にか無意識的にか、さういふ氣持を有つてゐるのだ。貧しい作家は、他日志を遂げて、原稿料や印税がどつさり入るやうになつたら、街上や劇場で目に觸れて心に刻まれてゐる美人を妻として、郊外に瀟洒たる邸宅を新築し、高級な自動車を買はうなどと心の底で夢みてゐることが、その作品に自から現はれるといふやうな意味の觀察を、フロイドは何處かで下してゐた。私はそこには多くの眞實が含まれてゐると思ふ。通俗小説に於て正面からさういふ氣持が具體化されてゐるのを見るばかりでなく、「太陽のない街」のやうな、遊戯分子の乏しい、眞劍勝負の態度を持してゐるらしい小説にも、白日夢と思はれる影が見えないことはない。「それがあつた如く」「それがあつた如く」人

生の事實を直寫するのには堪へられないので、やゝもすると、人間を英雄化したがるのは、一つの白日夢の現はれである。鷗外の史傳風の小説は、多くの作者が書きたがらず、讀者は無論讀みたがらず、「南國太平記」や「赤穂浪士」風のもが榮えるのも自然の結果である。モウパッサンの小説の如きは、自然主義の標本で、「あるがまゝ」の生粹の表現と云はれてゐたが、本當はさうは云へないので、三十歳以前から病菌に冒されてゐた、彼れの頭腦に映つた特種の世相の現はれと云つていいのだ。「太陽のない街」のうちの人物では、高枝と云ふ女が、最も生きた女らしい面目を具へて活躍してゐる。これだつて、長篇中の主要の人物としてはあまりに簡單な描寫に留まつてゐるのだが、憎惡羨望嫉妬のひらめきに、人類生存の實相をあらはしてゐる。そして、この女の白日夢の影が自から映つてゐるのが面白い。贅澤な洋服に纏はれた、榮養のいゝ、愛くるしい顔をした、態度の尊大な、社長の孫娘に、毬を取つてくれと偶然命ぜられた時の心の動搖が、簡單に書かれてゐるが、これは、高枝が、女として幼少の頃から白晝夢に描いたものを、この孫娘の上になぞ／＼と見たのである。そして、現世で自分の夢が満たされないと知つた上は、その夢を満たしてゐると思はれる相手を亡ぼしたいのも、人間の通有性で、古今東西の傑れたる小説や戯曲のうち、力づくよく書かれてゐるが、女性にはその心理が強い。だから、最後に、孫娘が不慮の毒殺の悲運に會ふのだ。炯眼なる社長は、希臘悲劇の主人公のやうに、娘をあやして毒

藥を與へたのは「あいつだ」と認めながら、腕を組んで瞑目して、苦痛を堪へ忍び、「解剖したつて生返るかッ」死因が判つたつてそれが何になる、馬鹿め」と、「猛虎は己れの傷口のために後退りはしない」意氣を示した。高枝が門前で毬をついて遊んでゐる孫娘を見て、××××を與へたことが暗示されてゐる。これは、ちよつと見ると、不自然なことで、美食に飽いてゐる筈の社長の孫娘が、貧しい女の與へるアヒサン入りの團子か何かを容易く口に入れさうには思はれないが、事實は兎に角、貧しき女性の白晝夢を具象化した小説の一片として見ると、人生の眞實が伺はれるのである。

この長篇は争鬪報告書なのだが、私は作者の本意をそのままには受入れなかつた。むしろ作者の意圖に反した読み方をして、ひとり合點の興味を感じたのである。

四

「大衆文學」近來の傑作と云はれる「南國太平記」、「新興藝術派」の三秀才の作品、「プロレタリア文學」中の評判の一長篇を續けて讀んだ私は、讀後の印象を見詰めて、新時代の新しい文學の前に頭を垂れる氣持にはなれなかつた。「唐人お吉」によつてあの時代の片影を知り、「太陽のない街」によつて自分のよく知らなかつた現代世相の一端を知つたのは、知識の上で有益であつたが、新藝術の出現をこれ等によつて認めることは出来なかつた。無

論これ等の作家は、私の讀んだ作品以外に幾多の傑作を出してゐるのかも知れない。

兎に角、今はまづいものを書いてゐても、若い作家には將來があるからいゝ。私はゴルキーの近作長篇「四十年」を日本譯で讀んで失望した。彼れ老いたりと思つた。二葉亭の譯した「ふさぎ蟲」とか、「猶太人の浮世」とか、青年時代の彼れの小説は、反抗心にも富んだ生氣潑刺たるものがあつたが、「四十年」などには、ロシアの現狀に媚びて自己の老を守つてゐる趣きがある。鹽がその味を失つてゐるのだ。大トルストイにしても、「復活」では燒きがまはつてゐて、運筆が老人らしくどくて、全體に通俗のにほひが濃厚である。文學藝術に老熟は尊ぶべく、枯淡の味ひには、我々東洋人の趣味から云つて、最も心を惹かれるのであるが、しかし、若い時代に奔放自在に自己を發揮した作家は、傍から見ても、藝術に従事した甲斐があるやうに思はれる。私は、レルモントフの「現代のヒーロー」を、中村白葉氏の譯で新たに讀直して、自分が若かりし頃、小金井女史の古文調の「浴泉記」に感激したことを思出し、それとともに、この作者が、年少にして、この小説などは永久に早く暇を告げたことを考へた。ロシアの國狀がいかに變遷しても、この小説などは永久に新しいのである。日本は何事も移り變りの早い國であるが、若い血汐のみなきつてゐる「青春の書」と云つたやうなものは、かつてなかつた。今度讀んだ幾つかの小説についてもさう思はれる。岩野泡鳴がよく「みんな主觀の燃焼が足らぬ」と云つてゐたが、暗くも明るく

も、享樂追求にしても、階級闘争にしても、それが藝術に現はれたところでは、筆先の行届いてゐるゐないよりも、先づ、作者の主觀の弱さを感じる。藝術家として白晝夢が浅いのである。これは、日本人の國民性かも知れない。

それで、私は、將來の日本の文學に多くの期待を懸けてゐるのではないが、今のやうな混亂蕪雜のまゝで終るとは思はれない。徳永氏などの小説によつても察せるやうに文章語が野卑になり、人物の會話も殺風景になり、作者自身もさういふことを得意としてゐるらしく思はれるが、これは、日本在來の文學に關する知識の乏しいためでもあるが、他の思想同様、西洋文壇の新潮流の飛沫を浴びてゐるためとも云へるのだ。「無遠慮になつた世相はどの國の文學にも現はれてゐる」と、長谷川氏は、詳しくその實例を擧げてゐる。英國のやうな上品ぶつた保守的の國でもさうだ。「殆んどあらゆる方面に於ける社交上のタブーが除かれ、男女の行動は頗る自由無遠慮露骨となる同時に、舊時代のものは悉く流行おくれとなつた、ハックスリーの小説中の一青年科學者が、羊肉と神と、不滅の靈魂とヴィクトリア時代の小説家と、無邪氣な少女と、純潔、處女性などは、流行おくれだと云つてゐる。一ころの日本文壇で、現實暴露の模範的小説とされてゐたゾラやモウパッサンなどの作品も、今日の小説に現はれてゐるものに比較すると、なほヴェールを冠つてゐる。作中の何處かに宗教的、道德的、あるひは科學的芳香を吹送つてゐるやうに感ぜられる。し

かるに現代の小説には、ヴェールを冠つてゐる事物もなく、何等香水の匂ひもしない。また、若し何等かの芳香が有るとすると、それは裸の人間自體の匂ひである。」

西洋がさうだとすると、西洋の眞似をしたくてたまらない新代の日本作家が、この傾向を追はない譯はないのだ。野卑でも露骨でも無遠慮でも、在來の文學趣味を尊崇してゐる人々に眉を顰めさせるほどのものが續出してゐるうちに、新藝術新文章が出現する譯で、必しも悲しむべきこととは思はれない。しかし、昔ニーチェを學んで、「牙齒も爪もない」ニーチェたるに留まり、モウパッサンを學んで、感傷のない小説が現はれたやうに、野卑も無遠慮も、太々しい所には達してゐないのである。龍膽寺氏、徳永氏、その他類を同じうする作家の作品にもまだ「裸の人間の匂ひ」にむせぶほどのものはなさうである。

一知半解の外國語の濫用、無茶苦茶な假名使ひや漢字の用ひ振りは、これでも文學であるか、藝術であるかと、識者を歎息させてゐるが、これは必しも悲しむべきことでないのだ、この混亂動搖のうちから「新代の日本文學」が出ないとは限らない。それも要するに傑出した個人の力である。「ナツプ」といふものも、現代で有意義の働きをしてゐるのであらうが、その勢ひにひかれて、大勢が我れもくと入つて行くのは、少くも文學の上からは面白くないのである。好んで一つの型に入るのは愚かなことである。

大眾文學論 (三)

私は十一月初旬、東京滞在中、日比谷の市政講堂で「新しき村演劇部」の公演を見た。それから、歌舞伎座の立見場で、雁次郎中心の「時雨の炬燵」を見た。二つとも散歩の途次偶然立寄つて観たので、はじめから期待するところがあつてわざ／＼行つたのではなかつたが、藝術鑑賞について何かの意味を有つて、この二つが今なほ私の頭脳に残つてゐる。これ等二つのどちらも、現代の一般民衆の興味を惹くものでもなく、演劇社會の問題となるものでもなく、新聞雑誌の記事となる價値もないほどの微々たる存在に過ぎないのであるが、よく観ると、通りすがりに見た街上の些細な出来事にも、人生の眞相の感得されると同様に、偶然目に觸れた微々たる演劇にも「藝術と人生」の影があり／＼と映つてゐるのである。

東京は大都會である。今時ストリンドベルグの芝居が見られるのだ。「新しき村演劇部」では、この北歐の巨人の非通俗極まる戯曲「死の舞踏」を演じてゐた。それも、第一部は演じにくいためか、第二部三幕だけを上演してゐた。日本在來の「お芝居見物」の氣持で見て、面白い筈もなく解る筈もないのだ。素人劇團でかういふものに手を掛けるのは、盲人蛇に怖ぢずの感じがしないではない。所演甚だ無器用で、しかも、俳優の發音アクセントが關

西調なのが耳障りであつた。この作者特有の藝術味は現はされないので、骨つばい理窟ばかりが際立つた。が、それにかゝはらず、観てしまつたあと、ストリンドベルグは偉大なりと、私は感じて、「新しき村」の芝居を観てよかつたと思つた。この劇團は平生どういふ修業をしてゐるのか知らないが、芝居摺れがしてゐないのと、眞面目なのが快かつた。エドガーとクルトの二役は、役者の風采態度が無骨で野暮つたさの限りであつたが、築地式の新劇臭なく、役者々々したところの皆無であつたのも、後での思出を氣持よくする。當世に流行しようとすまいと、「死の舞踏」に感激したからそれを演じるのだといふ意氣には、私の好意を寄せる。日本でも、イブセンやストリンドベルグなどが、新代の青年の心に觸れて、熱心にその作品が學ばれ、あるひは舞臺に上演された時代もあつたが、かういふものは、近年全く顧みられなくなつたやうである。陳腐な藝術とされてゐるやうである。しかし、あれほどの作者の戯曲が、十年や二十年で陳腐になるのであらうか。その後の日本に、どんな深味のある新しい演劇が現はれてゐるのであらうか。アメリカのやうな國でもニューヨークの幾百といふ多數の劇場が、その興業季節に、さまざまの大衆的新劇や、新しい意匠を凝らしたレヴューなどを上演する間に、イブセンとかチェホフとか、英佛の古典劇とか、世界戯曲史上に動かざる地位を占めてゐる巨匠の作品は、毎年演ぜられて、それが重きをなしてゐる。文學でも演劇でも、大衆化し通俗化するのは、世界の趨勢であ

るとしても、それだけで安んじてゐられない傾向もあるのだ。理論はどうにでも立つとして、「文學は大衆文學に限る」「演劇は通俗劇に限る」と、すべての文學好き、芝居好きが、さう思つてゐるのなら、大衆趣味通俗趣味に適しない藝術は滅亡する外はないので、必要のないものの滅亡するのは天地自然の理法であるが、現代の日本に於ても、ストリンダベールの「死の舞踏」に感激して、それを上演する一團の、非大衆藝術愛好者も存在してゐるのである。映畫以外、劍劇以外、もつと観客の心魂を惱ます面倒くさい演藝、電車の中で讀むに適しない小説などを要求する藝術慾が、日本に絶滅した譯ではあるまいと、私は、「新しき村」の演劇を観たあとで感じた。

この技巧の幼稚な劇團の所演を観たあと、雁次郎の所演を観ると、歌舞伎としての技巧の妙には感心しながらも、「時雨の炬燵」そのものについては嫌悪を覺えた。その一篇に歴然と現はれてゐる、通俗的惡趣味を不快に感じたのである。近松門左衛門の「天網嶋」は「平家女護島」のやうな惡作とは異り、彼れの作品のうちでも、最も圓熟したもの一つで、色香の河庄の場と、紙屋内の場と相對して、あの時代の世相と人間とを、巧妙な文句を驅使して、生けるが如く現はしてゐる。かういふ傑れた藝術家の手に成つたものは、時代の隔たりによつても陳腐にはならないので、今日の我々が讀んでも、人間の眞實に心を打たれるのだ。少しも古臭くは思はれぬのだ。ところが、この日本の有する傑れた民衆藝術家の

作品が、改作の「時雨の炬燵」に於ては、滅茶苦茶に傷けられてゐる。民衆の趣味に媚びたための改作であらうが、民衆はなぜ、原作の、自然そのままの姿を翫賞しないで、惡どい繪具で塗潰したやうなものを喜ぶのであらうか。改作者は、いやな小細工を施し、原作のおさんやその父親の人間性を蹂躪して、それをもつて一趣向凝らしたつもりである。

この歌舞伎式趣向は、多く不自然な、いやなものだが、徳川期の通俗文學には、かういふいやな趣向が附纏つてゐる。今日の大衆文學にもかういふいやな趣向が附纏つてゐる。私は明治の初期に生れたため、幼い頭腦に、まづ徳川の大衆文學を詰込むことによつて、文學趣味を養はれた。上京後も、歌舞伎芝居に耽溺し、落語を聴き、たまには講釋場へも通つてゐたのだから、私は、大衆文學を蔑視しながら、私の文學鑑賞には、自分では意識しないうちに、大衆文學臭味が漂つてゐるかも知れない。その代り、在來の和漢の大衆文學について、可成りの知識を有つてゐるため、それに照らして今日の大衆文學を批判し得られるの便利もあるのだ。

明治初期の、過激な演劇改良論者であつた、愉快なる老文學者依田學海翁に、日露戰爭當時或家で會つて、その演劇觀を謹聽したことがあつたが、その時翁は、「私が若い時分、師匠の使で或所へ行つた次手に、芝居を覗いたことがあつたが、それが書おろしの鼠小僧で、小團次はこれで人氣を取つたのだ。ところがそんな古くさい芝居をこの頃も演つてゐ

る」と云つてゐた。翁は、「鼠小僧」のやうな下等な泥棒狂言が、文明時代の今日の劇壇に上演せらるのを非難してゐたのだ。しかし、「無學な頭の古い新七などが」と、黙阿彌を罵倒してゐた學海先生自身の思想、道德觀、文學趣味は、曲亭馬琴などと左程に相違してゐなかつたことは、その作品や論文を讀んでも略推察せられる。當時の青年作者紅葉山人などの新作を賞讀し、「罪と罰」のやうな翻譯小説をも愛讀されてゐたが、その翫賞ぶりの舊式であつたことは、その批評文によつて證明される。私が今日の所謂「大衆文學」なるものを讀んで、「今時、こんな古くさいことを、若い身空で、よく書いてゐられるものだ」と思つても、學海翁同様、私の頭には古い大衆文學趣味が絡みついてゐるかも知れない。

今日の文壇では、多數の讀者を目當てにした小説は、「大衆文學」と「通俗文學」との二つに何時誰れが言出したともなく分類されるやうになつてゐるが、前者は歴史小説であり、後者は現代小説であるらしい。昔の小説を例にして云つたら、「水滸傳」や「八犬傳」が大衆文學で、「梅曆」や「紅樓夢」が通俗文學である譯だ。この分類は、文學史などに採用するには妥當でないのだが、私は今は、漫然たる今日の分類法に従つて、「大衆文學」觀を述べようと思つてゐる。

「水滸傳」や「八犬傳」や「弓張月」は精確な意味の歴史小説ではないが、今日の「大衆文學」だつて、多くは、過去のある時代を假定してかゝつただけで、内容は、史實に拘泥してゐ

ないやうである。私はかつて、大佛次郎氏の出世作「赤穂浪士」を讀んだ。先頃、最も世評の高い直木三十五氏の「南國太平記」の上中二篇を讀んだ。そして、數日前から、三上於菟吉氏の長篇「清川八郎」を通讀し、「南國太平記」の下巻を卒業し、長谷川伸氏の「馬頭の錢」と、吉川英治氏の「貝殻一平」とを通讀し、小島政二郎氏の「新版義士銘々傳」中の幾篇かを讀んだ。その他二三の長篇「大衆物」をもところ／＼覗いたが、これは全部讀まないから、書名は擧げないで、ひそかに参考に供するに留めた。全體大衆小説なるものは、徒らに長つたらしい。日本人は精力に乏しいので、明治以來の文學史を見ても、知名の作家の作品の多くは短篇で、「金色夜叉」だつて、左程の長篇ではないのだが、作者はそのために壽命を縮めるほどの苦勞をしたのだ。それ故、大衆作家が平然として幾つもの長篇を書きこなす精力には、一應驚かされるのだが、しかし、讀んで見ると、徒らに長つたらしいだけなのだから、さう驚くには當らないとも思はれる。「戦争と平和」の長いのは、長いといふ意味が違ふのである。

私は大衆文學臭紛々たる間に坐して、「清川八郎」の追跡を一時中止して、久振りに、「水滸傳」を、有り合せの高井蘭山譯により、「武松虎を打つ」あたりから讀みかけたが、つひ心惹かれて、半日ばかりで十幾卷を讀みつゞけた。蘭山の譯はなだらかで讀易いが、原作の力も詩趣も、よく傳へてはゐない。年少の頃山間の私塾で、原文によつて最初の數卷を

朗讀したことが、夢のやうに思出された。「紛々たる五代亂離の間、一たん雲開けてまた天を見る」といつたやうな發端の詞句の思出などには、西洋の文學愛好者が、年少の頃學窓で學んだホーマーの「イリアッド」の詞句を、老境に達して思出すと同様の懐しみがあるのだ。伏魔殿の神祕な扉が開かれて百八の妖星が黒暗々の洞窟から解放され、人間の形を取つて地上に活躍するといふ趣向は、犬を父とした八人の豪傑が生れ出るやうな汚らしい趣向よりは、遙かに壯快である。「紅樓夢」にしろ、「水滸傳」にしろ、滿紙荒唐の言であるが、「水滸傳」の豪傑、「紅樓夢」の色男は、支那人の理想を現はして、讀者の心をそよつてゐたのである。超人的腕力を有し、超人的酒量を有し、強權に反抗して弱者を庇護するのが、「水滸傳」の豪傑の通有性であるが、三上氏描くところの「清川八郎」も、この型から打出された豪傑である。かういふ小説が、今日の大衆に喜ばれるとすると、明治以來輸入されたさまざまな新思想の刺戟も、人間性批判の進歩も、大衆の心核にはさしたる動搖をも及ぼさないで、今なほ昔の如しと思はれた。非凡な藝術眼を有つてゐた批評家金聖歎は、あの時代に生きながら、「時雨の炬燵」的のケチ臭い道德癖に捉へられないで、「水滸傳」の後半を小氣味よく棄てた。そして、「忠義水滸傳」を豪快なる藝術小説たる「純水滸傳」として批判を試みた。こせ／＼した煩い道德に捉へられてゐた馬琴の「八大傳」の、今讀むに堪へられないのに比して、「水滸傳」の方は、我々が今なほ、すが／＼しい氣持で讀み得られる所以である。

る所以である。

「清川八郎」は、「水滸傳」豪傑の末流らしい豪傑型の人物として描かれるとともに、絶えず勤王の胄を被つてゐるため、人間的行動が重くるしい。プロレタリア派の作家が、作中の人物を主義の化身としたがため、人間的描寫がおろそかになるのに似てゐる。作者が清川の主義に感激し、勤王家の心理に共鳴して、ところ／＼筆に熱を帯びてゐるのは、推讀に價しないこともないが、勤王討幕の問題は、差迫つた現在の問題ではなく、六七十年前にすでに解決されてゐるのだから、今日の作家たる三上氏の如きは、もつと冷靜にあの時代を觀察し描寫し、清川をでも安積をでも、もつと我々同様の人間らしい面目をそなへたものとして寫したらいいだらうと思はれた。大衆がそれを好まないためであらうか。徳富蘇峰氏は氏特有の日本主義に基いて國民史を書いてゐられるやうだが、私は、氏の「關ヶ原役」の一篇を讀んで、さすがに政界の波瀾表裏を熟視した人ほどあつて、人間の行動を主義の型で動くやうには觀てゐないのに感心した。今日の私は、蘇峰氏の思想にも文章にもさして感動し得られなくなつてゐるが、「近世日本國民史」の、はじめの方の幾篇かは、傑れた史篇として愛讀した。氏の史眼は、日本外史の著者のやうに通俗ではない。氏の間を觀る目は、今日の大衆文學家のやうに凡庸ではない。

八丁堀の與力木橋某は、三上氏の頭腦から捻出された人物で、大衆物型の人間のうちで

稍異彩を放つてゐると云つていい。幕府の役人として、反逆者を追跡してゐるうち、相手の人格と思想に感化されて、遂に職を抛つて、その門下に属したのが、その心理過程がもつとよく敘せられ、維新後まで生延びた彼れが、いろ／＼な職業に従事しても、最早世と調和されず、「江戸ツ子て奴は、彰義隊で死に絶えたなあ、あれなんざあ、もうぬけ殻だ」と云つた、そのぬけ殻のやうな姿になるまでの経過がよく書かれたら、「幕末型」「勤王型」の豪傑清川八郎の生涯よりも、よつ程面白い譯なのだ。しかし、これは大衆の讀物に適しないためか、端役として働くに過ぎなかつた。端役であつても、かういふ人間を選んで、多少その心理に觸れて見たところが、三上氏の現代作家たる所以で、曲亭馬琴ならかうは行かないのだ。

斬合ひを敘するところなんか、馬琴その他の舊幕の大衆作家が、「丁々發矢、丁發矢。右かと思へば忽然と左に現はれ」と云つたやうな、抽象的概括的の敘法を取つてゐたのとは異り、直木三上の諸豪は、萬年筆のペン先が劍の如く光つて、小手がよく利いてゐる。昔の歌舞伎役者の大間な立廻りと、新國劇團の劍劇と異つてゐるが如くであつて、これも時代の相違である。この長篇も、「南國太平記」の下巻同様に、終りに近づくほど、筆鋒が鈍り、文章に弾力がなくなつてゐるが、土浦の厄難あたりは、會話も文章も調子づいて、講談口調だ。大衆はかういふところを喜ぶんだと、私は思つた。直木氏は私の批評を駁し

て、「下級武士の不平なんかの心理を取扱ふのは、大衆文學者として重要なことではない」と云ひ、大衆は現實離れした空なことを喜ぶのだから、その好みに投するやうに心掛けてゐると云つてゐた。氏の説は當を得てゐるかも知れない。しかし私は、自己の多年養ひ來つた文學鑑賞の境地を、一般大衆の趣味に低下させて批評を試みようとは思はない。そして、私も、奔放自在な空想には、今なほ藝術的興趣を覺えてゐるのだ。しかし、近代文學が舊文學を凌いでゐるのは、人間の心理に深く立入ることであり、現實の世相現實の人間をあくまでも追究して、白日の下に暴露することであり、幻影も空想も、アラン・ポーの作品によつて證明される如く、現實以上の現實として光彩を放つことである。假りに我々が現代の文學によつて解脱を求めるとすると、それは現實を極め盡したあとの解説である。「癡人の懺悔」を経、「死の舞踏」を経たあと「ダマスクスへ」に達したストリンデルベルグの境地がそれである。現實を蔑視した空想の發露なら近代文學はとて古典文學に及ばない。イブセンもストリンデルベルグも、「水滸傳」や「西遊記」に及ばない。魯智深が拳固を揮つて惡漢を殺し、亂酔して法場を鬧がすところ、武松が虎を打ち、また姦夫西門慶を殺すところ、超人的の拳闘であるが、理智を脱した作落の空想は、金聖歡をして感嘆せしめた波瀾ある文章とともに、甚だ痛快なのである。「清川八郎」や「南國太平記」に現はれてゐる空想は、それ等に比べると、甚だ凡庸であつて、凡庸なる講談師も敢てし得る程度である。そ

れも無理はないので、直木三上諸氏も現代日本の文人であるから、空想の飛躍性に乏しいのは當然で、いくら創作頭脳を絞つても、空想の羽ばたきは薄弱なのだ。現代の文人として、變な空想をこね廻してゐると、作家自身に氣恥かしくなりはしないかと、私は、讀みながら感じることもあるのだ。

私は、和田萬吉氏の努力によつて刊行された馬琴の日記一冊を讀んで、異常の興味を感じた。馬琴の日常生活がこれによつて歴然と分つたのである。小心な彼れは生活のために離脱してゐたのだ。下婢の雇入れについても絶えず屈託してゐた。華のお江戸でも、普通の市民は、今から見て、怪しい生活をしてゐたことが、この日記によつても推察される。しかし、馬琴は堅實一方の生活をしながら、創作の上では、英雄惡漢貞女姦婦を華々しく活躍させてゐた。彼れは、自己の實生活と創作の世界とを、全然分離させることを、文學者至當の態度として、そこに何等の懷疑を起さず、反省もしなかつた。だが、年老いて、兩眼ほとんど盲し、生の難きを感じるに及んでは、從來の執筆態度をふと踏外して、自己の心境を語つた。それは、「八犬傳」の最後に添へられた「回外剩筆」である。幾十年の間空想ばかり書續けて來た彼れも、つひに眞實の一端でも語りたくなつたのだ。「讀者が空を好むから、空に空を重ねていゝのだ」と、現代の作家が空嘯いて安んじてゐられるのが、私には不思議に思はれないこともない。私は馬琴の日記に興味を感じるとともに、施耐庵が日記を残してゐたら面白いだらうと思つてゐる。

「清川八郎」を繁公といふ男などが追跡するのは、大衆文學の常套で、讀者の興味を惹くのだが、その點では、近來は舶來の探偵小説といふものがあつて、奇を盡してゐるので、この小説の追跡ぶりなんかによつては、私などは何の刺戟も得られない。そんなところよりも、この小説には、例の木橋與力、或ひは伊半田某などの斷片的感想に、「水滸傳」離れのした妙味があつて、かういふ心境に重きを置いて書いたらよささうなものだと思はれた。しかし作者三上氏は、直木氏同様、「大衆文學者がそんな所を狙つてたまるものか」と云ふかも知れない。

二

私は小學校卒業後、田舎の漢學塾に一年ばかり通つてゐたが、あの時分には、幕末の豪傑氣風がまだ私塾には残つてゐた。「衣衾に至り袖腕に至る」ことを健兒の特色とし、闊で編んだ傘のやうな大きな帽子を被り、肩を怒らして詩吟なんかをして、神州男子を氣取つてゐた。私は、農家の一室に寄寓して、松籟を聞き泉聲を聞きながら、「水滸傳」を讀み民友社の新刊書を讀み、舊文學の夢に誘はれ、新時代の思潮に心躍らせてゐたあの時分のことを懐しく思ふとともに、幕末臭のまだ漂つてゐた私塾氣風を思出すと、たまらない嫌惡

を覚える。私は幕末風俗圖の複製を見てゐたのだ。「松下村塾」にしろ、「健兒社」にしろ、私の知つてゐる私塾氣分のもつと濃厚なものであらうと思はれて親しまれないのだ。だから、私は幕末劇を好まない。「南國太平記」や「清川八郎」の作者が幕末氣質を讚美してゐるらしいのを不思議に思つてゐる。今日の知識階級の人々が、かういふ小説を愛讀し、幕末氣分に共鳴するのを不思議に思つてゐる。根深い日本國民性がそこにあるのであらうか。しかし、同じ國民性の發露にしても、幕末氣分よりも、四十七士の復讐沙汰の方が、一般民衆にはもつと親しみが深いやうである。講釋師の米櫃であつた「赤穂義士」は、今日も、また將來も、大衆作家の原稿稼ぎの材料として馬鹿にならないに違ひない。幕末の義士のやうにバラ／＼になつてゐないで、一かたまりに纏つてゐて、その名前が民衆に記憶されてゐるのも便利だ。四十七人といふ數も、多くなく少くなく、丁度手頃である。曾我兄弟のやうに二人きりでは、種が盡き易く單調になるし、何百人何千人では、散漫で印象薄弱になる恐れがある。徳川期百餘年の間に、まことと空言そらごととまぜ合せて、いろ／＼な材料が豊富になつてゐる。しかし、私は、いろ／＼な「義士」物を讀んだり、見たりしても、矢張り「假名手本忠臣藏」以上のものはないやうに思はれる。近年は、西洋文學の感化により、由良之助その他の義士、九太夫その他の不忠者について、常套を脱した新解釋を試みた作品が幾つも出たやうだが、傳統的國民性は根強いもので、大衆はさういふバタ臭

いものには共鳴しないらしい。大佛次郎氏は、義士傳の新解釋により、現代的取扱ひによつて、大衆作家として重きをなすにいたつたので、私もその新作長篇を可成りの興味をもつて通讀したのであつた。義士物語の一つの代表作として傳ふるに足ると思ふ。しかし、新味があると云つても、まで煮え切らないところがあり、中途半端の感じがあり、徹底した新味があるのではない。徹底してゐないからこそ、多數の讀者に喜ばれてゐるのである。私は、「幕末物」よりも、仇討とハラキリによつて人生の理想を表現した有名な事件を、現代作家がどう取扱ふかといふことに、かねて興味を有つてゐて、義士に關した新作戯曲や新作小説ををり／＼讀んでゐる。今度は、小島政二郎氏の「新版義士銘々傳」を買つて來て、この作者は、どういふ風に書いてゐるかと思ひに讀んだ。ところが、私の讀んだ四五篇について云ふと、この作者の創作態度はひどく大人らしく、裏をひつくり返して見てやらうといつたやうな皮肉なところは、ちつともなかつた。そのために私は失望はしなかつた。多分森鷗外あたりからはじまつたらしい歴史傳説の現代的解釋——仇討が馬鹿らしくなることに同感したり、女にひつかゝつて仇討の時機におくるところに却つて豊かな人間味を見たりする作意も、はじめは珍らしくても、何度もその調子でやられると、マンネリズムが鼻につくのだ。小島氏のは、傳來の義士氣質をそのままに受入れてゐるのだが、惡どいところがない。しやちこ張つたところがない。浪花節、講談その他在來の義

士物語に比べると、筆がスッキリしてゐて氣持よく讀まれた。「勝田新左衛門」篇中の、男大竹重共衛の描寫は殊にうまいと思つた。……大衆小説といふと、いやに力みかへつた書き方をして、野暮つたく、田舎臭く、緞帳くさく思はれることがあるが、小島氏のは、在り來りの物語以上の内容はないにしても、くさ味のないだけはいゝ。

堀部安兵衛、赤垣源藏、前原伊助など、徳川時代に理想化された大石門下の英雄義人を、施耐庵によつて支那人好みに理想化された宋江部下の豪傑、花和尚魯智深や、黒旋風李逵や、九紋龍史進などに比べると、その柄の小さいのが目につくが、日本人の空想化理想化は、そんな突飛な境地に達し得られないのである。その代り、「水滸傳」風に大味でなくつて小味な味ひを、理想化された赤穂義士はそれ〴〵に持つてゐる。上司小劍氏は、先頃日新聞の文藝欄に於て、「南國太平記」には小味なところがあると云つて、その點を推讃してゐた。私は氣づかなかつたが、或はさういふ味があるのかも知れない。しかし、それと同時に、小劍氏は、日本の自然主義系統の作品にはさういふ味がないと云つてゐたが、私はその説に同意し得られないのである。あの頃の自然主義の作品も日本人の作品らしく、小味なところはあつたのだ。獨歩の小説はその小味なところが取柄であつた。秋聲氏の小説も小味な味を有つてゐるのが生命なのだ。泡鳴のやうな大ざつばな作風もあつたが、藤村氏の小説も決して大味ではない。「南國太平記」あるひは「清川八郎」のやうな作品に比べ

て、自然主義の作品に小味のところがないと斷ずるのは、私には不可解である。

三

版元の講談社が「評判小説」と銘を打つた、長谷川伸氏の「馬頭の錢」は、美女の貞操蹂躪未遂から話が始まつてゐるので、いやなことを書くと思つて、作者の創作態度に不快を覺えたが、兎に角我慢して讀みつゞけた。大衆小説と云つても、これは歴史小説ではない。空想の世界を幕末時代に取つたつもりらしいが、直木三上氏等の作品が時代物ならこれは世話物である。文章の修練も大佛直木三上小島の諸氏に比べると劣つてゐると感じたが、無技巧で樂々と運んで行くところに才氣は見られた。筋立の回轉が目まぐるしいが、しかし思ひつきは敏捷である。私は、「南國太平記」よりも「清川八郎」よりも、退屈しないで、「馬頭の錢」を讀通した。この小説も、終ひになるほどダレてゐる。趣向の智慧も盡きたのか、同じやうな場面が繰返されてゐる。錢太郎といふ主人公よりも、敵役の浪人の俣五郎の方が讀者の興味を惹くので、殺人的武術の達人であり、冷酷無殘一點張りであつて、出沒自在に活躍するところに、この一篇の生命があるのだ。どの大衆小説も、超凡の強者を中心人物にすることが定則になつてゐて、その人物が忠臣義士であらうとなからうと關はないので、悪漢が牙えた手腕を揮つて他を倒すのも、讀者をして痛快感を起させるのだ。

ところが最後に、この作者によつて俣五郎の心理の秘密が打明けられたのだが、それによると、この怪漢は在來の大衆小説の豪傑或ひは兇漢とは違つた心理を有つてゐた。彼れは致命傷を帯びて、血汐をしたゝらせながら、喘ぎ／＼、墓地へ匍寄り、石碑のうしろの石蓋を取除け、十餘筒の麻の袋を引上げたが、その中には小判が詰込まれてゐたのである。彼れは、血だらけの手で小判を取出した。「だれにだつてこの金を、手にも觸らせるものか」「節儉に節儉して貯へた俺の金」「金は七生かけておれの物だ」と、彼れは呟いた。小判の上に腹這つたまま、唸つた。「一枚でもつかつて見ろ祟るから。」一枚残らず、悉くおれの血潮で染めてやる。極印代りだ。「一枚残らず血で染まれ、おれはどの小判といはず命を賭けなかつた事はない。おれ一代はみんなこの金に傾けた」と、彼れは、地上に撒かれた黄金の上を蚯蚓のやうに這ひ廻つた。「フフ、洗うても落ちるなよ、おれの血潮」と、彼れは夥しい小判に命令した。そこへ駆けつけた捕吏の三五郎が彼れを捉へるとともに、その蓄財を怪んで、「こんな處に斬取りした金を埋藏してゐたのか。やい俣五郎、手前こんな金を埋めて置いてどうするつもりだつた」と、繰返し訊かれても、俣五郎は、「たゞ一枚もつかはせぬ、血の極印を打つた」ときれ／＼に力なく叫んだ。「おれの小判だ」と、血の手をぶるぶるさせながら、断末魔に云つて、それでおしまひなのだ。

周囲を戦慄させた颯爽たる豪傑の究極した心理の底はこれだつたのだから面白い。昔の

大衆小説中の豪傑なら、「水滸傳」の菜子園張青夫婦の如く、「弓張月」中の爲朝の妻白縫とその配下の如く、大望があつて軍用金を集め、或は味方を殖やすために、裕福な旅人や剛健な武士にしばれ薬の入つた酒を飲ませたり、山賊的行爲をした。或目的のために斬取強盗をも敢てしたのである。少くも「鼠小僧」程度に、富める者から奪つて、乏しき者に恵むのである。今日の大衆小説中の豪傑的盜賊にはそんなのが多いのではあるまいか。ところが、「馬頭の錢」の兇漢の物凄い行動の連続は、讀者の豫想に反して、徒らに金のために金を蓄へてゐたのだ。自分の物慾を充すためでもなかつた。彼れはその情婦が疑つてゐたやうに賭博に耽つたのでもなかつた。酒色に耽つたのでもなかつた。色慾の發作をも金を費さずして満足させようとした。大きく奪略するばかりでなく、情婦が萬引してコツ／＼蓄へた金をも、天井裏から索出^{さうしゅつ}して、それが當然の理である如く堂々と持つて行つた。特異の性質を有つた創作的人物である。……容易く悔悟した「性は善なる」錢太郎といふ、古本の大衆文學に有振れた盜賊とは異つたところが面白い。そして、自己の手腕を信じて何人をも恐れない豪膽不敵の俣五郎も、技藝が鬼神の境地に達してゐる神樂師出雲の前だけでは氣おくれがしたのだ。相手の顔面に凝集した氣魄に對しては、持前の怪腕も揮へなかつた。物質慾がいかに強力であつても、氣高い精神力には敵しないことを暗示して、全篇の作意の單調を破り、また、稍^{ちと}もすると下卑^げて低級に墮ちさうな筋の運びを、錢太郎が笛勝

の衣物の端を齒で喰へて、後者が千仞の崖から落ちるところを辛うじて救つたと同様に、救出してゐる。

それで、私は、長谷川氏の小説に、豫期せざりし感興を覺えることになつたが、これは、私が讀後、自己の空想によつて、作意を補綴したためでもある。具象的描寫が乏しい。大衆好みを志して筆を採つたために、外形の變化が忙がしく、落着いて事相を描寫する氣になれなかつたのであらうか。俣五郎があれほど黄金熱愛慾を有つてゐたのなら、作者は最後にその心理を打開けるに留まらないで、絶えずその心理によつて、彼れの行動を裏づけなければならぬ。讀者に向つて露骨に説明しなくともいい。作者自身の胸中にさういふ人間としての俣五郎をしっかりと把握して筆を運んで行つたら、文字の間におのづから彼の眞面目が生動する筈であるが、作者自身も不斷は忘れてゐて、しまひになつて、思出したやうに、「彼れはかういふ人間であつたのだ」と説明してゐるやうな感じのするのは飽氣ない。最後になつて、讀者に意外な思ひをさせようとするだけの趣向なら、藝術家としての抱負小なりと云つていい。槻大盡菅原源右衛門は、錢太郎、俣五郎の二人にいちめられる重要な人物なので、頻繁に作中に現はれてゐるのだが、作者はいつも頭から侮辱的筆法を用ひてゐるだけで、全然描寫を缺いてゐる。「水滸傳」中、豪傑に拳固をくらはされる奸物、鎮間西郷居にしても、西門慶にしても、その面目と舉動とがきびく／＼と活躍するやう

に描かれてゐるのだ。「水滸傳」の豪傑の人となりや行動は、大抵似たり寄つたりで、今日から見ては無論個性を缺いてゐるのだが、金聖歎の批評によると、百種百様で、同じやうに見られる事件の経過も、仔細に文章を検すると、そこに描寫の相違があるのださうだ。俣五郎などが槻大盡の寢室へ忍込んで脅かすのも、度々のことなので、讀者は「また」かと思つてウンザリするが、作者は、相違した描寫を用ひて、そのウンザリを吹消すだけの藝術的技倆は見せてゐない。

「清川八郎」と、「新版義士銘々傳」と、「馬頭の錢」とを、順々に讀みつゞけると、昔、歌舞伎芝居を觀た時のやうな氣持がした。一番目中幕二番目と、狂言の並べ方が體をそなへてゐる。そして、この二番目は、特異の人物を取扱ひながら、默阿彌の世話物同様の勸善懲惡主義を根柢に置いたつもりらしい。その態度が序文に於てほのかに洩らされてゐる。文學に於ける勸懲主義教訓主義の是非は、すでに説き盡されてゐるが、默阿彌の世話物同様の、この小説に於ても、錢太郎よりは俣五郎、貞女あさやよりは萬引女お作の方に讀者の興味が惹かれるやうに書かれてゐるから妙だ。

「小説神髓」以來明治の日本にも、新文學が發生しかけて、二葉亭や鷗外の翻譯小説、紅葉露伴などの新味ある小説が、新代の讀書人に迎へられてはゐたが、日本人の傳統的文學趣味は、さういふ作品だけでは満足せられなかつた。硯友社風の柔弱な作風や、平凡な寫

實的のものは、大衆ばかりでなく、文學好きの多數の青年の嗜好にも適しなかつた。それで、浪六の元氣のいゝ俠客小説や、涙香の探偵小説が、他の純文學を壓して歓迎されだした。當時の有力な批評家内田不知庵が、明治二十五年頃の「國民之友」に於て、波六涙香の作品を低級な文學として猛烈に攻撃したことを、私は記憶してゐる。それに對して、當時の獨逸文學通の石橋忍月が、涙香を卑俗視することに同意するが、波六には文學價値がある、と、浪六のために辯じてゐたことをも、私は記憶してゐる。浪六の「三日月」や「奴の小萬」などの、今日で謂ふ「まげ物」なるものは、甚だ單純であり、薪雜棒のやうに、味のない武張つたものたるに過ぎなかつたので、間もなく消滅して、「あゝいふ物は一時の反動に過ぎなかつた。新文學の流れは、あゝいふものに亂されないので進む」と思はれたが、それも早合點であつた。浪六系統の文學趣味は、他の思想と同様、日本人には根柢が深い。自然主義の海外移植文學も、さして發展しないで萎靡した。いろ／＼な海外の目ざましい文學も、我々はたゞそれを驚嘆して眺めるばかりで、日本ではさういふ種類のものは、まだ十分に實を結ばないのだ。永久にさうではないかとも思はれる。林檎でも梨でもネーブルでも、外國の種を移して、外國に劣らぬものが産出するさうだが、文學はさういふ譯に行かない。「小説神髓」以來、新文學に力をつくした人は多いが、土壤が適しないのか、香氣馥郁たる花も開かず、滋味の豊かな實を結ばなかつた。……日本は日本だから、日本流

の文學でいゝと云へばそれまでだが……。

横へ外れた感慨は壓へつけることにして、大衆文學について云ふと、浪六系統のものが、「清川八郎」の勤王行動のやうな潛行運動を、明治大正の文學史を貫いて續けてゐたらしく、長谷川氏その他の小説は、波六などの小説とは比較にならないほど進んでゐる。徳川時代の草雙紙讀本よみほんよりも進んでゐる。森鷗外が、歴史物を書いた頃、新代の批評家から「高等講談」だと、侮蔑的に云はれてゐたが、あの枯淡な筆で、何のケレンもなく史實や傳説を描寫した小説が「高等講談」であつたら、今日の大衆小説は何と評していゝのであらう。あの頃は、文學に深いもの高いものを求め、講談を一概に下級低劣として卑しんでゐたのだが、今日はさういふ説は、文壇でも通らなくなつたらしい。講談の延長たる大衆小説が、白晝大刀に反りを打たせて濶歩してゐる。

四

大衆小説の代表作の一つとして選ばれた吉川英治氏の「貝殻一平」が、私の座側に置かれてゐる。私はこの大部の新刊小説のページをめくつて、「長いなあ」と思った。數日間取上げては下に置いて躊躇した。私は年少のころ「八犬傳」を読んでゐるうち、ページの残り少なくなつて行くのが惜しかつたことを思出した。それで、いく度か躊躇したあとで讀みだし

たのだが、筆の運びは遅い私も、読むことなら、澤井轉の不及流の歩術に劣らぬほどに速い。

この大長篇は、「南國太平記」その他、今まで私の讀んだ大衆小説よりも、もつと大衆向きであるやうに思はれた。「清川八郎」同様、幕末の勤王佐幕兩派の騒ぎを寫してゐるが、この方が小説味に富んでゐる。筋立も人物の取合せも上手だ。澤井轉と貝殻一平との中心人物を雙生兒として、その一人を世をすねた浪人とし、一人を旅藝人の仲間に墮した道化師にして、戦亂鬪争の間に離合出沒させ、數奇な人生をほめかしたところ、舊主を捜しあぐんでつひに發狂する頑固な老武士に、彼れの意識せざる時世の影が映つてゐて憐れ深く思はせるところなどに、私は心を惹かれた。藝術の味ひを感じた。しかし、大衆小説的に、事件がいかに目まぐるしい。最初、勤王派の女性と、それを庇護する澤井轉とを、幕府の捕吏二人が追跡するのは、「清川八郎」の趣向と同様で、讀者の興味を惹くためなのだが、この小説ではそれが長つたらしい。京都へ追つめるまででも、隨分暇がかゝつた。人間の智慧は大抵似寄つたものなのか、「清川八郎」の追跡者には、木橋といふ與力の外に宇兵衛とその子分の繁公といふのがあつて、この繁公が市井の江戸ツ子氣象をもつて愛嬌のある活動をするのだが、「貝殻一平」にも、同心格の青木の相棒にすつぽんの定といふ手先が安手の追跡者たる行動を取つてゐる。(罪人追捕には、一人の捕吏で效を奏する譯はな

く、相棒も手下も用ひるのは當然だと云ふ勿れ。私が指摘するのは、作者の取扱ひ振りの型が極つてゐることなのだ。)「馬頭の錢」にも、善惡兩方の主人公引立役に笛勝といふ安手の男が現はれてゐる。繁公、笛勝、すつぽんの定は同型の人物なのだ。「赤穂浪士」のやうな新意匠の歴史小説にも、同型の人物が出てゐたと、私は記憶してゐる。

山間の平和の世界に避難してゐる澤井轉が、再び危険な世間へ出て行かうとすると決心すると、その保護者は、「今みたいな世間へ出て行つてどうしますか。それや山の村も退屈しますが、のべつ火に追はれたり血を見たりして、自分の生涯もなく、カサ／＼になつて生きてゐるよりはましではありませんか」と引留めた。それに對して、澤井は、「考へて見ると、自分のやうな青年が、一日でも閑をぬすんでゐるのは、何となくすまない氣がする。ろくなことは出来なくとも、とにかく、亂世なら亂世、苦難なら苦難の世間に立つて、實世間の衆人と苦樂を同じにしなければ、うしろめたい氣もするし、時代に生きたといふ甲斐がありません」と答へた。かういふ青年の意氣を彼れは有つてゐる。そして、公家の女性に對する戀慕の情にも刺戟されてゐるし、幕臣であつた父が冤罪で死んだことによつて、彼れは幕府に對して憤怒の思ひに燃えてゐる。かういふ心理状態の青年が鬪争時代に活躍してゐるのは、私の興味を捉へたのだが、大衆小説であるためか、かういふ心理が事に觸れ、行動となつて現はれると、絶えず英雄化され、作者のために、筋立の變化を表現

する傀儡に用立てられてゐる。時々人間的面目を現はして我々に親しみを覚えさせるところがあるかと思ふと、早魃時の一朵の雨雲のやうに、待設けた甲斐もなく、消えてしまつて、馬鹿々々しい超人的行爲や、目まぐるしい飛んだり跳ねたりが、果てしなくつゞくのだ。

しかし、傍系の主人公貝殻一平は、人物に面白味があるばかりでなく、可成りよく書けてゐる。境遇に翻弄されながら、その境地に安んじてゐるところに、棄てがたい味ひがある。自分は闘争に關係なく、敵と味方の差別はないのに、偶然捲込まれた一團のために愁得なしに働いたりしてゐる。自分の方から戀した女でもなく、偶然親しくなつただけの女と、一しよに、まごころから傷病者の世話をしたり食物を求めて來たりして、一同の慘心を慰めた。轉マユと一平との雙生兒が、母親の迷信から、異つた境遇に生立ち、下層に沈淪した方が却つて明るい氣持で生活し、戀をも得たのに反し、上層の地位を得た筈の男が却つて、淋しい氣持を抱いて流轉し、戀愛の満足をも得なかつたといふ着想は、西洋の大衆小説から取つて來たものではあるまいかと、私は疑つたが、さうでなかつたら、作者の創意の妙を私は認めるのである。

新撰組でも討幕派でも、この長篇の舞臺で活躍してゐるさまざまの闘士は、私には何の興味もなく、讀みながら目障りになるやうな感じがするだけである。無論これ等の雜然たる闘士の闘争が時代の空氣をつくつてゐて、その背景の前に、一平や轉の姿を鮮明に浮ばせるのが作者の意圖の存するところなのだが、その背景がこれではあまりにくど過ぎる。雜駁である。

「三つのW」、すなはち、War, Woman, Wine は、日本で所謂、「飲む、打つ、買う」と同様、最も強く男子を魅惑する力を有つてゐるので、大衆小説には、概してこれ等の三つを取入れてゐるやうである。「水滸傳」の豪傑でも、赤穂の豪傑でも、講談の豪傑でも、概して酒に強く闘争に強いのだが、女には潔白であるやうに理想化され、女道樂も敵の目をくらすためであつたり、「時雨の炬燵」によるも、治兵衛の悪所通ひでも男の悪名を豫防するための策略であつたりして、そこに東洋文學の特色が見られ、今日の大衆文學にも、多少その東洋文學の傳統が守られてゐる。作中の義士型志士型の豪傑は、女に對して醜態を現はしてゐない。毅然としてゐる。しかし、色戀ぬきの大衆小説は甚だ殺風景であるため、揃ひも揃つて、女をからませてゐるが、私の見た限り、どれも出來榮えがよろしくない。幕末戯作者好みの毒婦型貞婦型のやうなものもある。「水滸傳」の武松の條下に出てゐる潘金蓮や王婆ほどの印象を與へられる女性描寫さへ見當らない。「貝殻一平」中の水藝人お千代などは比較的いゝ方である。用心棒兼情人であつた某から離れて、弱々しい一平の方へ心を移して行く経路は、ちよつと面白い。屬子といふ主要の女性は甚だ描き足りない。

「清川八郎」のお蓮については、拷問の苦悶に耐へる鐵石心を強調して書いてゐるが、舊劇の責め場なんか連想され、私としては、かういふところに重きを置いてしちくどく書く作者の態度に同感し得られないのだ。

歴史上の人物や事件を見ても、そこに自己や自己の周囲の影を見れば見るほど、我々に興味があるので、大衆小説だつて、作家に誠意があつたら、究極はそこへ進んで行くのであらう。讀者たる大衆だつて、小説に訓練されたら、次第に、ちやらつぽこの作意に飽足りなくなるのではないかと思はれるが、しかし、私自身の氣持から他を忖度するので、大衆はいつの世になつても、さういふものではないのかも知れない。暇潰しに読む小説に面倒くさい意味を持たみたくないのが本當のところかも知れない。

五

大衆小説作家の代表作として、大佛次郎氏の「赤穂浪士」と林不忘氏の「大岡政談」が、私の座側に置かれてゐるが、この二つはかつて通讀して所感を述べたことがあつた。印象は薄らいでゐるが、かういふ小説を、も一度讀直す氣にはなれない。「大岡政談」所感は、私の評論集に收められてゐるので、それを見取して見ると、「超人的人物の出現すること、のべつに危機一髪の場面の描かれてゐることなどは、在來の大衆文藝の特色であるが、この

新作は、映畫のやうに進行が早い。ある事件やある人情を讀者の心に印象させようとする用意はなくて、たゞ讀者を追立てて行く。……古いも新しいも、思想なんていふもの全くないのが珍らしい。……一篇のうちでは、房州中村からの三十人ばかりの應援武士が東京の途中、泰軒といふ出沒自在の超人に、日一日と滅ぼされて、江戸に着くまでには、幾人も餘さなくなるあたりに、最も作家の才華の現はれが見られる。作者自身面白づくでふざけながら書いてゐるやうだ」と云つてゐる。この作者はその後、超人的多作をして、現代物にも手腕を見せてゐるが、少しばかり私が讀んだところによると、この作者の現代物は、時代は現代でも、現實味が乏しいやうである。やはり、世界を過去に取つて空想を恣まゝにしたものの方に作者の本領があるのではあるまいか。

大佛次郎氏の物は、今度「かげろふ噺」といふのを讀んだ。春陽堂出版の「明治大正(昭和)文學全集」に收められてゐるので、多分作者自信の作品であらうと思つたからである。この小説は、はじめの方は泉鏡花氏の藝術を連想させ、「赤穂浪士」の筆致とは異り、大衆小説離れしてゐるやうに思はれたが、讀んで行くと、型の如き大衆小説になつて、しかも舊臭いにほひがしだした。中心人物は鼠小僧のやうな男である。この男の父親も講談や默阿彌の世話物に有振ありふれた型の人間である。大衆小説家中、最も新味に富んでゐる筈の大佛氏の創作とは思はれなかつた。大佛氏にしろ、その他の作家にしろ、大衆小説家は、需

要の多いため、夥しい作品を産出してゐるやうだから、出来不出来のあるのも當然であらう。しかし、需要があるからと云つて、頻りに書きなぐるのは、文學者として賢明な態度であるとは思はれない。

私は、ロンドンで、ハロッドといふ三越のやうな大百貨店へたび／＼行つて見た。そこには書籍部もあつて、殊に新刊小説が夥しく陳列されてゐた。大抵は日本には知られてゐない作家の物で、中には、作家は同じで、題目は異つてゐる幾十冊の小説の竝んでゐるのも、私の目に留つた。これ等が英國の大衆小説であり通俗小説であるのだ。かういふ小説は、いかに数が多くつても、賣行が多くつても、文學の領域に入つてゐるものではないらしい。文學の流れは別に流れてゐる。しかし、日本では、さうではない。……その譯は、日本の文學には、傑れた小説があまりないからである。ことに近年のやうに純文學に志してゐる作家の意氣がしなびては、大衆作家などがのさばり返るのも自然の勢ひである。

晩年の田山花袋氏は、通俗小説の跋扈を歎いて、「おれ達が努力して折角開拓したものが崩れてしまつた」といふ意味の感想を洩らしてゐたが、真正直な花袋氏の所感に私は敬意を寄せるとともに、氏の考へてゐたやうな文學は、日本の國民性には適しないのではないかと、私は疑つてゐる。ここで花袋氏に言及したのは、大衆作家の歴史小説を讀んでゐるうち、ふと、花袋氏が、晩年いくつかの歴史小説を書いたことを思出したためである。

文壇の風潮が推移したため、さして問題にされなかつたが、氏の歴史小説は、鷗外氏の歴史小説と對照して、棄てがたい味ひがあるのだ。鷗外氏は冷靜に史實を整理して描寫し、有るがまゝの世相人間相を我々に示した。花袋氏は「源義朝」その他に於て、人間の心理を討究し、作者自身の影をそこに見ようとしてゐる。今度新たに「源義朝」を讀んで見ると、具象的表現はさして巧みではないが、あの時代と人とが何のケレンもなく、義朝が我々の知人であるが如く書かれてゐる。鷗外の態度、花袋の態度が歴史文學作法としても正しいやうに、私には思はれる。その態度でもつて進んで行つたらと思はれるが、それは日本人の趣味に適しないらしい。「南國太平記」や「清川八郎」が持囃される所以である。

(昭和七年一月中央公論)

西洋の文豪と女性

私は、出鱈目に巴里の街を歩き廻つてゐた時、古めかしい町の古めかしい五六階建ての家の壁に、「ユウゴの住んでゐた家」といふやうな文字の記されてゐるのを見た。セーヌ河の左岸の龍神町三十番地で、あとで、傳記を調べて見ると、彼れが十九歳で、母には死なれ、一生のうち最も窮迫を極めた時に、その建物の一室を借りてゐたのであつた。「ミゼラブル」中の貧しきマリユスの描寫には、この時代の作者自身の體驗が現はれてゐるのださうだ。しかし、心は萎けてゐなかつたにちがひない。前途の希望に燃えてゐたにちがひない。一塊のパンと一片のチーズを買つて、人目を恥づるやうにこつそり暗い階段を上つて、汚い屋根裏へ歸るのを例としてゐた彼れは、金ボタンのついたしやれた上着を買つて、知人に招かれた時なんかに着用してゐた。お定まりの戀と名譽が屋根裏の塵埃を、天國から差して來る光のやうにかゞやかしてゐたのである。

“I can not live without you.”といふ文字は、舶來映畫の字幕によつて、日本の若き男女に親しまれてゐて、従つて、日本でも、その頃はかういふ言葉が頻りに戀人同士の對話に用ひられ、手紙にも書かれてゐるのだらうと想像されるが、西洋の小説は云ふまでもなく、西洋文學者の書翰集を讀むと、この「僕はあなたが無くつて生きてゐられません」といふ甘

つたれた言葉が溢出されてゐるのに、私は驚くのである。

どうせ浮世は色と慾とで動いてゐることは、早くから知つてゐたが、私は、この頃數卷の佛蘭西文豪傳を連讀して、彼等文豪のどれもが、戀のために憂身をやつし、金慾しさに心を勞してゐたことを察して、人間はすべて然りと云つた感じを深くした。日本の文學者は古來、物慾に淡泊であつたらしく、今日の文學者でも、上べだけでも慾のなさうな顔をしてゐるやうであるが、實際は昔どうであつたか、今どうであるか。

西洋でも、佛蘭西の文學者は、殊に物慾が強いのかも知れない。バルザックの「ウー・ジニイ・グランデ」の英譯者は、その譯書の序文に於て、「佛蘭西人中の佛蘭西人であつたバルザックは、金錢慾の猛烈なグランデ老人のやうな素質を有つてゐた」と評し、佛蘭西人の慾つ張りは、その淫蕩性よりも始末が悪いといふ意味のことを云つてゐる。バルザック、その他佛蘭西作家の小説には、屢々英國人を偽善者とし、陰劍な人間として取扱つてゐる。兩方の批評が兩方とも當つてゐるかも知れない。兎に角、日本の歌人俳人、あるひは戯作者のやうな、物慾に超然としたらしいところが無いが、私はその老いてなほ人間臭の粉々たる西洋文豪の傳記に、芭蕉良寛、あるひは明治文學者の影の薄いやうな生涯よりも興味を寄せてゐるのである。西洋の文人傳は、俗物の傳記である。「天才は獨りであることを望む」と云ひ、情慾によつて自我の亂されることを恐れてゐたボードレエルでも、

女色の泥の中に引摺り込まれ、厭世のモウパッサンでも、精神錯亂後なほ銀行の手形(?)の事を口走つてゐた。ユウゴーも蓄財慾が盛んであつたし、バルザックは、浪費する金を獲得せんために、夜もろくく眠らないで、七頭八倒の苦しみで筆を採りつゞけた。あの時期には、彼れは、早く富を得んために芝居を書かうとした。劇作家としての自信はなかつたが、大當りを取る芝居を作つて、どつさり利益をせしめて、それで借金拂ひをして、暇をつくつて、好きな戀愛と小説著作をゆつくり樂しまうと心掛けた。それで、奇才を有つてゐさうな無名の文學青年を一人連れて来て、自分の家に同居させて、共同制作をはじめようと企てた。ところが、この青年は暫くして居たゞまらないで逃出した。街上で行會つた或知人が、その青年の浮かぬ顔を見て、

「バルザック先生の家で居心地はどうだつた？」と訊くと、

「非常に結構だ。家の中も非常にいゝ。食物もいゝ。毎日肉が食へる。日に二度も野菜が食へる。果物も鱈腹食へるし、それに、あしこの珈琲はすばらしいものだ。」

「ぢや、何故そこに落着いてゐないのだ？」

「何故ゐないかつて。居られるものぢやない。僕は、夜中に六度も、寢床から引ずり出されるのだ。一晩のうちに八度も起されたこともあつたよ。それで、さあどういふ趣向を思ひついたか、云つて見ろと訊かれるのだ。それだけならまだいゝんだが、先生は、ビスト

ルをおれの喉へ向けて、巴里中の人間を吃驚させるやうな、面白い芝居の趣向を云つて見ると、眞剣に僕をせめるんだよ。誰れだつて辛抱出来やしないね。僕はへとくになつちやつた。二度とあの家の園をまたぐことぢやない。」

青年はかう答へたが、彼れはその後、バルザックに近寄らなかつたばかりでなく、その名を聞いてさへ、身震ひしたさうである。

この逸話によつても、バルザックの烈しい性格が想像されて面白い。彼れの作中に善惡ともに烈しい人物の續出してゐるのも偶然ではない。このバルザックが死病に取りつかれた時、彼れに取つては、ピラミッドの壯嚴にも勝る不朽の事業たる「人間喜劇」を生前に完成したい慾望から、醫師に向つて病症に關する直言を求めた。

「その仕事の完成にはどのぐらゐの時日がいるのです？」と醫師は訊返した。

「六ヶ月」と彼れが答へると、醫師は首を振つた。

「六ヶ月の時日を私にくだらないのですか。ぢや、六週間の生命なら私にくだらないでせう。」

しかし、醫師は再び首を振つた。

「ぢや、私は何を望んだらいいのだらう。少くも六日間は生きてゐられるでせう。さうしたら、自分はや點だけ書殘して置いて、友人に纏めて貰ふ。五十巻の自作に目を通して訂正する。自分の作つた世界に不朽の生命を與へて、それで七日目に目をつぶることにした

醫師は、それにも同意しないで、即刻遺言状を書くやうに勧めた。

「何だ。たゞの六時間か。」

彼れはにがい眞實を心に留めて、それから昏睡状態に落ちた。

かういふ烈しいバルザックも、女には甘かつた。女性愛讀者からの頻繁な手紙にホタホクして勝手な夢を描いてゐたが、「蝙蝠傘事件」のやうな滑稽味のある失敗談をもいくつも残してゐる。その時分には、今ほど一般的に雨傘は用ひられてゐなかつたので、男子は、空模様が悪くつても、手ぶらで外出して、若し烈しい雨でも降つて來たら、軒下にそれを避けるのを例としてゐた。バルザックも、ある日、外出中雷雨に會つた時、雨傘は持つてゐなかつたので、ある拱廊の下に立つて雨を避けてゐた。向ひに立派な住宅があつたが、その窓から、目の醒めるやうな美人が、顔を出して街上を見てゐた。バルザックは、自分が美人の注意を惹いてゐると思つて喜んでゐたが、そこへ意外にも、華麗な仕着せを着けた従僕が来て、女主人の差圖だと云つて、蝙蝠傘をバルザックに貸した。彼れは有頂天になつたのだ。厚く禮を云つて歸宅したが、空想力をつよい彼れは、これをローマンズの發端のやうに感じて、その續きを仕組んだ。執筆多忙のため、不斷は髭も剃らない彼れも、直ちに床屋へ行つて美顔術をやつて貰ひ、手袋も純白のを新たに買ひ、衣服も最も

綺麗なのを選んで着た。そして、蝙蝠傘も、借りたのよりも遙か品のいい美しいのを新たに買つて持参した。従僕の案内で直接に女主人に會つて、好意を感謝すると、「それは、蝙蝠傘立に立ててお置き」と、女主人は事もなげに従僕に命じた。だが、バルザックの有難がつてゐる様子が煩はしかつたので、

「私、腹藏なく申上げますわ。あなたが向ひの家の前で雨をおよけになつて、私を見ていらしつた時には、私、ある方の御訪問をお待ちしてゐましたのです。あなたがあまり熱心に此方を見詰めていらつしやるのが氣になつたものですから、あなたに退いて頂くために、傘をお貸ししたのです」と、露骨に云つてしまつた。

ロダンの彫刻によつて推察されるやうな剛健巨大なバルザックも、女に對しては、かういふ風に甘かつた。そして年少の頃から熱望してゐた戀愛については、あまり恵まれなかつた。彼れと對立してゐたユウゴはこの點甚だ幸福であつた。この二大作家の佛蘭西文學史上に於ける位置は、英國のヂッケンスとサッカレー、露國のトルストイとドストエフスキーのやうなものであつたが、二人とも、佛蘭西流に見榮坊で嫉妬深くつて、ユウゴの方では、バルザックの天才を嫉み、バルザックの方ではユウゴの世間的成功を嫉んでゐたらしい。だがユウゴは通俗性に富んでゐたために、バルザックのやうなへまな眞似はしないで、名譽も戀も金もうまく擱んだのである。

龍神町の窮迫時代に、ヴィクトル・ユウゴは、早くも戀を夢み、それを確實に挿んでゐた。相手の女性は一ツシエ家のアデルといふ一つちがひの少女であつた。「純潔の肉體と處女の心」を有つた女に憧憬することは、青年の通有性で、ヴィクトルもマリユスも心は同じだつた。リュクザンプルの公園は木蔭の多い、そゞろ歩きにふさはしい所で、戀仲の男女のよく足を向ける所であるが、ヴィクトルも、「レ・ミゼラブル」の中でマリユスに假託して描いてゐるやうに、戀の影を見るために、龍神町の寓居から、程近いその公園に屢々出掛けてゐた。「穩かな或日、リュクザンプルは、靜かな蔭を宿し、冴えた光を浴びてゐた。空は、朝早くから、天の使に拭はれたやうに、一塵も留めず澄渡つて、雀は、椽の深い葉蔭からのぞいてゐた。マリユスは、この美しい自然に向つて、のび／＼と自分の胸を開いた。」

互ひに思ひ思はれた二人は、兎に角順調に事が運んで、結婚式は擧げられたが、意外な變事が突發した。式場は、一年前ヴィクトルの母の葬式の行はれたサンサルピスの教會堂であつて、そこには、ヴィクトルの兄のアベルとユウゼーヌ、數人の友人、花嫁の家族など、少數の人々が列席して、式後に、ある所で披露の小宴が催されたが、やがて、この初

心の花婿が可憐な花嫁を連れて、新家庭へ急いだあとで、怪た／＼ましい叫び聲が會場の隣室から聞えた。居合せた人々が驅寄つて見ると、一人の男が身を藻掻きながら、譯の分らぬ言葉を亂發してゐた。アベルなどが手を取り足を取つて、その男をやうやくその男の居室へ運んで押籠めたのだが、數時間後に覗いて見ると、その男は斧を揮つて、家具といふ家具を滅多切りにしてゐた。彼れは宴會の酒に酔つたのではない。氣が狂つてゐるのだ。氣の狂つたその男は、外でもない、ヴィクトルの兄のユウゼーヌなのだ。ヴィクトルが、花嫁の父親から結婚の承諾を得たその日に、ユウゼーヌは、巴里の外へ飛出さうとした。何處でもいゝ、世界の外へでも行つてしまひたい氣がしてゐた。さういふ思ひに惱まされてゐた彼れが、この一日、市役所から會堂、宴會場と、のろ／＼と新郎新婦のあとに隨いて、他の幸福を見させられてゐるのは、堪へられないことだつたのだ。ユウゼーヌは、早くから弟に譲らぬほどに、アデルは戀焦れてゐたのだ。わが戀敵は兄弟だといふことだけでも、健全な精神を破滅させる力を有つてゐる。失戀のために狂つたユウゼーヌはつひに正氣にかへらないで、弟に劣らないほどの天興の詩才を發展させることもなくある山上の瘋癲病院で、見窄らしくこの世を終つた。

最初の楽しい一日を過したヴィクトルは、夜が開けてから、この恐ろしい話を聞かされた。人道主義の本尊のやうなこの作家だから、餘程心に強く感銘されたであらうが、後年

の彼れの作品のどれかに、この事件の持つてゐるやうな深刻な人生を描いてゐるであらうか。私には分らない。そしてかういふものこそバルザックの取扱ふべき好題目であると、私は思つてゐる。

ヴィクトル・ユウゴーは、文學史上稀なる幸福兒であつた。何ぞ名を成すことの早くて華々しくて、芝居がかりであるかと思はれる。私が西洋のロマンチズムの小説に接した最初のものは、ユウゴーの作品であつた。森田思軒が獨得の漢文調で譯した「同舊」で原名は「バクジャルガル」である。民友社の出版で、表紙の繪は、棕櫚の樹に、ヴァイオリンのやうな樂器が立掛けられてあつて、異國の風物を、年少の私に空想させた。この小説の舞臺であるシントドミンゴといふ島の名が、今なほ私の心にロマンチックな響きを傳へてゐる。「予はバクジャルガルなり」と云つて、天から降つたか、地から湧いたかと思はれるやうに突如として現はれるのが、ロマンチックであつた。「予はジャンバルジャンなり」と芝居がかりで出現するあの呼吸を、ユウゴーは初期の作品から心得てゐた。時代の機運に乗じて、ロマンチック運動の首唱者として名聲を得て、新氣運に共鳴する若い藝術家が周圍に集まるやうになつたが、そのうちで、サントブーヴとユウゴーの家庭との關係が最も私の心に觸れるのである。ロマンチズムの大家、人道主義の本尊であつて、大仕掛けな壯麗な小説を著はしてゐた彼れも、その私生活は自然主義の小説のやうなのが私には甚だ面

白いのだ。明治以來の日本の小説家なら、「レ・ミゼラブル」なんか書くかはりに、作家夫婦と、友人サントブーヴとの關係を直寫して、文壇の注意を惹くにちがひない。

ユウゴーの「歌曲集」について、最初に理解ある好意の批評を下したのは、サントブーヴであつた。ユウゴーは、この傑れた批評家が二十二歳の青年で、母とともに、近所に住んでゐることを知ると、直ぐに訪問した。不在であつたので、名刺を置いて歸つたが、その翌日、午餐時に、批評家の方から訪ねて來た。鼻の長い、目のきよとくした落着きのない、頬のこけた、人と打解けがたいやうな態度の青年であつた。剛毅な美しい面貌を有つたユウゴーとはちがつてゐた。心やす立てで家族も來客の座に加はつてゐたが、嬰兒を抱いてゐるアデルは、柔しい丸顔で、天鵝絨色の目をした、鼻筋が通つた、天女のやうな髪を頂いた、女性美の成熟した女であつた。主客は主婦の持てなしの珈琲を飲み、菓子を食べながら、青年らしい感興をもつて、互ひに詩について語つた。主人は、批評家の好評に感謝して、自分の詩作の苦心を語り、言葉の調子や色彩に關する獨得の感想を述べた。サントブーヴの方が却つて啓發されるどころが多かつた。彼れは、新たに益友を得たことを喜んで暇を告げたが、その折、彼れの目は、嘗て見たことのないやうな美しい物をぬすみ見してゐた。先方では此方を氣に留めてはゐなかつた。

「あの女からインスピレーションを受けて、あんないゝ詩が作れるのだ」と、ブーヴは、

とぼく／＼と自分の家へ向ひながら溜息を吐いた。

やがて、ユウゴは世間が廣くなり、生活もいくらか楽になつたので、今までゐたヴォーシラール町から、ノートルダムデシャンブ町へ轉居した。通りを背にした小さな家だが、側には庭園があつて、黒檀風の樹木が窓際に枝をのばしてゐた。ところが、サントブーヴも、同時にこの町に部屋借りして移つて來た。ユウゴ夫妻は十一番地に住み、ブーヴは十九番地に住んだ。そして、新宅の前で行會つた時に、ブーヴは青白い微笑を洩して、「今度もお隣同士だね」と云つた。彼れには友人がなかつたので、ユウゴは自分の友人を紹介してやつたし、自分の家庭の暖爐の側に彼れの座を設けて、貧しい獨身者たる彼れの身心を温めてやつた。この時、戯曲「エルナニ」が完成され、上演の運びがついて、ノートルダムデシャンブの新住居は、忙しい仕事部屋で、ブーヴは屢々祕書役を勤めた。詩文を語合つた對等の友人の位置から、一介の書生に成下つたやうなものだが、一方が羽振りがよくつて、一方がいゝ運に恵まれないと、友人關係がいつの間にかこんな風になるのは、何處の國でも何時の時代でも有勝ちのことなのだ。

「ユウゴ氏は、身邊御多忙を極め居られ候につき、氏に代つて、小生より御答禮申上げ候。貴下の御厚情には、ユウゴ氏も非常に感激いたし居られ候。ついては、エルナニ初演の入場券封入、御座側に奉呈仕候につき、何卒御來觀下されたく……」と云つたやうな、

手紙を、何百枚も書いたりした。

新代の批評家であり詩人であるといふ抱負を有つてゐるサントブーヴも、一度の食事にでも有りつきたいさもしい心と、この家庭を離れ難くない思ひとで、こんな詰らない事務も、吩咐けられるまゝに勤めてゐた。が、彼れは、をり／＼ペンを擱いて机上に垂れてゐた頭を持ち上げ、黄ろい長い鼻を仰向けて、客間の聲に耳を傾けた。ロマンチック派の主人らしい好みから、「黄金百合の部屋」といふ氣取つた大袈裟な名をつけてゐるその客間からは、エルナニの自稱後援者どもの元氣のいゝ話聲や笑聲が聞えて來た。若夫人アデルの可愛らしい聲も洩れて來た。大革命の夜に、美人達が甲斐々々しく火薬や彈丸を配布して、運動を助けたさうだが、アデルはその意氣で、芝居の座席の割振りに熱中してゐた。

「エルナニは屹度攻撃されますわ。でも、こちらで準備してかゝれば、どんな攻撃でも揉消されないことはありませんよ」と、心得顔で云つてゐた。演劇の新運動を面白がつて煽動する野次馬的後援者を、女必の淺墓さから過信して、初日の劇場内の掛引をいろ／＼に相談したりしてゐた。

「今に、奴等にロハ切符をせびられるのだな。入場券はおれの手には一枚も残つてゐないのに」と、ブーヴは、脚のやうな顔を、皺だらけに擧めながら立上つた。氣の弱い彼れは、しつこい自稱後援者の要求を斥けて怨まれるのを恐れてゐた。そして、泥棒のやうにこそ

こそと戸口を忍び出て、爪立足して階子段を下りて、霜に濡れた庭を横切つて、葛のからんだ古壁の側まで歸つた。壁の一隅の低い秘密の潜戸を開けて、袋小路へ入る前に、彼れは、振返つて、「黄金百合の部屋」を見上げたが、すると、羨望、愛慕、讚美、及び憎悪の感じが、胸中に燃上つた。

あれはこの前の夏であつた。ユウゴは、晴れた日の午餐後の慣例として、この潜戸を開けて、リュクザンブル公園の樹間へ出掛けて、冥想に耽つてゐたのだが、その慣例をよく知つてゐたブーヴは、一刻も時を間違へないで、留守を狙つて出掛けた。五月の黄金色の日光に浴したアデルの獨居を見ると、彼れは胸をときめかした。花をつけたアカシアの下で子供を遊ばせてゐるアデルの美しさに恍惚とした。彼れはよく、その庭園の池に掛けられた田舎風の橋の側で、彼女と浮世話をした。

「三時が打つと、私はあなたに會ひに行くのを楽しみにしてゐた。たゞ獨りでゐるあなたを見たかつた(母であるあなたを、貞淑な愛妻であるあなたを)。あなたのつれあひは、考へ事をしに他所へ行つてゐる。それでも私は訪ねて行く……そして私の心をあなたに打明ける」と、彼れはある詩のうちに歌つてゐる。

不謹慎なアデルは、池畔の饒舌にうつゝを抜かした。ブーヴの方では、彼女の心を惱ますために、多感多情を装ひ、憂鬱の色を見せ、彼女の神信心を知ると、自分は懷疑者で

ありながら、わざと心霊的な口吻を弄した。

「奥さん、あなたは、大事にされて、愛されて、いつも柔しい言葉を御主人から聞かされていつしやる。だけど、それで、本當に幸福だと信じていらつしやるんですか。」

沈んだ聲でこんなことを云はれるのが、妙にユウゴ夫人の心に染み込んだ。圓滿な家庭にゐて、目前、これといふ不幸の影の見つからない女でも、傍からうまく突つかれると、心に動搖を來すのであつた。

「この世の成功ははかないものですよ。我々が安穩な生活と思つてゐるものでも、砂の上に建てられた城みたいなもので、強い嵐が來たら一揺れで崩れてしまふんですからね。」

「ですから、私、神様のお恵みをいつも祈つて居りますわ。」

彼女は、相手のしみじみとした話に感じて涙ぐむこともあつた。が、さうした交はりを續けてゐるうちに、敬虔な友誼の假面が取れて、穩かならぬ横戀慕の影がちらつくのに、彼女は氣づいて胸騒ぎをさせた。もうこの人には會ふまいと、いく度も決心した。しかし、ブーヴはいろ／＼に機嫌を取つて離れなかつた。

夏のうちは、さういふ風にして、秘密の享樂に耽つてゐたが、「エルナニ」の上演騒ぎがはじまつてからは、その幸福も影をかくした。野次馬連がブーヴの樂園を荒しだした。彼れが慣例の時刻に出掛けると、アデルは屹度數人の粗暴な若い共和主義者どもに取かこま

れて、芝居の打合せをしてゐた。「あなただつたの？ サントブーヴさん。さあお掛けなさい。あたしは大變なのよ、御覽の通り」と、アデルの言葉は他所々々々しかつた。

それで、妬ましさ羨ましさ、蛇のやうな彼れの胸の中のたうち廻つた。「ユウゴはおれとはちがつて、何事に會つても心の顛倒しない強い奴だ。彼奴は、傑れた才能を有つてゐるお蔭で、絶えず幸福に漬つてゐられる。彼奴のすることはいつも立派だ。彼奴ほど仕合せな奴はない。妻子と満足して暮してゐる。……それに比べて、おれはどうだ？ 何といふみじめなことだ？」

さう思つて思ひあまつた結果、一通の手紙を彼れは「幸福人」の許に送つたが、それが、
■マンチズムの大將軍を吃驚仰天させた。

「我が親しき友よ。君は今朝ヴェロンの手紙を讀むであらう。僕は、エルナニに關する記事は『レヴュー』誌上に書かないことにした。今後何處にも書かないことにすると、今ヴェロンへ宛てて書いたところだ。君は君の目を信じないかも知れないが、手紙に書いてあることは本當なのだ。僕は今、エルナニに拘泥することは不可能である。この戯曲は、形式も内容も唾棄すべきものでないことは分つてゐるよ。僕はエルナニ騒ぎに食傷してゐる。……こんなことはすべて破壊せよ、忘れてしまひ玉へ。君も心配事が多いであらうが、この手紙をあまり氣に掛けな

いやうにして下さい。僕は君一人に向つて直接に話す機會がないから手紙を出す氣になつたのだが、君の家庭もこの頃は荒廢した町のやうだよ。」

これを讀んだユウゴは、アデルに向つて、「これをお讀み。二伸としてお前に宛てて書いてあるよ。」

アデルは首垂れて讀んだ。

「奥様。あなたはつしましやかにしていらつしやるのがあなたにふさはしいのです。跪いてあなたの讚美歌を聞くものにこそ、あなたのお名前も音楽の響きを傳へるのです。終日、卑しい目付を向ける人々の前に曝しものになり、今まで縁のなかつた若い者を毎日々々百人も近づけ、純潔な家庭や神聖な友誼を、モツプのために汚され、下等な言葉に親しみ、物質的利益や榮華を第一とするやうになるのは、あなたにふさはしくない、歎かましいことではありませんか。」

手紙の端に震へた文字で書かれたものを、繰返して熟讀したアデルは、ふと青くなつた。サントブーヴの心の祕密が今こそハッキリ分つたのである。

對古典劇挑戰の最初の夜である。「エルナニ」開演當日の光景は、演劇史上空前の活氣を

呈したものであつた。應援者は開場数時間前から劇場へ押寄せて、唄つたり囃したり、刃向ふものは腕づくでも取挫く意気を見せた。詩人畫家彫刻家音楽家、それに粗暴な共和主義者など、新代フランスの青年が一團を作つて集つてゐた。彼等は美人の入つて來るのを見ると拍手して迎へた。來場を豫期されなかつたサントブーヴもおそくなつて顔を見せた。

それを見つけたメリメは、側のスタンダルに向つて、「懺悔僧が彼奴に罪亡しをさせて芝居見物の許可を與へたのだね」とさゝやいたが、ブーヴは、この熱狂した「エルナニ」應援團中の唯一人の異分子であつた。仲間からいやな目で見られてゐた。いけ好かない奴とされてゐた。

ユウゴ一夫人も、衆人の注意を集めて棧敷に坐つた。

「あの顔の縋帯はどうしたのです？ あれは大變よく似合ひます。だが、何處かお悪いんぢやないでせうか」と、ブーヴは、夫人の弟に訊ねた。

「なに、姉は齒が痛いのだうです。御存じでせうが、齒痛心痛と世間でよく云ふぢやありませんか。」

ブーヴはチクリと刺されたやうに感じて首垂れた。そして、「あの人は、今夜ほど美しく見えたことはない」とつぶやいた。

で、彼一人は、賑やかな劇場にゐながら、心は舞臺の演技を他所よそにしてゐた。ふと見ると、場内は反對派の妨害で騒いでゐた。大向うの三階席から、白紙の雨が土間や棧敷が濺がれてゐた。紙片は見物の衣服を打ち、仰向いた顔に落ち、婦人の髪にからみ、身體にまっひついた。皆んなそれを拂ひのけるに忙しかつた。この時、幕の後に立つて、混亂した場内を覗いてゐたのは、作者ユウゴ一であつたが、彼れの心からみついてゐたのは、新作についての人々の褒貶よりも、前夜のサントブーヴの手紙であつた。今新戯曲「エルナニ」を通して世間に向つて、戀愛の威嚴を力説してゐる場合に、彼自身愛妻に對して、一抹の暗影を見なければならぬのは、運命の皮肉であつた。人生の事多くはさうである。

幕毎に、よかれ悪かれ觀客の劇的興味を刺戟して、最後の幕が閉じた。「プラボー」名譽の翼は場内に強く羽ばたきした。半時間もユウゴ一の名が連呼されたが、彼れは見物の面前に姿を出すことを頑強に拒んだ。見物はあきらめて、新たに夫人アデルを目がけて、狂熱的讚辭を發し、帽子を振りハンカチーフを振つて、ロマンチズム軍の女王に敬意を表した。アデルは興奮して血の色を失つた。

「勝利」「大勝利」と叫びながら應援團は、ノートルダムデシャンブの寓居まで押寄せた。庭園を踏荒し、階段を駆上つて、凱旋將軍に會はなければ承知しない意氣込みを見せた。ユウゴ一は、震へながら現はれて、彼れの友人であり、兵士である來訪者に厚く謝意を述

べたが、疲勞を口實として、直ぐに自分の居室に閉籠つて鍵を掛けた。やうやく其處で獨りになつて、古い手箱から一束の手紙を取出したが、それは婚約時代のラヴレターであつた。エルナニはユウゴ自身であつた。ドナソルはアデルであつた。エルナニがドナソルに云つた言葉は、すべて若いユウゴがアデル嬢に宛てて書いた言葉であつた。長い間尊いものとして自分達の胸に藏してゐた純眞清淨の言葉を、千五百人の見物の前にさらして玩具のやうにされるのは、戀愛冒瀆のやうに思はれて、彼れは勝利の悲哀を感じた。そして、サントブーヴが、前夜の手紙に二伸としてアデルに宛てて書いた冷酔な言葉は正しいやうにさへ思はれた。……ユウゴ氏は見掛けによらない感傷家なので、まだブーヴの心理を的確に洞破し得ないのだ。「レ・ミゼラブル」が、感傷主義の作物であり、彼れの政治行動も感傷主義のあらはれである所以である。私は彼れの書翰を讀んでも、その博愛心に感ずるよりも、むしろ齒痒さを感じる。

その後も引つゞいて、ユウゴ禮讚の青年どもが夜を日についで來訪して、あたり構はずの喧囂を極めるので、家主から苦情を持たまれるやうになつたが、ユウゴ自身も、靜かな生活を望んで、つひに、淋しい土地へ轉居した。當時ルーアンへ旅行してゐたブーヴに宛てた移轉の通知に、「新宅が僕等の氣に入つてゐる。僕等は甚だ満足してゐる。樹木もあるし、空氣も新鮮で、窓の下には芝生もある。完全に靜寂だ。エルナニ連は一人もや

つて來なくなつた」と書かれてゐる。このジーンダージュオン町の靜かな新宅で、三人の子供に圍まれて、夫婦の愛情は濃かだつた。ブーヴもユウゴの助力によつて詩集を出して、文學の道に進まうと努めた。そして、人妻を慕ふ惡念を滅却しようとして、「予は、古代僧院の廢墟に逃れて、寂寞孤獨の生を過さんと、つねに夢みたり」と詩によつて感想を述べてゐたが、しかし、彼れは遠くへ逃出すことも出來なかつた。晝となく夜となく、巴里の街を彷徨した。心は焦立つばかりであつた。「予は幼かりし日に、人生の幸福の姿を憧憬したりしたが、それは戀愛以外の何物にてもあらざりき。しかるに、予にはその人生唯一の幸福たる戀愛は興へられざるなり」と、知人に書を送つて訴へてゐる。巴里には美女が多い筈だ。人妻——しかも畏敬せる友人の妻に附纏はなくてもよささうに思はれるが、思案の外の戀は、西洋ではことに甚しいやうである。

ユウゴは、家庭の平和な空氣に浸り、新たな創作慾に驅られ、「巴里のノートルダム」を執筆してゐたが、そこへ、ある日、サントブーヴが久振りに訪ねて來た。彼れは、もはや沈黙を守つてはゐられなかつたのだ。胸裏の祕密のために、窒息しさうになつてゐた。

「ヤア、よくやつて來たね。僕はエスメラルドやキャシモドを暫くそつちのけにして、君を持成もてなさなければなるまい」と主人が懐かしさうに云ふと、

「ヴィクトル君。僕は君に打明けなきやならないことがあるんだ。絶対に必要なんだ」と、

客は生真面目な顔を崩さないで云つた。

二人は、書齋に入つて對坐した。

「ヴィクトル君。君はいつも快く僕の訪問を受けてくれるが、僕の訪問が此方の御迷惑になるのぢやないかな。」

「どうしてだ？」

ブーヴは、もぢ／＼とその説明をした。自分の胸中の苦悶を、曲りくねつた落着きのない言葉で漠然と話した後、「だから、僕は今後断然、君のお宅へ足を向けないことにしようと思ふ」と、力なく云つた。

聽いてゐたユウゴーは、首を振つて微笑した。おれほどの男子が、妻を疑ひ友を疑ふつてことがあるものか。

「君は僕を信じてよく云つてくれた。それは僕も、今君の云つたやうなことで迷惑を感じないでもなかつたがね。しかし、さういふことを、真面目に考へるのは馬鹿げてゐると思つたよ。お互ひに友人として純潔な感じを有つてゐるんだから、君もあまり考へ過ぎて、神經を痛めないやうにしたまへ。僕は、昨日まで君と交際したと同様の態度で、今日からも君と交際しようと思つてゐるよ。」

男子らしい寛大さでかう云はれると、ブーヴは感激して、兩眼に涙をためて、しばらく

面を上げ得なかつた。やうやく立上つて、別れの握手をしたが、ユウゴーは、相手の手を握り締めて、「安心したまへ、僕は君を信じてゐる」とさゝやいた。それで快く別れたものの、ブーヴは、すでに、自分で自分を支配し得ない人間になりきつてゐたのだ。其處を出て、木葉凋落したリニクザンブル公園の小徑をあらちらと歩いてゐるうちにも、羨望嫉妬憎惡の感じが胸に込上げるのを禁じ得なかつた。見上げると、紫雲の天には、夢の國の美しい女の影がちらついて、彼れを魅惑してゐるではないか。それ等の尊い寶玉を獨占してゐる立派な男がゐるのだと思ふと、ブーヴの苦痛は倍加するのであつた。で彼れは、友情も義務も宗教も糞食へといふやうな滅茶苦茶な氣持になつた。

彼れは勇氣を出して、つゞけてジーングージョン街のユウゴー邸を訪れた。が、はじめとちがつて、ユウゴーの態度にも、次第に不安狼狽の影が差した。夫の面前でなければ細君に會へなくなつた。も一度、ユウゴーとブーヴとの間に意見の交換が行はれたが、今度の對談は悲劇の色を帯びた。「今は僕の一生のうちで最も苦しい場合なんだ」と、主人は切出した。「僕にもアデルにも、友情か愛情か、何方を選ぶかといふ時機が來たのだ。僕は友情を棄てても、愛情を選ぶのだ。若しも、君が同意するなら君が愛してゐる女をこの席へ呼んで、我々二人のうちの何方を選ぶかハッキリさせようと思ふ。」

ロマンチッククラブの子供臭い威厳を見せた譯だが、ブーヴは、主人の申出に同意するこ

とを躊躇して、その場を誤魔化した。敗北者の汚辱を感じながら、すこ／＼暇を告げたが、ユウゴは、「また来たまへ」と云はないでは気が済まなかつた。

たとひ絶交の宣告を受けなくつても、圖々しく訪問する譯には行かなかつたので、プーヴは、心臓の血をもつて書いた手紙を送つた。「僕は今後、君の家庭に對してどういふ態度を取つたらいいだらうか。今の僕は君の疑惑に價した人間だ。我々は相互の信用がなくなつた。君は不安らしく僕を監視してゐる。奥さんは、君の許可を得ない限りは僕の方へ目を向けようもしない。」

プーヴから來る手紙を一々、アデールに讀聞よみかせたユウゴは、不安焦躁を感じて、最初プーヴから打明けられた時のやうに微笑を洩らす餘裕などはなくなつた。疑惑は、刻々に彼れを壓迫した。が、彼れは大氣力を揮つて、その疑惑煩悶から脱出しようとした。この年——千八百三十年——の九月四日に、ユウゴは、インキの大塚と灰色した立派な羊毛の大外套を買つて來たが、外出の誘惑を避けるために、外套は戸棚の奥に仕舞つて鏡をおろして、専心創作に努めた。悲壯な決心であつた。秋の光にも觸れずに過した。冬の寒さも感じないほどに執筆に没頭して、十二月にも窓を開けつ放してゐた。翌年一月十五日に長篇の小説が完結するとともに、大塚のインキも全く盡きた。

「アデール。おれはこの小説の題を變へたくなつたよ。(インキ壺の中には何があるか)と

いふ題にしたらどうだらうと云ふと、アデールは首を振つて、「いけません。世間はノートルダム・ド・パリといふ小説を待受けてゐるんぢやありませんか」と答へた。

この間に、プーヴは、すべてを剝取はぎとられた人間のやうに見窄せまらしくなり、貧乏になり、下宿の屋根裏に住んでゐたが、それでも、大晦日には、ユウゴの子供達に玩具を贈つた。ユウゴはお禮手紙を出して、久振りの會食に招いた。

少しの間ブラッセルに旅したプーヴは、其處から、ユウゴに宛てて、悔悟の情をあらはした謙遜した手紙を送つて置いたが、巴里に歸ると、直ぐにジーンダージョン街へ急いだ。丁度その時アデールがたゞ一人で家にゐた。彼れは、千載一遇の思ひをして、戀人の前に、多年の苦惱と失望と屈辱を綿々と訴へないではゐられなかつた。アデールは、身を入れて聽いて、相手を憐んだが、それとても、心の底で夫の峻厳さを非難したいやうな氣がした。「可愛想に。サントプーヴは私一人を思つて生きてゐるのだわ」と思つて涙を浮べた。この女も、憐憫の思ひで心を動かされ、氣が弱くもなる種類の女であつて、煩悶の慰安者たる役を勤めなくなつた。だが、夫が嫉妬の目をもつて監視してゐるのだから、どうしたらいいだらう？ 二人は互ひに内所の手紙を交換する約束をかはした。……彼女の生涯にも一轉化の時が來たので、今までは身も心もすべて捧げてゐた男に秘し隠しにすると、敵意をさへ含むやうな或物を持つやうになつた。これからは心だけで夫を愛しようと

決心して、夫の力強い抱擁は避けることを努めた。それにつれて、夫たるユウゴは、オセロのやうになつた。空想力が過敏になつて、何でも無い舉動にでも無邪氣極まる言葉にでも、變な疑ひを寄せだした。信念に富んだ堂々たる彼れもつひに狐疑險惡な態度を示しだした。寛大な人道的感傷家をしてかういふ風に墮落させることによつても、執拗な戀愛の魔力を私は感じるのである。彼れは妻を探偵し、糾問し詰責した。「彼女の愛は稀薄になつた。殆んど夫を愛しなくなつた」と云つていゝ。何のためだ？ 誰れがさせたのだ？ 彼れの感覺は燃え立つて、面前で鎖された彼女の部屋の扉を爆發し、自分を押退けんとする彼女の寢床に轉輾した。アデールは柔しくつて辛抱強かつたが、言葉に劍を含んでゐないでもなかつた。

「わたし前ほどあなたを愛しなくなつたとしても、それは仕方ありませんわ。あたしはなぜこんなに虐められなきやならないんでせう？」

すると、感情の狂亂が起つて、涙は雨の如く、失望の苦悶、愛慕の熱狂の活劇が、ロマンチック劇の作者によつて實演されたのである。ユウゴは妻の前に身を投じて、許してくれよと泣叫んだ。(その實、この哀れなる大文豪は、毫末も妻に許しを乞ふべき理由はないのに。) ここに至つて、私は人間の愛慾のいかに恐るべきかを痛感した。あのナボレオンがジョセフィーヌの前では不甲斐なくも泣いた。後年國外に亡命しても、小奈翁から追

放されても、毅然としてゐた英雄ユウゴも、女ゆゑには市井の匹夫と同様の醜態を見せた。「自然主義の小説は眞なり。」モウパッサンが、ある短篇のなかで「おれはコキユーになるのがいやだから結婚しない」と云つたのは面白い。バルザックが熱愛して、やつとの思ひで結婚した女は、不貞の女であつた。傳記學者の云はく、「バルザックの愛した婦人は、實際には存在しなかつたのだ。たゞ彼れの空想の斷片的産物に過ぎなかつたのだ。彼れが結婚した女は、淺薄な利己的の女で、夫が生きてゐた間は夫を打ちやらかして氣儘をして、夫が死ぬると早速夫を忘れたのであつた。」

ユウゴの妻アデールは、夫の煩悶にかゝはらず、冷靜で柔和であつたが、でも、持前の「神祕的な無關心」を失つて、何か氣が咎めるやうになつた。そして、心の休息を欲したので、プーヴに向つて、「私から離れて、旅行でもして下さい。私は疲れた」と頼んだが、プーヴは承知しなかつた。アデールは自分の脆い心を恐れ、精根も疲れたので、夫に向つて、「あなたの心が落着くためにもいゝですから、あの人が出来た時には、あなたは必ずわたしの側にゐて下さい」と願つた。ユウゴは、妻の髪をキッスしてやさしさを示したが、ふと恐怖に襲はれた。「アデールはそんなにあの男の訪問を怖がる理由があるのか。アデールはあの男に對して、しつかりした心を持つてゐないのか。」

それで、プーヴとアデールとが顔を合せる時には、必ずユウゴが側に附添つてゐるや

うになつたので、ブーヴは、アデルのかねての頼みを容れて、いつそ遠くへ離れようと決心した。ある手箋で、リージの大學の佛蘭西文學講師の椅子が得られさうだつたので、そのためには、白耳義に歸化してもいゝと決心した。いよく赴任の運びをつけ、アデルに向つては、「二人の愛を『宗教に轉ずる』ことを求め、魂と魂との結合を望んだ。彼女をヴィアトリスとして仰いで、この世の苦艱を凌がうとしたのだ。ブーヴの決心を聞いて、ユウゴの心もやうやく軽くなつた。氣候は薔薇の花咲く六月であるから、この機會に思出のある美しいビエールの谷間へでも家族連れで旅行しようと思立つた。旅から歸る時には、ブーヴは白耳義に行つてゐる筈なので、「ぢやこれでお別れだね。左様なら」と、ユウゴ一家の者とブーヴとは左様ならを交した。

だが、ブーヴは果して出立したであらうか。ユウゴはそれを疑はないで、心ゆくばかり田舎の風物を楽しみ、若い頃の戀を再び楽しみ、邪魔者を退治した誇りをも覺えた。故障があつたために妻の有難味が一層加はるのだから不思議である。彼は、お調子に乗つて敗北者サントブーヴに宛てて、勝利者らしく、「我輩はとても合せだ。巴里へ歸るとなんか忘れて面白く暮してゐる。妻は陽氣で、生々して、身體も非常に健康だ」と書送り、「君もリージから僕に音信を寄越すことを忘れてはいけないよ」と最後に書添へた。この手紙を読むと、ユウゴの心が見透くやうである。彼れのロマンチックの小説には見ら

れないやうな眞實の人間心理のひらめきが見える。

この手紙に接したブーヴがいゝ氣持のしよう筈がない。「おれの犠牲の結果がこれか。あの女はおれに向つて、泣いて自分の身體の弱り果てたことを歎息して、後生だから巴里を離れてくれと頼んだのだ。それに何だ。陽氣で健康で仕合せに暮してゐるんだつて。」ブーヴはリージなんかへ行く氣はなくなつてしまつた。それで、「リージから手紙を寄越せ」といふユウゴに宛てて巴里から手紙を出した。曰はく、「僕は二三の友人の忠告に従つて、リージ行を中止することにした。」

ユウゴに取つては、その手紙は、晴天の霹靂であつた。勝利の唄はめちや／＼に潰された。「サントブーヴが出て行かないのだ。」かうなると、天才が何だ、名譽が何だ。一つの凡庸な心が血を吐き嘔泣きをした。哀れなる男子が打倒れて面を蔽うた。アデルも手紙を読んで激動した。彼等は最早田舎に留つてはゐられなくつて、善後策を講ずるために巴里へ急いだ。ユウゴが今度ブーヴに送つた長い手紙は、最初の得意満面の短い手紙とは全くちがつて、自制心を失つた、愚癡と嫉妬を丸出しにした冗漫なものだつた。

「……君が巴里にいつまでもゐる氣なら、僕は同じ事件に果しなく苦まなければならぬので、とても我慢が出来ない。……遠く離れてゐると、僕も心の底でこれまで通りに君に友情を感じてゐられるが、君が我々の側にゐると、僕は苦しい。」

御存じの通り、二人の間には何者かが横はつてゐるので、君と同じ室で同じ長椅子に肩を接して腰掛けてゐると、ある恐ろしい感じに僕は壓へつけられるのだ。

……だから、今後お互ひに會はないことにしたいと僕は主張する。君の傷は癒えたかどうか知らないが、僕の傷はまだ回復してゐないのだ。君を見るたびに傷から出血するよ。僕といふ人間も變つたと君は思ふにちがひないが、それは君と一しよにゐる時に苦痛を感じるためなのだ。僕は自分のことを考へてもいら／＼するが、大抵は君のせゐでいら立つてゐるのだ。も一人の人間も僕をいら立たせてゐるが、その人間の君に對する希望も僕と同様たらうと思ふ。(その人間の名前はこの手紙の中でわざと明記しないことにする。) 他日交りを新たにすることがあるであらうが、今はお互ひの家庭的交通を絶つことにしよう。世間に怪まれなための言譯はいくらでもあるよ。……家庭の外の何處かで會つたら、手を執つて君と歡談しよう。……君の返事を待つてゐる。……この手紙は、人目に觸れさせぬために直ぐ燃してくれたまへ。」

ブーヴは折返して返事を出した。ユウゴの申出には同意した上で、自分を巴里に引留める原因は婦人關係であるにしても、その婦人はアデルではないと斷言して、ユウゴの目を欺かうとした。人にすぐれた君の心を僕の毒刃が傷けたりすると、僕は運命を恨む

外ないが、君の家庭から僕を突退けた君も、あまりはしたないことをすると、君自身で自分の名譽を汚すことになるだらう。氣をつけたまへと書いてやつた。それから、ブーヴは相手の心の融けるのを期待しながら、ユウゴの作品を雑誌の時評欄で稱讚するやうに氣を配つた。アデルは第三女出産後の苦勞に加ふるに、荒狂^{わがま}ふ夫の嫉妬に悩まされてゐたので、以前はかういふ時の慰め相手であつた友人ブーヴの慰めの言葉が今は聞かれなくなつたのを歎じた。身心共にくだけて、獨り家庭に蟄居して、戸外へ姿を現はすことはなくなつた。「オセロがデステモナを押籠めて置く」と云はれるのも仕方がなかつた。

ブーヴは、ユウゴの疑ひを解くやうにつとめながらも、憎惡の思ひも起つた。それで、或日、ある知人が、「ヴィクトルはどうしてゐる？」と話掛けたのに對して、

「あいつは悪黨だ。嫉妬が強いために細君は病氣になつてゐる。あいつの心の底には石か鐵で一杯になつてゐて血も涙もないのだ。僕はアデルを愛してゐる。今でも熱狂的に愛してゐるよ」と公言して、「アデルは、鍵と鏡前で閉籠められてゐる。あの女を連出すためには、拔劍して血まみれ騒ぎをやらなきやなるまい」と興奮した。

が、刃物騒ぎには及ばなかつたので、ロマンス好きのアデルは、宗教や慈善事業をだしに使つて、教會堂で密會する手筈を極めた。

「淋しい生活をよく辛抱してゐましたね」とブーヴが慰めると、厚いヴェールに包まれた

彼女は首を振つて、「わたしそんなに弱つてはりませんでした。わたしはいつも自分だけの世界に住んでゐましたから。」

「あなたはいつも私の若い婚約女ですよ。」

「白髪の生えた婚約女ね。」

「それはちつともかまはない。あなたは相變らず美しくつて十五の小娘のやうな腰を有つてゐるんだから。」

さうして、二人は何ヶ月も、古い教會堂の片隅や墓地の中を會合の場所としてゐた。そこでの會合を終ると、貧者病者を訪ねて慰藉するのを例としてゐたので、さういふ信仰と善行によつて、二人の清淨を保たうとしてゐた。

ところで、ユウゴの方では、不思議な運命から、ある婦人と熱烈な戀に落ちて、八十餘年の長壽を生盡すまで、否、死後の世界にまで渝らぬ戀を持つゝけることになつたのである。千八百三十三年一月二日、ユウゴは、ある美術家の主催した夜會でその婦人に會つた。

「彼女は、火の鳥のやうに飛んで来て飛んで去つた。彼女の出現によつて心を燃やしたものは一人ではなかつた。汝は彼女を見詰めたが、敢へて近づき得なかつた」と、その婦人の第一印象を書いてゐる。ユウゴはその婦人に近づくよりも、むしろ婦人から逃げてる

たのだ。彼れは、細君一人に全心の愛をそゝいで、細君が他の男に心を傾けて、彼れの愛撫を斥けることがあつても、彼れの方では心變りをしなかつた。それが、いつとなしに新しい女の方から熱烈に持掛ける戀に捉へられて、例の「おれはお前なしには生きてゐられない」を、一生に千べんもくり返す關係になつたのだから、男心も妙なものだ。この婦人はジュリエットと云ひ、元は棄兒であつて、素性はよくなかつた。ユウゴは、四十六年後にその女の死の床に愛の手紙を送つて、永遠の約を結んだ。

「たとひお前が死んでも、私はなほお前を愛する。また私が死んでも私はお前を愛する。お前が死ぬれば私も死ぬ。……墓に入つてから眞生命が得られるので、あの世に於て、お前と私の口と口とが光明のキッスを取かはすのだよ……」などと八十の老翁が云つてゐるには驚嘆される。この女の死後、彼れは、全く筆を抛つた。

大ユウゴの一生は、アデルとジュリエットとの二婦人を中として回轉されてゐたのである。アデルの美しかつたことは、ユウゴの兄を狂死させ、サントブーヴに横戀慕の苦惱を嘗めさせたことによつても察せられるが、ジュリエットが絶世の美人であつたことも、第三者たるゴーチエの描寫によつて推察される。

「ジュリエット嬢の頭は、整つてゐて、柔し味を有つてゐる。鼻は清淨で、よく切立てられて輪郭がいゝ。目はよく澄んで光を放つてゐる。唇はいきくして潤ひもあ

つて紅い。いくら陽氣になつて笑ひころげた時でも口が大きく見えることはない。そして、かういふ美しい顔の道具が、氣持のいゝ調和を保つた卵形の輪郭によつて圍まれてゐる。額は、希臘の殿堂の大理石の破風の如く鮮明沈靜で、柔しい顔の光輝ある冠となつてゐる。艶のある豊富な黒髪は彼女の顔に非常に光彩をまさせてゐる。喉も肩も腕も、古代美術の完全を保つてゐて、現代の彫刻家を興奮させるに足る。古代希臘の女性がヴィナス製作を企てる大彫刻家ブラキジトリーズの前でモデルを取つて、互ひにモデルとしての美の競争を試みる時に、ジュリエット嬢はその仲間に加はる資格を十分に持つてゐる。」

して見ると、ユウゴは、小説家として群を抜いてゐたのみならず、艶福家としても群を抜いてゐたのである。

(昭和六年十一月中央公論)

或文學論その他

或文學論

アンドレ・ジイドは、「一粒の麥もし死なずば」といふ、自己の生ひ立の記執筆について云つてゐる。「このやうな自分の缺點や惡癖を語ることによつて、自分がどんな損失を被るか、元より僕も承知してゐるし、僕に對して人々が投げかける非難の聲も、僕にはあらかじめ判つてゐる。しかし僕のこの物語の存在理由は、眞實以外にあり得ないのだ。云はば僕は贖罪の爲めにこれを書いてゐるやうなものだ。」

彼はまた云つてゐる。「誤り傳へられた自分の面目の故に愛されるよりは、むしろ自分の眞實の姿の故に憎み嫌はれる方が氣持がよいので、僕はこの書を書いた。」(以上、堀口大學氏譯本の序文に由る)

「一粒の麥もし死なずば」は、日本の文壇の常識から云ふと、小説欄に收められていゝものである。自分の缺點や惡癖を小説の形を取つて暴露することは、自然主義以來、日本の文壇では通有のことであるが、しかし、贖罪の爲めと考へてそれを敢てした者は、滅多になかつた。贖罪といふ宗教的敬虔の氣持を有つてゐないばかりでなく、むしろ得意になつ

て自己をさらけ出したところもあつた。岩野泡鳴の小説の大部分は、自己の經歷の記録であるが、彼は大威張りで自己の外面の行動、内面の思想を暴露した。私なども、時流に倣つて自傳風の小説を製作したが、無論贖罪と云つたやうな氣持で筆を執つたことは一度もなかつた。眞實を書かねばならぬといふ自然主義の鐵則を遵奉した結果であつた。だが、眞實を追窮して行つて、神に達したか、惡魔に達したか。神とか惡魔とかは、西洋臭い言葉であり、西洋臭い觀念であるが、兎に角、人生の眞實を追窮して、どういふ境地に達したかと考へると、甚だ空々漢々としてゐるのである。ジイドの「ドストイェフスキー研究」のなかに引用されてゐる「ニイチェの文學說に、「行商人の心理學をやらぬこと！ 觀察のために觀察をやらないこと！」といふ言葉がある。これは、ゴンクウルなどの近代小説家の淺薄な作風を非難した言葉であつて、「生れながらの心理家は、本能によつて、眺めるために眺めることを避ける。(すなはち、觀察のために觀察をやらない。)彼は、事柄を、自然を、經驗されたものを、濾過して表現するために、これを自己の本能に、自己の暗室に委ねる。」と、ニイチェは云つてゐる。この暗室が文學製作の伏魔殿であると、私には感ぜられる。ジイドの「ドストイェフスキー研究」は、私はかつて英譯で讀み、今度日本譯で讀直して、近代文學論の壓巻であり、賛否如何に關はらず、その所論について熟考すべき價があると思つてゐる。その所論を活用すれば、明治以來の文學が批判し得られるのであ

る。日本の文壇でも、かつてよく讀まれた、メレヂコフスキーの、「トルストイのドストイ
エフスキー」比較論も、これに比べると、學究的である。

「ドストイエフスキーは、決して觀察するために觀察しない。彼の作品は、現實の觀察か
ら生れるのではない。或は少なくともそれからのみ生れるのではない。それはまた豫想さ
れた觀念から生れるのではなく、それが少しも理論的でなく、却つて深く現實に根ざして
ゐるのは、この理由に基くのである。それは、觀念と事實との會合から、前者と後者の混
淆から生れ、しかも混淆の完全なことは、その包含する二つの要素の一つをどれと云ひ當
てられぬほどである」と、ジイドはニイチエの所説に同感してゐる。

何もこれは珍らしい考へではないかも知れない。「主觀と客觀の融和」は、明治以來の文
藝評論で屢々唱へられた。「二にして一、一にして二」と、田山花袋がよく云つてゐたのも、
多分そんなことを意味してゐたのであらう。花袋は、ニイチエやジイドによつて淺薄視さ
れてゐたゴンクールなどに私淑して、平面描寫を唱へ、「觀察のための觀察」の弊に墮して
ゐたとも云へるが、しかし、若い時分から、兎に角、人生と文學について思ひを凝らして
ゐた彼であつたから、ニイチエの思想に接した時には、感激して、自分の薄志弱行を反省
してゐた。彼の長篇三部作中の「妻」の終りの方には、主人公たる花袋がニイチエを讀んで
興奮して、新しい力強い生活に向つて進まんと思氣込んだ有様が書かれてゐる。自然主義

の前に、明治文壇で論争の題目になつてゐたのはニイチエ主義であつたが、その當時のニ
イチエ唱道者たる高山樗牛登張竹風なども、まだ十分にこの哲人を理解してゐなかつたら
しく、その紹介振りも甚だお手輕であつた。今月の文藝春秋所載の登張竹風君の「酒上の
文豪」と題した明治文人追憶記は面白く讀んだが、讀みながら、私も昔のいろ／＼なこと
を思出した。竹風君は島村抱月について語つたうちに、「僕は帝國文學誌上にニイチエ論
を連載した報いで、早稻田の先生方から包圍攻撃を喰つた。就中痛いのは、坪内逍遙先生
の馬骨人言であつた。」と云つてゐるが、當時は帝大派と早稻田派とが、何かにつけて黨同
伐異的論争をやつてゐた。樗牛が、或意見を發表すると、早稻田は寄つてたかつて反抗す
る傾きがあつたが、樗牛も、坪内博士の所論に對しては、つとめて食つてかゝるやうに心
掛けてゐたらしい。評論家として自分を大きくするために相手を選んだのであらう。樗牛
竹風のニイチエ論についても、早稻田派は反對の言辭を弄してゐたのであるが、當時の私
は、やうやく學校を出たばかりで、六ヶしい理窟は何が何やら解らなかつた。或日私が坪
内博士を訪問した時、洋行間際の抱月氏が博士と對坐してゐた。私は、恐る／＼兩先生の
對話に耳を傾けてゐたが、話のうちに、ニイチエの學説が出たことだけは、今も記憶して
ゐる。博士は、非難の語を挿みながら、ニイチエについて盛んに説かれて、抱月氏は謹ん
で聽いてゐた。當時の氏は、ニイチエに關する知識はまだ有つてゐなかつたらしい。博士

の説を聽終つた氏は、「しかしニイチエの考へは面白いですね」とか、「えらいところがあ
りさうですね」とか云つたやうな意味の感想を洩らした。歸朝後の抱月氏から私が借りた
書物は英譯の「ツアラツストラ」であつた。抱月や花袋にしても、何等かの刺戟をニイチエ
から與へられてゐたのである。舊道徳を打破するニイチエの骨法は、却つてこの二氏の方
が樗牛よりもまだしもつよく身に具へてゐたやうなものだ。

ニイチエの意氣込を持つてゴンクール張りの描寫を試みる花袋の創作態度は、申分のな
いものであつたと私は信じてゐるが、小説作法は堂々としてゐても、實際の作品の上にと
う實現したかは別問題である。ニイチエ主義の唱道もお手輕だつたが、それに感化され
たものは、どれほど心魂に徹したことか。花袋その他の諸氏は、現實の追窮はした譯だが、
その結果は、觀察のための觀察以上どこまで深く進んだことやら。ニイチエ、ゴンクール、
或はトルストイ、チェホフ、その他の哲人、文學者が、明治以後の創作と、どれほど深い關
係があつたかと、私は疑つてゐる。ドストイェフスキーは、牢獄のなかで聖書だけを熟讀
すべく餘儀なくされてゐたが、この聖書の感化は、彼の一生の創作に骨髓に浸込んでゐるの
ではあるまいか。ジイドは、その生ひ立の記のなかで、バルザックの「從兄ボンス」に夢中
になつて、たび／＼読みかへしたことを敘してゐるが、テーヌは、六年間一日も缺かさず
に、スタンダールの書を読み、「赤と黒」の如きは、六十回乃至八十回も反復熟讀したさう

である。これほどに、或本當の傑作に没頭したら、そこに湧いてゐる生命の泉を汲むこと
が出来らうであらう。粗末な翻譯や概括的評論によつて傑作の前を素通りしては、ニイチエ
もバルザックもないのである。西洋文學の感化も皮相から皮相へ轉々として行く。ドスト
イェフスキーの心の「深淵」は、私にはまだよく解らない。だが、ジイドの「研究」を読んで
ゐるうちに、私は、ふと、このロシアの文豪の作品と「春琴抄」とを連關して考へた。

「君は來世の永遠の生活を信じるのだね。」
「いや、現世の永遠の生活を信じてゐるのだよ。人生は或瞬間があつて、その瞬間に達す
ると、時間が突然停止してそれが永遠に取つて代るのだ。」

これは、ジイドが、「悪靈」のうちから引用した言葉で、ドストイェフスキーは、牢獄に
ゐた間でさへ、かういふ人間の永遠性を感得してゐたさうである。「春琴抄」の藝術の心境
が私の心に觸れたのも、現實の世界すなはち夢幻の世界永遠の世界である氣持である。現
世はさまざまである。所謂流轉の世である。文學はこの流轉の姿をさながらに寫せばいゝ、
譯だが、常識的の世間話になつただけでは、ニイチエの所謂「行商人の心理學」「觀察のた
めの觀察」になるのだ。他人のことよりも、私自身についてさう思ふ。寫實を何十年心掛
けても、それだけでは全心の満足が得られないのである。それだけではいくら上手になつ
ても、平板な人生描寫に過ぎない感じがして物足りなかつた。表面の寫實以上の神祕的境

地と云つたやうなものに心を注いでも、暗中摸索で、空疎な生氣のないものになるのを常例として、そんな附焼刃よりも、まだしも、コツ／＼寫實的な人生觀察をやつてゐた方が、自分でいや味がなくつていゝと思ふやうになつた。

二葉亭の「浮雲」はロシアの作家の目鏡を借りて來たのであつても、日本近代文學最初の心理描寫であり、漱石の「心」その他の小説には、「行商人の心理學」でない、もつと深いところへ入つた心理が討究されてゐるが、紅葉露伴以來、現代の作家にいたるまで、要するに、「人情はさうしたものですね」と、讀者の同感を惹く程度に、人間心理を描いたものばかりである。予に心理學上何物かを教へし唯一の人は、ドストイェフスキーであると、ニイチエは云つたさうである。「我々を心理學の最も奇異な領域に誘致して置いて、そこで我々に幻想とも架空とも見えるものを出來得る限り牢固して確實なものたらしめるために、最も微細な部分に至るまでこれを寫實的に明確にしよとすのが、ドストイェフスキーの欲求であつた」と、ジイドは解釋してゐる。そこらに有りさうなことを、有りさうに書くのも、才能を要する譯であるが、それだけでは物足りない。奇異な事件を面白く敘するの、一つの藝術であるが、それは暇潰しの讀物たるに過ぎない。ニイチエやジイドの純文學に對する要求は、もつと大きいのである。

「人間は何を爲し得るか。一個の人間は何を爲し得るか」といふニイチエの問題は、ドス

トイェフスキーの心の暗室に於て、極度まで實驗されたものらしい。「超人」哲學の主唱者は、「人間が他のものになり得るといふこと、なほそれ以上のものになり得るといふこと、なり得るにも拘はらず完成に達せんと努力することなく、卑劣にも最初の泊りで身を休めた」と、人類史を批判してゐるが、このニイチエは、昨年何處からか發刊された、彼の發狂後の日記によると、女に關したことはかりを頻りに書散してゐたさうである。女から超然としてゐた筈のニイチエにしても、その意識の底には、女性が巢を張つてゐたのであらう。眞の藝術品にして惡魔の協力のないものはない。「女子と小人は養ひ難し」と孔子の云つてゐたのは、孔子自身が女子と小人に苦しめられてゐたことの告白であらうが、この女子と小人もドストイェフスキーの創作的火爐に投ぜられると、純金の素質を現はすやうになつた。我々が有るがまゝに見てゐる人生は謠の世界で、天才の心に具つてゐる「暗室」で濾過されたものによつて、純眞の人生を感得することが出來るといふことになるのだ。

ジイドの文學論を讀むと、論旨はいつも根本の問題に觸れてゐるやうに思はれるが、私自身にはドストイェフスキーの創作的境地は手の届かない所にあるやうに感ぜられる。

戯曲數種

岡本綺堂氏の「浪人時代」と、阪中正夫氏の「矢部一家」(新潮所載)とを讀んだ。それから、

築地座所演の佐藤道子女史の「毀れた花瓶」を観た。岡本氏のは云ふまでもなく、他の二人の新作家のも、舞臺技巧は相當にうまいと云つていい。だが、芝居といふものは、どうしてかうわざとらしいのであるかと、今更の如く感ぜられた。いかにも芝居臭い。「觀察のための觀察」がいけないのなら、「芝居のための芝居」もよくないのではあるまいか。「毀れた花瓶」は、退屈しないで観てゐられた。「誰しもお葬式の日やうな心持を五年も十年も持續ける事は出来ないのだからね。皆死んだ人からは、日に／＼疎くなり行きながら、或人は子供に引かされ、或人は新しい相手も現はれないまゝに未亡人といふ名を引ずつて歩いてるだけのことですよ」といふ未亡人の氣持は納得出来ないことはないが、全體に、新劇と云ふよりは、新派劇と云つた感じがした。一つの思想を有つた問題劇として取扱はれてゐるらしくはあるが、未亡人の息子の臺詞なんか、私には眞實のあらはれと云ふよりは、お芝居と云つた感じがした。築地座のこの芝居を観た同じ日に、私は、「テアトルコメデー」一座の「ダッデイ」とかいふフランス劇の翻譯劇を観たが、この方は、原作が、名の聞えた作家のものではなく、戯曲的抱負もなさうなものであるに拘はらず、輕妙自在で氣が利いてゐた。この一座の演技は、新派臭なく、新劇臭なく、たゞの素人芝居のやうでありながら、概して氣持よく見てゐられる。

「矢部一家」は、一幕の中に或人物と事件とをキチンと纏めて表現してゐるところに、作

者の手腕が見られないことはない。築地座あたりで上演しても相當に舞臺効果を擧げられるであらうと想像される。しかし、私は讀みながら、皆んなの會話に眞實の聲を聞くよりも、芝居の臺詞に化した造り聲を聞かされるやうな氣がしてならなかつた。作者が舞臺のことばかり考へて筆を執つてゐるので、現實の人生が、ここでは萎縮してゐる。いつになつても、本當の現代劇は現はれて來さうでない。築地座で新作戯曲の上演に努力してゐるのはいいことだが、戯曲そのものにいゝものがなければ、努力も張合がない譯である。自由劇場の起つた時分から、イブセンなどの西洋近代劇に刺戟された新しい戯曲が頻りに創作されたが、今になつて回顧すると、大した作品は殆んどなかつたと云つていい。だから、明治大正に亘つての小説史と云ふものは、兎に角意義ある存在となつてゐるが、戯曲史と云ふものは如何にも見窄らしい。傑れた新戯曲が現はれないのに、新劇團がいくつ組織されたつて爲様がないではないか。小山内薫時代の小劇場が、主に翻譯劇をやつてゐたのも止むを得なかつたが、今回、改築された小劇場の記念興行に、「ハムレット」を選んだのも止むを得ない譯である。

築地座を観てさう思つたが、この座で、屢々久保田氏の戯曲を演じてゐるのは當を得てゐるのかも知れない。日本ではイブセン風のものはまだ借り物のやうな感じがする。日本人の文學趣味は花鳥風月であり、俳句などによく現はれてゐるので、小説でもどうかすると

さういふ趣味で収まりたがる傾きがある。戯曲も花鳥風月趣味、俳句趣味を發揮すると、そこに、借り物でない、模倣でない、日本獨得の舞臺藝術を創設し得られるかも知れない。今月觀た久保田氏の「月夜」は、あまりに飽氣ない感じがしたが、かういふ方面で進んで行つたら、純粹の藝術味のあるものが舞臺に現はれさうな望みが起らないでもなかつた。俳句的戯曲なんか、西洋の戯曲學では認められないものであらうが、日本ではこれが成立しないとは限らない。

「久保田」式戯曲と云ひ、俳句的戯曲と云ふと、新代の日本の演劇として、あまり規模が小さい憾みがあり、活氣に富んだ青年作家や青年俳優は、もつと大仕掛のものを、創作し演出したいであらうが、老いたる私は、過去の新劇史を顧みて、その困難なことばかりが目さきにちらつく。

新しい文學雜誌

「行動」と「文學界」といふ二つの純文學雜誌が創刊された。「文藝首都」も同じ種類の雜誌である。これ等のものを通讀すると、現今の青年文學者が文學についてどういふ風に考へてゐるかが、可成明かに分るやうである。商業雜誌では、編輯者の註文によつて書かされるので、やゝもすると、自由を束縛される傾きがあるが、これ等の雜誌では、論者も作家

も思ひ／＼のことを自由に書いてゐるらしい。別段新しいことが云はれてゐるものでもないし、新しい作風が見られるものでもないが、今の文壇風景は鑑賞されるのである。

武田麟太郎氏の「市井事」と、室生犀星氏の「庭のわかれ」とは、現代の小説の二つの異つた標本のやうで、どちらも面白かつた。後者には日本文學傳統の「物のあはれ」が風流な好みと相和して漂つてゐる。前者には、ごみ／＼した人間生活や人間心理がまことしやかに語られてゐる。議論の方から見ても、「私小説」の態度で進んで行くのがいゝか、バルザック風の創作態度を採るべきかといふことが、今なほ文壇人の疑問になつてゐるらしいことは、新文學雜誌を一瞥しても察せられる。どちらにしてもいゝものがないのだと云へばそれまでだが、文學を一生の職業として立たうと志しながら、私小説みたいなものばかり書いてゐる青年作家に對しては、私は、いつも不安を感じるのである。自分のことを書いても、それが嚴肅な贖罪觀念に基いてゐるものでもなく、自分の戀愛事件なんか書くのは、書易くつて、自分の興味にもなるから書いてゐるに過ぎないのが多い。また小説の形を取つて、自分が周囲の人間に對しての鬱憤晴らしをしてゐるやうなものも尠くない。讀者に取つて、下手な本格的小説よりも、下手な私小説の方がまだしも讀應へがある譯だが、大抵の私小説は要するに藝術の素材である。

大勢がいろ／＼な議論を吐いたり、創作品を出したりしてゐるのを見てゐると、少數の

傑れた作家を出すために、多數者が騒いでゐるといふ感じに打たれる。人世の事、どの方面でもさうであらうが、……

「文學追求の精神の強きこと今日の如きは珍らしい」と、「行動」の巻頭言に書かれてゐるのを読みながら、「文學追求」の意味を私は考へた。多くの作家志望者が、新作の發表機關の得られないための焦躁が、先づ言外に察せられる。低級な大衆文學が跋扈して、純文學は多く世間に顧みられなくなつてゐることについての不平も察せられる。世間的の利害關係は別として、お互ひにいゝ文學を創造しようぢやないかと、純真な考へを多少抱いてゐることも察せられないではない。私などもすべて同感である。困難を豫想しての同感である。

(昭和八年十一月中央公論)

諷刺小説について

諷刺小説の出づべき時世である。今の世に讀應へのある諷刺小説の見當らないのは、文壇に才能の士缺乏の一例證であらうと、私は痛切に感じてゐる。

諷刺文學は文學の極致でないかも知れない。一面子供の讀物である「ガリヴァ巡島記」は人生に對する深刻なる諷刺であり、夏目漱石などは筆を極めて賞讀してゐる。しかし、作者スキフトは、僧侶としての地位を得られなかったために煩悶し愚癡をこぼし、八つ當りの筆鋒を振廻したやうな、俗念に富んだ男で、芭蕉のやうな、或はドストエフスキーのやうな、文學によつて大悟の域に達したのではなかつた。鴨長明の厭世も神官の地位を得られなかつたためであつたと云はれてゐる。齋藤綠雨の諷刺の如きは、瑣末な趣味に拘泥したものに過ぎなかつた。江戸時代の「落首」川柳の形を採つた諷刺は、多く卑俗なものであつた。しかし、當時の民衆はその程度の諷刺によつても、胸の透く思ひがしてゐたのであつた。今日はその程度の諷刺さへ現はれてゐない。皆んなが心から現代を謳歌してゐる譯ではなく、不平や愚癡の聲が諸方で聞かれてゐるらしいのに、さういふものが、きび／＼した文學に化してはゐないのだ。東京音頭に陶然とし、五郎の教訓劇に心酔し、寶塚や松竹の少女のレビューに恍惚として、それで足れりとしてゐるのであらうか。月刊雜誌の論文欄は

云ふまでもなく、創作欄にも原文の辭句抹殺の痕の多いのを見ると、言論の自由の許されてゐないことが察せられるが、論文とはちがつて、文學に於ては、外部の束縛をくゞつて自分の言ひたいと思ふことを十分に現はし得られるのではあるまいか。自然主義の「有りのまま」の描寫法を固守する外に、何の技巧もなく、こた／＼した文章で、社會の現状や自己の心境を敘するに留まる作家のみ多いのは、あまりに單調に過ぎるのである。諷刺といふものは、多くの場合弱者の採る態度である。しかし、文學者は多くの場合、弱者なのだ。アレキサンダーやナポレオンのやうな英雄が、一方で俗界に大威力を示しながら、一方で好文學を産出することは出来なかつたにちがひない。「大風起つて雲飛揚し」云々といふ、漢の高祖が全盛の際に嘯いた得意の詩よりも、四面楚歌の聲に驚かされ、「虞や／＼汝をいかん」せんと歎じた項羽の詩の方が、末代までも人の心を動かすのである。

徳川家康が天下統一の大業を成就した後、或日、當時の文學者であつた五山の僧侶を招いて、論語に關する論評を試みた。「北辰その處にゐて、衆星これに向ふが如し」といふ章句の、北辰はすなはち徳川家であつて、衆人がその威徳を仰いでこれに従ふのであると、僧侶達は解釋して強權者の歡心を買つた。孔夫子は數千年の昔、徳川家の興隆を豫言したやうなものだ。表通りを歩いてゐる學者は大抵さういふ者である。徳富蘇峰先生は、徳川時代の多くの歴史は、徳川家に對する諛史であると云つてゐられるが、これは止むを得な

いので、何處の國の歴史でも大抵はさういふものなのであらう。しかし、その徳川時代に於てすら、さまざまな文學のうちに、専制王徳川家の政策は暗々裡に批判されてゐる。豊臣家に對する家康の態度の是非なんかは、逃げ隠れしながら文學の中に散見してゐる。強者も文學を完全に自己の奴隸として支配し得ないのだ。だが、日本の文學者は、不平不満のあとは、鴨長明の態度を追ふやうな潔癖を有つてゐる。いつか下村千秋氏が、何かの新聞に、「方丈記」に書いてある世相が、ピッタリ今日の世相に當てはまると長明に共鳴したらしい感慨を洩らしてゐるのを速讀したことがあつたが、私など二十代にして早くも、「方丈記」に心酔してゐたものだ。あのスキートな厭世觀に惹入れられたものだ。冷徹な眼光により「ガリヴァー巡島記」を書く氣力がなければかりでなく、「桶物語」のやうな惡どい嘲罵の筆を揮ふことを潔しとしないのが、日本傳統の文人氣質であつた。

今日の時世に於て、幾多の文人によつて新しい「方丈記」の書かれるのもいゝ。われ等をして空想の世界に遊ばしめるやうな奔放自在な夢物語の現はれるのも結構である。文壇の産物も多種多様であるのが望ましいのだが、それにつけても、今の時世に諷刺的作品が全く現はれないのは不思議である。尤も、空想小説、抒情小説、身邊の寫實小説などと異なり、諷刺小説の創作は、世路の經驗に乏しい年少作家の敢てし得るところではないし、出來損ねた時には、他の種類の作品の出來損ねよりも、もつと激しく侮蔑される恐れがある

が、しかし、諷刺といふものは、今日の文壇には利用するに價してゐるいゝ武器でありさうに私には思はれる。

一般の世相が諷刺の材料に富んでゐるばかりでなく、自分自身の行動を後になつて靜かに觀察しても、それ等を材料として、いろ／＼な諷刺劇が案出されさうに思はれることが多い。當人、大眞面目でやつてゐることが、本當は猿芝居劇中の一人物であるやうに氣づくこともある。世を憂ひ時を憤つて流す涙には、自己陶醉の快感が伴ひさうである。人生の悠久を歎じ或は世路の不如意を歎する時に落す一滴の涙には、些少の甘味が添つてゐるかも知れない。しかし、自分のやつてゐることは、一種の猿芝居の一斷片であると觀じる時は、自分はみじめな人間として映るのである。

徳川時代には、低俗な趣味から浮世を洒落のめすことが流行して、黄表紙の或作者は、孔子や釋迦や老子が遊廓へ行つて巫山戯てゐる光景を、不愉快な駄じやれで書飛ばしたりしてゐたが、かういふ淺薄な態度は別として、古聖人に對する偶像崇拜の見解を離れて見てゐると、彼等の存在が人生に幸福を齎したか、災厄を起す原因を爲したか分らないやうにも思はれる。基督教のために起された殘虐な鬭争の痕が、西洋の歴史には數多殘されてゐる。人間は宗旨の争ひに於て最も憎惡の念を燃やし、殘忍性を發揮するものらしい。自分の播いた種子が後世に及んでさういふ惡果を生ずるとは、彼等聖人と雖も豫想はしな

つた。知らぬが佛である。世界は次第によくなくなるといふ確信の下に人類は動いてゐるのであらうが、人類相互の行動は矛盾撞着だらけである。世をよくせんと志しながら、却つて悪くするための努力を重ねてゐることも少くないだらう。諷刺小説の形を取つて描くに相應しい題材に富んでゐるのは、現代の世相ではあるまいか。

日本を題材とした外國作家の小説は續々現はれるやうである。現代フランスの大通俗作家として知られてゐるデュボラ氏は、目下日本に來遊してゐるが、氏もその見聞を新しい小説の材料としようとして企ててゐるらしい。日本の政治經濟軍備などについての外人の感想は、日本の雑誌や新聞に於て頻りと問題にされてゐるが、外人の筆に成る「日本小説」は、日本人には多く讀まれてゐないらしい。「歌舞伎」は世界に類のない美しい藝術であるとか、キモノ、フジヤマとか云つたやうな常例の讚辭を聞かされて、相變らず氣をよくするだけに留つてゐるらしい。しかし、たゞの漫遊客の見聞録以外、文學的素質を持つた外國作家の「日本小説」は、我々には参考になるところが少くないと思はれる。我々の日常生活や風俗が彼等異國人の目に如何に映つてゐるかを知るのは興味あることである。それよりも彼等は日本人をどう解釋してゐるかを知るのは、興味以上に、我々の人類研究の資料となるのだ。

なるのだ。

私はさういふ小説を時々讀んだ。大抵は觀察が皮相であり、作意が淺薄であり、文學としての味ひも稀薄である。そして、多くを通じて私の心に最もよく印象されたことは、彼等のすべてが、日本の女子を「低能兒」であるかの如く取扱つてゐることである。可憐であり、柔和であり、美しくもあり、或意味で讚美に價してゐるらしく描寫し、敘述してゐるに關はらず、全體を通じて、そこに浮上つてゐる日本女子の面影は低能兒らしく見られるのである。これは、ロチの「お菊さん」以來の常套で、彼等がジブシーの女、黒人の女、土耳其の女などを觀察し描寫する時とは見方が異つてゐる。彼等作中の日本女子は、蠻力なく、熱情なく、才氣なく、たゞ可憐な人形たるに過ぎないやうに、私の心に痕を留めてゐる。

今度、私は、「The honourable Picnic」といふ「日本小説」を英譯で讀んだ。佛人トマロカ氏の著はしだものであるが、これは、日本語「泊らうか」をしやれて、一時のペンネームにしたものらしい。これは英米人の筆に成つた「日本小説」とは異なり、奇抜な着想もあり筆に詩趣もあり、首尾整然として、文學的作品としても評價し得られるものである。私は諷刺小説としての面白さを覺えた。それとともに、西洋人はいつになつても日本人をかういふ風に見てゐるので、東西互ひに他の心を理解することの困難さが、今更のやうに感

ぜられた。此處に現されてゐる幾人かの女性は、可憐であるとともに、相變らず低能らしい影を印してゐる。「私は日本婦人を二つに分類する。その一つは自分が興味を寄せる種類の婦人で、十六歳乃至十八歳の娘のうちの略一割を選んでゐる。他は自分が全く興味を有しない種類の婦人で、前述の娘以外の全婦人を包括してゐる。従つて興味ある女の存在率は極めて低いのであるが、幸ひ日本は人口稠密の國であるため、見るに足る女の數も自然多い譯である」と、作中の主人公たる外人は云つてゐるが、さういふ女性は、町家の子女であれ、宿屋の女中であれ、藝者であれ、大抵みな、その外人に對して敬意を寄せ、親しみの言葉を掛けられることを名譽としてゐる。屢々感激の涙を落してゐる。これは、ただに小娘ばかりのことではない。或遊覽地の驛長が、國際聯盟の官職を帯びてゐるこの外人の満足を買ふために苦心焦慮する有様は、甚だコミカルであるが、諷刺的筆鋒がなかなか鋭いと云つていゝ。それが驛長自身の覺書になつてゐるのだから、無自覺のうちに自分で自分を諷刺してゐることになつてゐて、含蓄が多い。「この異人さんは、多少の深切をしてくれた田舎娘に、森永のキャラメルと男子用の扇子を與へた。驛員がそれを羨み、自分はどうもない、物が貰へるかと思つてゐると、異人さんは、敷島の一袋とマッチ一個と、それから仁丹の一包をくれた。この丸薬はとても有難いものだ。毒消の妙薬ではないか。……驛長たる私は、深い冥想に耽つた。自分の地位を考慮に置いて、さて、どんな

堂々たる贈物をされることであらうか。外人もそれを考へてゐるやうだつた。やがて、彼はポケットから、嵩張つた英字新聞を取つて、鄭重に私に向つて差出した。私は悦びくたまらなかつた。感謝と尊敬の思ひに心が一杯になつた。地べたに額のとどくほどにお辭儀をした。私は英語なんかは少しも讀めないのだ。しかし、この外人は私を英語を讀み得る人物として取扱つてくれたことは名譽の至りである。望外の名譽である。それで、私はこの貴人に對し、その新聞の第一面の上段の餘白に、記念のために署名されんことを恐る恐る願出た。」なんて、ちよつとかういふ調子なのだ。「ガリヴァ巡島記」中の小人島の記述振りが髣髴として浮んで來る。

この外人は、例の十八歳級の貧しき少女を江ノ島見物に誘つたのであつたが、彼女等を喜ばさんために、安ものキモノや化粧品やセルロイドの櫛や髪飾りの類、携帯用の蓄音機に數十のレコード、數百燭の電球などを數箇の布袋に荷造りして携へてゐた。田舎の停車場の人々は、それ等の荷物の内容について好奇の目を注いだ。そして、それは、日本の料理を食し得ない外人が自分の口に適したさまざまの食物を蒐集して携へて來たのであらうと、衆議が決した。しかし、これ等の携帯品は不幸にも、江ノ島の木橋破壊し自動車顛覆したため海水に沈んだ。折角の御馳走も魚の餌食となり、珍客も江ノ島に於て饑乏を感じるのであらうと、氣遣はれてゐたが、暫くして、「我等の不注意にて尊き御用品を破壊いた

し申譯これ無く、その代りとして田舎の小驛に於て集め得られる限りの品々を差送り候、御受納下さらば幸甚」といふ文言を名刺の裏面に記して、種々の外人向きの食用品が届けられ、宿屋の女中をして、感激の涙にむせさせた。それ等の品物が餘程の珍物で、東京製のポルドーの葡萄酒などであつた。……この祕密な携帯品を玉手箱として、人心の動きを繰り出すところは、小説作法として妙を得てゐると云つていい。そして、私をしてまたガリヴァを思出させるのである。だが、スフィトが、人間全體を諷刺して冷然としてゐるとは、甚だ異り、この作者トマローカは、自己を優勝者の地位に置き、他國と他國人の眞相を洞察し得ないで、淺薄な解釋の下に諷刺を試みてゐる。だから小説としてはその技巧を認めていいこの作品も、多く我々の心を動かすに足りないものであるが、しかし、西洋人の日本觀は、つまりはかういふ風であると記憶してゐていいのである。東は東、西は西である。たとひ政治經濟軍事などに於て、互ひの利害關係から結びついたにしても、西人の心と東人の心が互ひに正解し合つて、隔てなく結びつくのは容易でなさうに思はれる。東西文明の融和なんか、とても識者の理窟通りに實現されさうには思はれない。

スフィトに比して、トマローカの諷刺小説の淺薄さを考へたが、曲亭馬琴の「夢想兵衛」夢語りは、一層底の淺いものである。馬琴のやうに徳川末期のち／＼の封建道徳から一歩も踏出し得ない作家が、鋭い諷刺小説を書き得られる筈はないが、今日の作家だつて、

世間流行の思想に捉へられてゐては、含蓄のある諷刺の筆は揮へないのである。

トマローカ氏なども、日本の作家の小説をよく讀んでゐたなら、日本の現實の女性の心をもつとよく知ることが出來て、あゝ簡単に、單純に片づけるに躊躇したであらう。東西融和の手段として、日本の文學藝術を海外に紹介しようとする計畫は、最も當を得てゐる。日本文學の外國語譯は盛んに行はるべきである。しかし誰れが翻譯するであらうか。

また頻繁に翻譯され出版されると假定して、それ等が多數に讀まれるであらうか。日本でシエークスピア全集の翻譯が流布した十分の一も、近松全集の英譯、或は佛譯がかの地で賣れるであらうか。繪畫や彫刻とは異つて、十冊か百冊賣れたのでは爲方があるまい。先方で、「源氏物語」なんか感動して、興味をもつて翻譯するのは甚だ結構だが、此方で製造して行商的に押賣するのは、文學や藝術の方面では不似合である。宗教は人間界不思議な産物で、昔から經文の翻譯や説教などにより、強制的に異國人の心に喰入らうとしたが、文學がさういふ風にして効果を奏するであらうか。そして、文學の翻譯は經文の翻譯よりも六ヶしいやうである。

私の興味から云ふと、東西融和の手段とならうとなるまいと、日本の文學を相當によ

く翻譯して世界の文壇へ持出し、彼等の傑れた作家や批評家が如何にそれ等を鑑賞し如何なる論評を下すかを知りたいと思つてゐる。他山の石といふ言葉がある。英譯「源氏物語」に對する外人の斷片的批評にも、日本在來の批判とは異つてゐるところに妙味がある。その説の當否は別にしても、異國人の觀察といふことに特種の興味がある。古神道研究者メーソン氏の新著「神ながら」を讀んでも、ベルグソンの哲學などを應用して、理論的に神道を説いてゐるところに、清新な力を覺える。

日本で、明治文學や元祿文學や王朝文學の新檢討が行はれるのは、無論必要なことであるが、世界の文學として世界の文壇で縦横に検討されることは、一層愉快である。それによつて我々が啓發されるところが尠くないだらう。……だが、世界の文壇に持出して、光も失せないやうな日本の作家は、誰れと誰れとであらうか。菊池寛氏は、日本の文學では「萬葉集」と西鶴と芭蕉とだけを味へば十分だと云つてゐたが、果して然るか。この三つとも日本らしい味ひを有つてゐる傑れたものには違ひないが、いづれも簡素單彩である。私にも、西鶴は日本の生んだ不思議な天才のやうに思はれるが、この作家にしても、自分の才能を、行くところまで行盡させないで、途中で投出してゐるやうに思はれないでもな

ら。西洋の文學には、西洋の趣味には、簡素の妙味が乏しい、餘韻がない、滋味がない、錆

がない、云々と云はれてゐるが、老獪なる作家トマローカ氏は、その「日本小説」の最後の一章を、「お月様」と題し、可憐な少女をして傳統的日本の趣味を讚美させてゐるが、それが二重の諷刺となつて讀者の心を刺戟するのである。

少女は、お月様を見て、英雄豪傑を照らし四十七士を照らした昔の月を偲び、歌人の歌を思出し、山寺の鐘樓を思出した。月の光の冴えた人の氣のない磯邊をそゞろ歩きして物思ひに耽つてゐた。「わたしは心に物を思ふ時には、獨りぼつちでゐたい。日本人は西洋人のやうではない。……恥を知らぬ西洋人！……西洋人は身體をむき出しに出すことをいやがる。そのくせ精神を裸で出すことが平氣だ。彼等は最初から、愛情でも、最も深い感情に酔つて、それをみんな吐出してしまふ。そして、後でけろりとする。日本人は神經質でつゝましやかだ。心の底に深い思ひを蓄へて置く。だから魂が磨かれて、中身が豊かになる。氣品のある振舞に堪へられるやうに鍛へられる。」

少女が月光に魅せられて、日本通有の精神を喚起するのは、彼女が狐につままれでもしたかと思はれる。可憐な彼女はお國振りの月光感に耽つたあと、そこに現はれた外人の腕に身を委ねた。彼女は身内の者の極めた縁談に疑惑不満を感じてゐた

ので、外人のあまき言葉に親しみを覺えた。……そして、その夜彼女は片瀬の海に身を投じた。描寫の筆は詩を湛へて夢の如く運んでゐる。

餘韻、氣品、簡易、枯淡、鏗、澁味など、東洋文藝の妙所が説かれ、それが皆眞實であると思はれながら、かの少女にも比すべき新代の青年男女は、さういふ境地には活きた親しみを覺えずして、たとひ一知半解の誹り^{せいり}はあつても、エキゾチックのものに、今尙おのづから心が惹かれて行くのではあるまいか。

(昭和九年二月中央公論)

英譯「源氏物語」その他

英譯「源氏物語」

Arthur Waley と云ふ英人によつて翻譯された「源氏物語」を、ポツリ／＼讀んでゐる。そして、今までになくこの日本最大の古典文學に興味を感じてゐる。私は、學生時代に、「雨夜の品定め」までは、或國文學者の講義を正式に聽いてゐるし、幾十年かの間にいろいろの註釋本によつて略讀通してゐると云つてもいいのだが、いつも、氣力のない、ぬらぬらとした、ピンと胸に響くところのない、退屈な書物だと思つてゐた。ところが、今度英譯で讀むに及んで、はじめて物語の筋道がよく分り、作中の男女の行動や心理も理解され、敘事も描寫も鮮明になつた。専門の國文學者は別として、この名高い「源氏物語」を通過し、興味した者は、純文學者、或は文學愛好者のうちにも、甚だ稀れであらうと思はれるが、この英譯を新たに日本文に翻譯したら、世界的名小説として、多くの愛讀者を得るかも知れないと推察される。

私としては、黄昏の薄明りで、ぼんやり見てゐた「源氏物語」を、今度太陽の光か——それほどでなくても、冴えた満月の光で見直したやうな感じがした。國學の先生に云はした

ら、黄昏の世界が本當の源氏の世界であり、文章でも人物でも、朧月夜の朦朧としたところに、日本趣味の妙味があるのかも知れないが、さうすると、この英譯は、ウエレー氏の創作的翻譯と云つてもいいのだ。森鷗外の「即興詩人」が創作的翻譯として傑れてゐるやうなものである。ウエレー氏の文章を讀むと、なよ／＼とした文章が、彈力を帯びて生きてゐる感じがするが、氏は、原文に對して極めて忠實なる態度を採つてゐる。我々今日の日本人には難解な描寫を、器物衣裳の末に至るまで、洩さずに移さうとしてゐる。根氣のいいことは驚嘆すべきである。

ウエレー氏について、私はまだ多くを知らない。氏は、今春、五十四帖のすべてを譯し終るまでに十年を費してゐる。氏は一度も日本に來たことはない。英國博物館に於て獨力で日本の古典を學んだらしい。英國博物館には、河内本の寫しも藏されてゐるほどで、いろいろの註釋本も備つてゐるにちがひないが、それ等を十分に讀みこなしてゐるには驚かれる。日本人の助力があつたのかとも疑はれるが、その生彩ある譯文によつて判斷すると、凡庸なる外部の助力などは云ふに足りないのである。氏は數年前に重患に罹り、「源氏」の名譯も永久に未完のまゝで終るのではないかと氣遣はれてゐたが、運よく回復して、彼れの一生の大事業を爲遂げることが出來た。彼れのヒョロ高い身體は、骨と皮のやうに痩せてゐるさうであるが、それは、彼れの心酔してゐる東洋の古典の研究に精根を削られたた

めではあるまいか。彼れは、「枕草紙」をも翻譯してゐるが、さまざまの物語を讀んで、特に「蜻蛉日記」を推讀し、その迫眞の力を認め、直截な筆致を賞してゐるのによつても、彼れの文學鑑賞眼の凡庸でないことが察せられる。蜻蛉夫人の心理の動搖の表現は、現代歐洲の優秀なる小説に描かれてゐる婦人の心理描寫に比して遜色のないことを、彼れは日本人にも勝つてよく知つてゐる。彼れの「源氏物語觀」は、別冊として詳しく述べられるべく豫定されてゐて、紫式部も千年を隔てて異國に知己を得て、はじめて、古今東西有數の大天才である所以が、明晰に論斷されるらしく、私には期待されてゐる。六卷に分たれてゐる翻譯の序文に散見されてゐる斷片的批評を見ても、この譯者が紫式部の作家としての手腕に如何に憧憬してゐるかが想像される。

四十七士の復讐談や、ラフカチオ・ハーンの妙筆によつて傳へられた怪談などは、不思議な國の話として面白がられるのであるが、この「源氏」の英譯は、あり振れた翻譯ではない。私の手にしてゐる英譯の第一卷は七版を重ねてゐるほどで、既に英國の文學愛好者の注意を惹いてゐるが、全部完結の今日、日本文學に對する興味が、この傑れたる翻譯を通じて惹起されるかも知れない。英國に於ては、さき頃までガーネット夫人の翻譯を、それがさながら原本であるが如く見做して、露西亞文學が研究され批判されてゐたが、ウエレー氏の「源氏」は、末永く世界の代表的古典文學のうちに伍して、鑑賞されさうに思はれる。

千年前の日本の宮廷生活、貴人の戀愛遊戲には、トルコやベルシアのハレムの光景でも何ふやうに、歐米の讀者が好奇心を催すのであらうが、「源氏」の價値は無論さういふ話材の面白さだけではない。現代日本の新進の文學者が隨喜渴仰してゐたブルーストなどと一脈相通じるところがあると思はれてゐる。潜在意識を捉へてゐる點なのであらうか。絢爛たるマキモノの繰開かれてゐると思はれるばかりでなく、モザートの交響樂にも比べられてゐる。繪畫美、音樂美、それに多數の人物の描寫の妙、流轉の世相をそのままに見た博大な態度、ホーマー以來の世界の傑作十種を選ばゞ、そのうちの一として、榮えある黄金の椅子に坐するに値してゐるやうに思はれてゐる。

繪畫や彫刻とは異なり、日本の詩や小説は原語を解しない他國人には鑑賞される見込みはないやうに思はれてゐた。八月號の文藝春秋には、小宮豐隆氏が、「發句翻譯の可能性」と題し、芭蕉の「古池」の句の英譯を批評して不滿の意を洩してゐる。發句でも和歌でも、その妙味は他國語に移し難いことは極つてゐる。日本人が頭で考へて、かういふ翻譯したら、外人に解るであらうと索り／＼日本語を外語に移したのは、意味は正しきを得ても、妙味は傳へられないに極つてゐる。しかし、ウエレー氏のやうな天才が眞に日本の詩歌小説などを愛好し、心酔して、翻譯するやうになつたら、東西言語の相違の難關を突破し得られるのであらう。私は、英譯「源氏」を讀んでさう思つた。氏の如き人が續々現はれたな

ら、日本の文學も、繪畫同様に、世界的に鑑賞されるやうになるのである。

だが、我ながら不思議に堪へないのは、ウエレー氏の「The tale of Genji」が面白くつて、紫式部の「源氏物語」が相變らず、左程面白く思はれないことである。私は、ところどころ兩者を比較して讀んだ。原文は簡潔であると云へる。譯文は言葉數が多いが、これは止むを得ない。ハーンは發句などを譯するには、氣輕にパラフレーズするやうな態度を採つてゐるが、小宮氏の参照してゐる宮森氏の「古池」の譯の如く、緊張した用語の方が必しも適切であるとは云はれまい。「源氏」の譯も、強ひて原文通りにしたなら、何のことやら分らないものになるに極つてゐる。ウエレー氏は、しかし、決して原文の一語々々を無視しないとともに、それを説明化してはゐない。原文は簡潔とは云へ、頭をチョン斬つて、胴體ばかりがふらく／＼としてゐるやうな文章で、讀むに齒痒いのであるが、譯文はサクリサクリと齒切れがいい。絲のもつれのほぐされる快さがある。消極的の原文が積極的に翻譯されてゐるところが、甚だ多いが、譯者の筆が自からさうなつて行くところに、西洋文學と日本の古文學の相違が歴然としてゐる感じがされる。一例を挙げると、「若紫」のうち、後の「明石」の巻の伏線として、世をすねて、職を棄てても、なほ都へ歸らず、明石に止まりて、娘とともに暮してゐる播磨の前國司の噂が記されてゐるが、その噂として原文には、「さて其女は怪しうは有らず、容貌心ばせなど侍るなり。代代の國の司など、用意

殊にして、心ばえ見すなれど、更に承け引かず、我身の斯く徒らに沈めるだに有るを、此人一人にこそ有なれ。思ふさま異なり。若し我に後れて其志遂げず此思ひ置きつる宿世違はば、海に入りねと、常に遺言し置き侍る」と云つてゐるが、譯文には、「若し父の遺言に背いて、彼女自身の愚かな思ひに任せて、父の嚴命を無視するやうなら、父の亡靈が現はれて彼女を波の中に引摺込むと云つた」となつてゐる。

だから、専門の國學者が讀んだら、ウエレー氏の譯文は「源氏」離れがしてゐると云ふかも知れない。「思へど猶飽かさりし夕顔の、露に後れし程の心地を」と云つたやうな、日本文學に限つて有つてゐる言廻しは、完全に英語化される筈はないが、さういふ言葉の味を現はさうと苦心したところに、多分在來の西洋文學になかつたらしい味が煮染み出てゐるやうで面白い。

何處か遠い世界の話をかされてゐるやうでありながら、現代の人間の心がそこに描かれてゐるのは、どの傑れた古典に於ても見られるので、「源氏」の面白さもそこにあるのだが、私は原本と譯本とを比べて見て、自分が傳統的日本の文體について、案外に馴染が薄くなつてゐることを、今はじめて氣がついたやうに明かに認めたのである。傳統の潛勢力はつよい。また、傳統は重んじなければならぬといふやうな理論は理論として、大抵の文學愛好者が、「源氏」にはうんざりするにちがひない。昔から云はれてゐるやうに、「須磨」

「明石」まで辿りついたら、讀書の族も打留めなくなるのである。しかし、ウエレー氏の譯本を手にした文學愛好者なら、次ぎから次ぎへと讀みたくなるほどの興味に誘はれるに極つてゐる。翻譯も侮り難いもので、死せるが如き原作を活返いびくらせることもあるものだ、私は感じた。

故山口剛氏の「西鶴論」を讀んだ時に、「一代男」は、「源氏物語」の翻案であると云つたやうな意味の見解が下されてあつたのを珍らしく思つたが、ウエレー氏の譯本を讀んでゐる間に、山口氏の所説が思當つた。「一代男」は町人の「源氏物語」である。徳川時代の町人社會の好みに適した様式を採つて敘せられた情慾史である。そして英譯「源氏」は、西洋の讀者には、東洋の神祕國の古代の愛慾生活振りに、異國趣味の魅惑が感ぜられるであらう如く、我々には、それとはちがつた意味で、一種の異國趣味が感ぜられるのだ。平安朝時代の「光源氏」の好色史を讀んでゐるやうでもあり、また、何處か知らない國の面白い物語を讀んでゐるやうでもある。自分の國の有名な小説が英語に譯されて、西洋人に讀んで貰へるやうになつたことを、私は格別悦ばしいとは思はない。ウエレー氏の創作的翻譯によつて、今まで讀んだいろ／＼な小説とは異つた面白い作品に接したことを私は喜んでゐる。譯者自身は、自己の創意を示すよりも、異國の名作を忠實に譯すことにのみ心を注いだであらうが、私は譯者の豫期しなかつた、嶄新な創作的妙味の自おのづから横溢してゐるのを感じ

てゐる。……從來世に出てゐる日本文學の歐文譯とは全く類を異にしてゐると、私は思つてゐるが、それは買被りであらうか。

坪内博士のシェークスピア劇翻譯は、ウエレー氏の「源氏」の翻譯と並べて論ぜらるべきもので、私に取つては甚だ興味ある批評の題材なのであるが、今「改造」誌上でそれを論ずるのは差ささはりがありさうなので、他日に譲ることにする。

「顔世」と「無法人」

「春琴抄」讀美の聲には、作者も食傷したかも知れない。これほどの傑作を世に出した後には、暫く休養していゝ譯であるが、谷崎氏は容易に筆を收めないで、努力を續けてゐる。創作慾の旺盛なのは結構であるが、生活の資力を獲んがために無理をしてゐるのぢやないかと、疑はれないでもない。平安朝時代の「物語」の作者は、「盲目物語」とか、「春琴抄」とか云つたたぐひの者を、一つか二つか残しただけで、文學史上に不朽の名聲を傳へられたのである。文學はそれでいゝのだと思ふ。純粹の文學を職業とし、それによつて生活の資を得、或は享樂の費用を稼ぎださうとするのは、無法な所行のやうに思はれる。「源氏物語」の頃より近代まで、日本の傳統的作家氣質では、文を賣つて口を糊することは困難であつたばかりでなく、自慢すべきこととは思はれてゐなかつた。問賣往來にない職業

の現はれたのも、西洋文明輸入の結果であり西洋かぶれの結果であるが、西洋はどうであらうと、日本では、純文學を職業とすることは考へものである。これは今にはじまつた問題ではないのだが、谷崎氏の最近の努力を見て、新たにその問題を私は考へた。氏の如きは天分が豊かであり、その作風には多數の讀者の興味を惹くに足る素質を含んでゐるのだから、いくら書いても書榮えがする譯だが、氏ほどの天分を持合せない者が、純文學をもつて一生の稼業とするのは、賢明な處世法ではないに極つてゐる。菊池寛氏は、「大衆文學はつくりたくもないのに註文されてつくるものを云ひ、純文學は自分につくりたい要求があつて、はじめて出来るものだ」といふ意見を發表したさうだ。この定義の當否は別として、今日世に現はれてゐる純文學の多くが、作家の内心の要求から産出されてゐるとは思はれない。「源氏」とか「蜻蛉」とか、平安朝の物語などは、作家につくりたい要求があつて作られたのであるが、今日の作家は大衆文學であれ何文學であれ、「つくりたくもないのに註文されてつくりられる」のが、有振れたことになつてゐるのではあるまいか。註文されてつくるのはまだいゝ。註文もされず、内心の要求もないのに、次ぎから次ぎへとつくらなければならぬとしたら、純文學と云ひ純藝術と云ふも必竟空虚な名目に過ぎないではないか。フローベルは同じものを二度書かなかつたさうである。「ボヴァリ夫人」が讀者受けがしても、第二第三の「ボヴァリ夫人」を書かなかつた。他人のことを云ふのは遠慮して

自分の一生の文學徑路を回顧しても、私は同じことを繰返し／＼書いて來たのである。同じことでも、次第に筆が深いところへ進んで行つたのならいゝが、同じことを同じ程度の技巧で書くのなら、藝術としては無用な所業である。しかし、自分の才能を顧みず、文學を稼業とした上は、誰れしもさういふ無用な所業を續けて、自分でそれに甘んじるやうな習慣になるのである。

戯曲「顔世」を読みながら、大才谷崎潤一郎にしても、なほ多作の弊を免かれないのではあるまいかと、薄々感じるやうな氣持になつたが、それは私の間違つた考へなのであらうか。「顔世」は未完であつて、後篇に於てどういふ新味を齎すかも知れないので、今から斷定するのは早計に失するが、前篇だけについて云ふと、これは、有振れた谷崎物と云つた感じがする。無論、いゝ加減に書きなぐつたものではない。脂氣もたつぶりしてゐて、うま味に富んでゐる。だが、「春琴抄」盲目物語」その他の近作に比べると、態度がいくらかだらけてゐる。「春琴抄」などに於ては、人間の癡呆症を取扱ひながら、讀者に襟を正さしむると云つた感じを與へる。

「人間が富貴權勢を欲し、金銀財寶を得たがるのは何のためだ。詮する所は、その權勢と財寶とを以て天下の美色を我物になし、思ふがまゝの逸樂を貪らうため。さなくば富貴も金銀も一向使ひ途がないではないか。……兎角世間の奴原は體裁をつくるひ、外聞を氣に

致して、心にもないことを申すが、皆偽りで御座るぞ。正直なところを打ち開けたら、男と生れてさう思はぬ者が一人でもござらうか」と云ふのが、一篇の眼目で、これが高師直の心境であるとともに、作者の心境でもあり、讀者の共鳴するところでもあるのだが、かういふ人生態度に基く行動言語を、露骨にづか／＼と敘しただけの戯曲や小説は、案外感銘が深くないのである。「人間世界は、要するに色氣と慾氣とで動いてゐる。女と金だ」とは、俗人と雖もよく知つてゐて、よく口にしてゐて、またその原則によつて行動してゐるので、それだけのことなら、敢て藝術家を累はして教へられる必要もないのである。「顔世」は、自然主義時代の或種の小説のやうに、色慾萬能を乾燥無味な文字で現はしてゐるだけのものでなく、師直の心の動きに綾があり、言葉に艶もあり、面白く讀通されて次の幕が待たれるのであるが、それに關はらず、近來の谷崎物としては、やゝ安っぽい感じがし、調子の低い感じがする。この作家の昔の作品が思出される。……敢て云ふ。谷崎氏は、あれほどの大衆作家でありながら心の緊張を缺いた時には、調子の低いものを書く恐れがあるのだ。

里見弴氏の「無法人」も未完ものであるが、これまでの所は、兎に角面白く讀んだ。お孝といふ女の別れ話のはじまりから取消しまで、有振れた人情が克明に書かれてゐて、かういふ小説を讀むのも浮世の學問になるのであるが、實は私がかういふ有振れた人情話には飽いてゐる。日の下に新しきものなし。「源氏」以來、「蜻蛉」以來、男女の愛慾のもつれは大低似寄つたものなのであらう。しかし、作者の態度や技倆次第で、新しくもない人情話も讀者の心を捉へるのである。里見氏は、人情話の運びのうまい人で、氏の如き作家こそ、現文壇での小説家らしい小説家であると思はれるが、氏もこの頃は、多作の弊害を受けてゐるのではなからうか。清新味がないとか古くさいとか云ふよりも、調子が低い感じがする。

明治文學の研究がいくらか盛んになつてゐるらしく、紅葉山人の作品も新たに見直されるやうになつてゐるが、里見氏の小説は、今の作家のうちでは、最も紅葉の系統を引いてゐるやうなところがある。今度の小説を讀んでも、人情がかつた、妙な道德的な説諭を試むるところが、私をして紅葉を思出させた。

田舎新聞の文藝時評

信州の或新聞が一枚投込まれたので、何氣なく手に取つて見ると、生方敏郎氏の「文藝時評」が出てゐた。久振りに同氏の文章に接したのだが、なか／＼面白かつた。要點は、平凡で、これまで多くの人々によつて説かれたことなのだが、田舎の新聞に、さういふ凡説が今更らしく述べられてゐるのに微笑された。都會では氣が差して云へないやうな、また

言つても甲斐なき古めかしい説ではあるが、私はすべて同感である。

「反動政治は文藝の上に相當憂鬱な日影を投げるであらうことは、今から推測される。」しかし、「反動時代の政治が言論出版に對して、將來どういふ政策を執るとしても、商業主義ほどには害毒を流すことはあるまい」と云ふのが生方氏の結論なのだ。「地方では味噌を作るのに一年二年の日子をかけて、うまく作るが、東京では一月の中にも一日の中にも作り上げる。まづくてもいゝから早く作つて早く賣り、利廻りをよくしようとする。」「豚の腸を焼いて串にさし、焼鳥として賣る。地方人でこんな物を鳥と思つて食ふ者はないが、東京では食ふ者もあり食はせる者もある。インチキなやくざな原稿も、これを印刷して劃時代的作品、大家の傑作として賣り出す。その目的で誇大廣告をする。批評家と稱するヨク文士を買収して太鼓を叩かせる。」

生方氏も、田舎新聞に寄稿するためか、田舎者の味覺を都會人以上であるやうに云つてゐるが、誇大廣告に釣られてインチキ作品を購讀する者は、田舎に多いのであるまいか。「現代では版元が指名して自分に都合よき者に批評させる。批評の權威を疑ふ聲が起つても、そんな蚊の鳴くやうな反對を押しのけて、商業主義は勇敢に進み、眞の文藝の批評家は沈黙し、インチキ者と入れ代りになつた」と、生方氏の云つてゐるのは、必しも當を得てゐる譯ではないが、その傾向は十分に認められる。批評家もあまり勇敢になると、自分の

生活に差障りが起りさうである。……何稼業でも同じことかも知れないが、文學者の生活も、決してのび／＼した氣持で營んではゐられない。

今月、有力な雑誌を見てゐると、掲載記事の多くは、雑誌編輯者が、「かういふものを書いてくれ」と注文して書かせたものらしい様子が歴々と現はれてゐる。その月々の世間向きの頭目を見つけて、適當な文筆業者に注文して書かせるのは、雑誌製造法の定則となつてゐる。感興を重んじ自分の書きたいことを書かうとしても、それは雑誌社に容れられることは困難である。しかし、かういふ時世に、紫式部が「源氏物語」を書いたやうな氣持で、悠然として筆を執つてゐるやうな純文學者の存在は期待されないであらうか。「源氏物語」の翻譯に十年の歳月を費やし、その間感興を持続し得られたウエレー氏の純文學者の心境は、月々の雑誌の注文に應じて筆を執る外に能のない我々文筆業者の伺ひ得ざるところである。

「不安の文學」

この頃、文樂座に關する批判をいろ／＼な雑誌で讀んだ。古靱太夫と津太夫との間の葛藤が世間の注意を惹き、それが縁となつて文樂座藝術が論評されるやうになつたのである。「文藝春秋」には、數回に渡つて、「鶴澤叶聞書」といふ、その社會の名人の名人振りを

記録したものが連載されてゐる。「中央公論」には、石割松太郎氏の「人形淨瑠璃考」が掲げられてゐるし、「經濟往來」にも同じ論者が「文樂夜話」と題して、傑れた淨瑠璃語りや三味線弾きや、人形使ひは深奥不可思議にして、素人の伺ひ知られない藝道の極意を體得してゐるらしいことを説いてゐる。かういふものを讀むと、人形芝居のやうな面倒な藝術は、我々には十分に鑑賞される望みは、一生かゝつたつてなさうに思はれるが、それとともに、「宮守酒」とか、「壺坂」とか、「日向島」とか、その他多數の、純文學的價値の甚だ乏しき作品を、あゝでもない、かうでもない、いぢりまはして表現しても、詰らないではないかと思はれぬでもない。彼等藝術家は、瑣末な表現法に熱血を濺ぎ、互ひに拙技を罵倒したりしながら、肝心の原作については、それが天與の神品であるかの如く、一點の疑惑をも挿まないで受入れてゐるのが、私には不思議に思はれる。何處の國でも音楽家や俳優はさういふ態度で原作に對するのが正しいので、原作を侮蔑してかゝつたら、音楽も演劇も成立しないに極つてゐるが、しかし、それには、原作を撰擇して、最も傑れたものを採らなければなるまい。自然淘汰の法則により、音楽でも戯曲でも、傑作だけが後世に残つてゐる譯だが、しかし「宮守酒」や「壺坂」その他が、不朽の傑作なのであるかと私は訊ねたい。「源氏物語」ならこそ、十年の苦勞を重ねても翻譯する氣にもなれたのであらうが、際物の通俗物に心魂を悩ますのは張合ひのないことではあるまいか。「文藝春秋」の街上雜評

のうちに、文樂座の東京出演に對して、「この暑いのに、まあよくあんなものを金まで拂つて聞きに行く人のある事だ。昔のものを保存しなければならぬといふ事は、それが必しも立派なものだといふ事にはならぬ。……何にしても一體あの何處が今日の人々に面白いのだらう。僕には謎だ」と云つてゐるのも、無知の暴言とは言切れない。私も文樂座の古典藝術を耳目に觸れてゐるうちに、ともするとさういふ感じに打たれることがある。

しかし、石割氏の説明や、三宅周太郎氏の研究を熟讀してゐると、彼等「操」藝術一派の藝術の容易でないことだけは、私にも想像される。能樂でも、さまざまの江戸音楽でも、封建時代に榮えた藝術は、いづれも同様に、不思議な凝り方をしたのであらう。それが今日に傳つてゐるのだ。封建的であれ、末梢的であれ、或は獨合點であれ、兎に角彼等の立場に於ての藝術至上の境地を會得してゐるのは羨ましい。日蓮宗であれ、大本教であれ、或は天理教であれ、自己の宗教を確保して安んじてゐる男女は羨むべしといふ意味で羨ましいのである。

眞に藝術至上の境地に安んじてゐる純文學者なら、大衆文學の跳梁も、ジャナリズムの跋扈も、雲烟過眼視してゐられる譯である。日本の昔には、さういふ藝術家が少くなかつた。戦亂の時代、すなはち連続した非常時に、茶道歌道繪畫道などに没頭して、そこに、自己の生命の踊躍を楽しんでゐたものもあつた。さういふ日本の傳統的藝術家氣質は、今

日は失はれてゐる。淺薄とされてゐる。明治以來の文學の流れに漂はされて來た我々は、最早日本流の藝術至上主義者にはなれなくなつてゐる。「黒潮」といふ同上雜誌に、津太夫と古靱とを比較して、古靱は、用意周到で、抜け目がないが、津太夫は、東洋的に間の抜けた幼童のやうであると云つて、後者の方の肩を持つてゐたが、藝術の天國へ入るために嬰兒の心を有てよと説諭されても、それは、今日の藝術家に取つては、不可能な空言である。

それで、二葉亭以來の日本の新文壇は、深淺強弱の相違こそあれ、不安の文學の連続である。唐木順三氏は「文藝春秋」に於て、井汲清治氏は「經濟往來」に於て共に、「不安の文學」を論じてゐる。今日の社會状態が不安であるが故に、文學の不安も氣になるのであるが、明治以後、西洋近代文學の感化を受けて、人間社會や自己生存の真相に目を注ぎだして以來、また文學を職業として原稿料によつて衣食の資を得んと努力しだして以來、正直なもので、不安の影が書いたものに附纏ふやうになつたのだ。これは如何ともし難いのである。數ヶ月前の「改造」誌上で、豊島與志雄氏の「立枯れ」を讀んだ時、作品としての出来不出来は別として、そこに漂つてゐる人物の氣持、或は作家の主觀と云つたやうなものに心を打たれた。その氣持その主觀は見窄らしく、たよりないものであつたが、實は、私などが以前抱いてゐた氣持と似通つてゐるので、同病相隣れむの感を起したのである。

かういふ小説は、私は書きたくないと思つてゐる。かういふ心境からは脱却したいと、餘程前から思つてゐる。唐木氏の時評のうちに引用され、卓見抜ひされてゐる藤原定とかの説には、「無の中に確かな存在を求めねばならぬ」とか「死の中に生を見出す」とか云つてゐるが、そんな抽象的哲學的な考へは、私など二三十年も前から考へてゐる。しかし、いくら机の上で何年考へたつて、自分の心魂は舊の如くである。「無の外に確かなものは何もない。従つてわれは無の中に確かな存在を求めなければならぬ」と、藤原氏は結局の問題を提出してゐるさうだが、「求めなければならぬ」とも、求めなければ仕方があるまい。

「立枯れ」は、藝術的牙えのないみゝつちい小説であつたが、私に取つては、この小説は眞實なりと感ぜられた。不安を感じてゐる人間が不安でない眞似をしたつて仕方がないので、不安に身を任せるより外、どうにもならないのであらう。かういふ小説は讀者に慰藉を興へはしない。力を興へはしない。社會や人生の疑問に對して何等の解決をも興へはしない。だから、小説の原則に照らして、有つても無くつてもいゝやうな小説であるとも云はれよう。それにも關はらず、私は、見窄らしい眞實を、見窄らしいまゝに、何の虚飾も施さないで書上げた作品を、たとひ尊敬はしないまでも、侮蔑する氣にはなれないのである。

重ねて云ふ、私などは藝術至上主義者を羨望しても、自分では、その境地に安んじてゐられない。能樂藝術や文樂座藝術家や、茶道歌道の名人など、日本傳統の古典藝術家達のやうに、藝すなはち自己の人生と云つたやうになりきることは不可能である。

それで、二三氏の「不安の文學」論が、今月の雜誌に現はれたものを讀んで、「さてこそ」と、私は適切な問題に思當つた。私の目に映る明治以來の文學史は、「不安の文學」史であり、私の文學も、昔から今まで、要するに、「不安の文學」であつた。自然主義の殘黨であるからさうだと、簡単に斷定されるかも知れないが、私自身はどうもさう思へないのだ。「立枯れ」の如きは、不安の眞實を、何の虚飾も施さないで書いてゐるが、文壇には、不安の眞實を、理論で誤魔化したり、文字で粉飾したりしてゐるに留る作品が少くないので、本當に不安を突抜け、腹の底から不安を克服した作品なんかは、私には見當らないのである。

「女性の心」

千年の昔の小説でありながら、「蜻蛉日記」には、女性の心が粉飾を施さずして實によく書かれてゐる。「源氏物語」も、作者が女であるために、女の氣持がよく出てゐる。しかるに、今日の女派作家には、女だてらマルクス論を振廻かまはするやうな勇者はあつても、女性通

有の心理を抉り出したやうな作品を發表したものはなさうである。男性作家の作品にしても、女性をよく描いたものは少い。女の心は單純だから、男を描くほどに女を描くのは困難でないと云つた男性作家もあつたが、それは、性の相違のために、異性の心をよく洞察し得られないのに氣づかず、早呑込みをするためではあるまいか。谷崎氏の大才にして、女性の肉體の描寫は巧みであつても、女性の心理については、觀察が甚だ大まかである。

この頃讀んだもので、谷崎精二氏の「ハイネ」、廣津和郎氏の「訓練された人情」、室生犀星氏の「哀猿記」など、いづれも、或種の女性がよく書かれてゐて面白かつたが、私には、何だか少しあま過ぎる感じがした。芹澤光治良氏の「貸しピアノ」には、短い敘事の間に、或女の心の動搖が甚だよく現はれてゐると、私には思はれた。そして、私は同氏の近刊の小説集「明日を逐うて」が手元にあつたので、略通讀した。興味の一半は、佛蘭西や伊太利が舞臺になつてゐるため、私は曾遊の地を思出して、氣儘な空想に耽つた。讀んでゐるうち、この作者の小説は、以前岸田國士氏の戯曲を愛讀してゐた讀者のやうな種類の青年男女に好まれるのではあるまいかと思はれた。さういふ程度の清新味がある。無論、芹澤氏のは、岸田氏のよりは底が浅く、藝術味も稀薄である。その代り、思はせ振りのいや味もない。「晝寝してゐる」夫椅子を探すは、少しだれてはゐるが、なか／＼面白く書きこ

なされてゐる。男と女の氣持が、流るゝ如く自然に敍せられてゐる。だが、この作者はいくつも書續けると、自分の作風に於ての月並に墮しはしないかと氣遣はれた。すでに「橋の手前」なんかは、月並臭がして私は好まない。この小説でも、女の心はよく書けてゐるが、作者が時代思想を理解してゐるらしく見せかけてゐるところに、生氣のない月並臭を私は感ずる。

(昭和八年九月改造)

再び英譯「源氏物語」につきて

「源氏物語」が脚色されて、若い歌舞伎俳優の一團によつて上演されるさうである。戯曲
缺乏の今日、古典を舞臺の上で現代化して鑑賞するのも、一つの珍らしい思ひつきである。
この物語は、日本の最大の小説として尊重されて來たのだが、どういふ所が勝れてゐるの
か、詳しい研究はまだされてゐない。この頃は日本の古典の研究も、一部分の學者の間に
は可なり盛んになつてゐるらしく、「源氏」研究を一生の事業とするやうな篤學者もあるさ
うだが、今に、「文學でも日本は世界を相手に負けない」と確信し得られるやうな時代が來
るかも知れない。

明治以後は、日本の文學は西洋の文學に壓されて、何だか影が薄かつたが、明治以前に
は、支那文學に比べて、幅のきかない、さえない姿を見せてゐた。徳川家康などが自分の
封建制度を維持するためには、屈強な思想として漢學を奨励したのではないかと思はれる
が、徳川時代の豪傑は、維新の志士にいたるまで、自分の思想を現はし感情を漏らすのに、
支那の詩文の形を模倣して得意であつた。日本主義のこりかたまりのやうな人でも、支那
文人の糟粕を嘗めたやうな詩文を作つて、心にやましく感じてゐないやうであつた。私な
ども、少年時代から漢文に親しんで、日本化された漢文調には快感を覚えてゐたが、純粹

の和文は、もどかしくて讀むに堪へなかつた、言靈の幸はふ國にどうしてあゝいふ文章が
榮えたのか疑はれた。

概して、漢文は男性的であり和文は女性的であると、私など子供るときから教へられて
ゐたが、さうすると、日本では、文章道では、女性が國粹を擁護し、男性は支那文學の植
民地かせぎをして甘んじてゐたやうなものだ。今日、私などが試みに、國文の粹である王
朝文學を讀んでみると、それ等の文章は頭腦の倦怠を覺えさせ、齒がゆい思ひをさせ、審
美的快感を起しかけても、絶えず妨げられがちである。「源氏」を悪文呼ばはりするのを、
必しも暴言とは思はれない。「榮華物語」にしても「大鏡」にしても、讀みづらいこと甚だし
い。かういふ文體の中に没頭して特殊の修養を重ねた者だけが、他のうかゞひ知らない妙
趣を感得するのであらうか。我々の祖先が自國傳統の文章よりも、漢文に一層多くの魅力
を感じたのも當然のやうに、私には思はれてゐた。

國文の研究者は、學問のための學問をしてゐる學究たるに留まつて、あんな古文學によ
つて自己の審美感を満足させてゐるのではあるまい。「源氏」を通讀しなから欠伸もせず、
面白さうに陶醉することがあるのだらうかと疑つてゐた。現に、明治以來の文壇人で小説